

# 坑夫

夏目 漱石

*iNovel*

電子書籍化 楓出版  
収録 青空文庫



さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いもんだ。いつまで行つても松ばかり生えていていつこう要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で発展してくれなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つたまま松と睨めつ子をしてゐる方が増しだ。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ歩いて来たたら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇の神楽堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからべつ平押しにここまでやつて来たようなものの、こうやたらに松ばかり並んでいては歩く精が

ない。

足はだいぶ重くなっている。膨ら脛ふくはぎに小さい鉄の才槌さいづちを縛り附けたように足搔あがきに骨が折れる。袴あわせの尻は無論端折はしおつてある。その上洋袴ズボン下さえ穿はいていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじゃ所詮敵しよせんわない。

掛茶屋がある。葭簀よしずの影から見ると粘土ねばつちのへつついに、錆た茶釜ちやがまが掛かっている。床几しょうぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、二三足草鞋わらじがぶら下がって、袴はんてん天だか、どてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廢よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の袴天ちゆうとどてらの中ちゆうを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒く

なつた齒を、厚い唇の間から出して笑っている。これはと少し気味が悪くなり掛ける途端に、向うの顔は急に真面目になった。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相に出つ喰したものに見える。ともかく向うが真面目になつたのでようやく安心した。安心したと思う間もなくまた気味が悪くなつた。男は真面目になつた顔を真面目な場所に据えたまま、白眼の運動が気に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額とじりじり頭の上へ登って行く。烏打帽の廂を跨いで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降つて来た。今度は顔を素通りにして胸から臍のあたりまで来るとちよつと留まつた。臍の所には墓口がある。三十二錢這入っている。白い眼は久留米緋の上からこの墓口を

覗ねらつたまま、木綿もめんの兵児帯へこおびを乗り越してやっと股倉またぐらへ出た。股倉から下にあるものは空脛からすねばかりだ。いくら見たつて、見られるようなものは食くツ附ついちやいない。ただ不断より少々重たくなっている。白い眼はその重たくなっている所を、わざつと、じりじり見て、とうとう親指の痕あとが黒くついた俎下駄まないたげたの台まで降くだつて行つた。

こう書くと、何だか、長く一所ひとところに立たつていて、さあ御覧下さいと云わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになつたから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、このつもりが少々覚束おぼつかなかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵こしらえて、俎下駄ねじを振まぎわる間際には、もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものである。じりじり

見るんだから定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違ひ。じりじりには相違ない、どこまでも落ちついてゐる。がそれで滅法早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてゐる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩くり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだらうか。さんざつ腹冷かされて、さあ御帰り、用はないからと云う段になつて、もう御免蒙りますと立ち上つたよなものだ。こっちは馬鹿氣ばかげている。あつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立つた。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしまつた。と思うとまた足が重くなつた。——この足だもの。何しろ鉄の才さいづち槌を双方の足へ縛りしば付けて歩いてゐるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満更まんげん持前

の半間はんまからばかり来たとも云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしていられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家うちへ戻る了りようけん簡はない。東京にさえ居おり切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく気はない。休むと後うしろから追つ掛けられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の中を切つて廻つた日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損そくなつた写真のように曇つている。しかもこの曇つたものが、いつ晴れると云う的あてもなく、ただ漠然ぼくぜんと際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いてかけても走かても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれな

いから歩くので、このぼんやりした前途を抜出すために歩くのではない。抜け出そうとしたつて抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立った昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松が厭あきるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のために歩いているんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多めったにない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇った世界中へだんだん深く潜もぐり込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代よが違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆しやばが違ちがう。そのくせ暖かな朗ほからかな東京は、依

然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭ひかげから呼びたくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々ぼくぼくたるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分自分はふらふら迷い込むのだから心細い。

この曇曇った世界が曇曇ったなりはびこって、定業じようごうの尽きるまで行く手を塞ふさいでいてはたまらない。留とどまった片足を不安の念に駆かられて一歩前へ出すと、一歩不安の中へ踏み込んだ訳わけになる。不安に追い懸かけけられ、不安に引ひつ張はられて、やむを得ず動うごいては、いくら歩いてもいくら歩いても埒らちが明あくはずがない。生涯しょうがい片かたづかない不安の中を歩いて行くんだ。とてもものに曇曇ったものが、いっそだんだん暗くくなってくれればいい。暗くなつた所をまた暗くい方かたへと踏み出して行いったら、遠とほからず世界よが闇やみに

なつて、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなつてくれず、と云つて暗くもなつてくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩こめている。これでは生甲斐いきがいがない、さればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。後あとからぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からど、

きんともぞつともしない。どきんともぞつとも勝手にするが善いと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がっていたんだらう。その上いつその事を断行するのが今が今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日あしたになるか明後日あさつてになるか、ことに由よつたら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差支さしつかえないと高たかを括くくっていたせいかも知れない。華巖けげんの瀑たきにしても浅間あさまの噴火口ふんかこうにしても道程みちのりはまだだいぶあるくらいは知らぬ間まに感じていたんだらう。行き着いていよいよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇った世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度まぬかにおいて免れる望があると思えば重い足も前まへに出し甲斐がある。まずこのくらいの決心であつたらしい。しかしこ

れはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的<sup>めあて</sup>に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責<sup>せめ</sup>ても慰藉<sup>いしや</sup>と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくっちゃならないと思いつながら、雲を攫<sup>つか</sup>むような料簡<sup>りょうけん</sup>で歩いて来ると、後<sup>うしろ</sup>からおいおい呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根<sup>しょうね</sup>があるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持た

なかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はずつきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の袷天とどてらの合の子が出て、脂だらけの歯をあらわに曝しながらしきりに自分を呼んでいる。

昨夕東京を立つてから、まだ人間に口を利いた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも予期していなかった。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸けられたのだから——粗末な歯並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然すると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装も動作もあんまり気に入らない。

ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪けんおの念が胸うちの裡きざに萌もし掛かけたくらいである。それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打つて變つた一種あたにかみの温味ぬかみを帯おびた心持あしごで後歸あとがえりをしたのはなぜだか分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つていた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反対の見当けんとうに取つて返す事になる。暗い所から一歩ひとあし立ち退のいた意味になる。ところがこの立退たちのかきが何となく嬉うれしかった。その後のちいろいろ經驗をして見たが、こんな矛盾は到いたる所に転ころがつている。けつして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格なんてものはないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこしらえるのと云つて得意がつている。読者もあの性格がこうだの、

ああだのと分つたような事を云つてるが、ありや、みんな嘘うそをかいて楽しんで、嘘を読んで嬉しがってるんだろう。本当の事を云うと性格まなと纏まつたものはありやしない。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたつて、小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手て古こずるくらい纏まらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まらなく出来上つてるから、他人ひとも自分同様し締まりのない人間に違ちがないと早はや合が点てんをしているのかも知れない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉めくらじま縞そばの傍そばまで行くと、どてらはさも馴なれ馴なれしい声で

「若い衆しゆさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めている。自分は好加減いいかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどてらから若い衆さんなんて云われて快よく返辞をする自分じゃない。返辞をするにしてもうんとか何だとかで済したろうと思う。ところがこの時に限って、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような気持がした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けっしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見做みなしたような語気で、

「御前おまえさん、働く了簡りょうけんはないかね」

と云った。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟

していたんだから、藪やぶから棒ぼうに働はたらく了簡りょうかんはないかねと聞かれた時には、何と答えて善いいか、さっぱり訳わけが分らずに、空脛からすねを突つ張つたまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺ながめていた。

「御前さん、働はたらく了簡りょうかんはないかね。どうせ働はたらかなくっちゃならないんだろうう」

とどてらとどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹も、どうか、こうか、受け答の出来るくらいに眼前じきようの事況えとくを会得えとくするようになった。

「働はたらいても善いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やっと片づいたと云うものは、

単純ながら一順の過程を通つておる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く氣でいた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫然びんぜんな感がある。と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほどさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背そむかねばならぬほどに自分は薄弱なものであつたと云う事をも証拠立てている。手短てみじかに云うと、自分は暗い所へ行く氣でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引つかかりが出来れば、得えたり賢かしこしと普通の娑婆しゃばに留まる了簡りょうかんなんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引つかかつてくれたんで、何

の気なしに足が後向きうしろむに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にするかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖こわくなつてぞつとしたに違ちがない。それほどの娑婆しやば気が、戻り掛ける途端とたんにもう萌きざしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆しやば気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようにどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆しやば気が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末うまなどてらだが非常に旨うまく自分の心理状態を利用した勧誘

である。だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚めて見れば、自分はいつか娑婆の人間になっている。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくっちゃ駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと云うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもっともだと首肯した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」と自分はここで再び聞き直して見た。

「大変儲かるんだが、やって見る気はあるかい。儲かる事は受合なんだ、どてらは上機嫌の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待ってい

る。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌あいぎょうにもなんにもなつちやいない。元来がんらい笑うだけ損になるようにでき上がつてる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやってみましょう」

と受けてしまった。

「やってみる？ そいつあ結構だ。君儲もつかるよ」

「そんなに儲けなくつても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだなんて云

われちや困るが。きつとやるだろうね」

ど、てらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかった。云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやって退けるが、万一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずにやる気ですと云ったんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身上だつて、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区別はありやしない。すべてがだるうに變化してしまふ。無責任だとも云われるかも知れないが本当だから仕方がない。これからさきも危あやしい

ところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略話ほぼが纏まとつたものと呑み込のんで

「じゃ、まあ御這入おはいり。緩ゆつくり御茶でも呑んで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入つてどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神かみさんが妙な臭においのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減つて来た。減つて来たのか、減っていたのに気がついたのか分らない。暮口がまぐちには三十二銭這入つている、何か食おうかしらと考えていると

「君、煙草たばこを呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角かどが裂けてるのは仕方がないが、何だか薄穢うすぎたなく垢あかづいた上に、び

しやりと押し潰つぶされて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてるよ  
うに思われる。袖そでのないど、で、だから、入れ所に窮きつして腹掛はらがけの隠しへで  
も振ねじ込んで置くものと見える。

「ありがとうございます、たくさんです」

と断ると、ど、で、らは別に失望ていの体もなく、自分でかたまつたうちの一本  
を、爪垢つめあかのたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺しわだら  
けになつて、太刀たちのように反そっている。それでも破けた所もないと見え  
て、すばすば吸うと鼻から煙けむが出る。際きわどいところで煙草の用を足して  
いるから不思議だ。

「御前さん、幾年いくつになんなさる」

ど、で、らは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりするようだが、

何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲もつかるときには君になって、不断の時には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になっているらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向うしろむきになつて盆を拭ふきながら云つた。後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独ひとり言ごといだけど、てらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なんだか分らなかつた。するとど、てらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくっちゃならないような語気である。自分はだまつて床几しよきを離れた。

正面に駄菓子だがしを載せる台があつて、縁ふちの毀れた菓子箱の傍そばに、大きな皿がある。上に青い布巾ふきんがかかつている下から、丸い揚饅頭あげまんじゅうが食はみ出ししている。自分はこの饅頭が喰くいたくなつたから、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつら饅頭まんじゅうの皿を覗のぞき込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留まるや否いなや足音にパツと四方に散つたんで、おやと思ひながら、気を落ちつけて少しく揚饅頭を物色していると、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せたように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色きいろい油切つた皮の上に、黒いぼちぼちでたらめが出鱈目にできる。手を出そうかなと

思う矢先へもつて来て、急に黒い斑点はんでんが、晴夜せいやの星宿せいしゆくのごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易へきえきしてしまつて、ぼんやり皿を見下みおろしていた。「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日おととい揚げたばかりだから」かみさんは、いつの間にか盆を拭ぬいてしまつて、菓子台むじょうがわの向側に立っている。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思つたか、いきなり、節太ふしぶとの手を皿の上に翳かぜして、

「まあ、大変な蠅ばちだ事」

と云いながら、翳かした手を豎たてに切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸はしで、饅頭をぽんぽんぽんと七つほど挟はさみ込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床几しよくいの上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ歸つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺ながめながら、どてらに向つて

「二つどうです」

と云つて見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かほど、どてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴やつを取つて頬張ほおばつちまつた。唇くちびるの

厚い口をもごつかせているところを観察すると、満更まんざらでもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗きれいなのを摘つまみ出して、あんぐりやった。油の味が舌の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦にがい餡あんが卒然として味覚を冒おかして来た。しかしこの際だから別にしまったとも思わなかった。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑ふへ呑のみ下くだしてしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移つてゐる。自分に比較すると大變速力が早い。そうして食つてる間は口を利きかない。働く事も儲もつかる事もまるで忘れてゐるらしい。したがつて七つの饅頭は呼吸いきを二三度するうちに無くなつてしまつた。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬またたく間まにどてらのためにしてやられた

のである。

いかに逡巡しりごみをするほどの汚きたならしいものでも、一度皮切りをやると、あとはそれほど神経に障さわらずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐ちんぷの真理になつてしまつたが、その時は饅頭まんじゅうを食いながら少々呆あきれたくらい後あとが食いたくなつた。それに腹は減つている。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた饅頭をぱくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、神経などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのんで饅頭の御代おかわりを貰もらつた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿が床几しょうぎの上に乗

るや否や、自分の方でまず一つ頬張ほおばった。するとど、てらも、「や、すまない」  
とも何とも云わずに、だまって一つ頬張ほおばった。次に自分がまた一つ頬張ほおば  
る。次にど、てらがまた一つ頬張ほおばる。互違たがいちがいに頬張りっ子をして六つ目まで  
来た時、たった一つ残った。これが幸い自分の番に当たっているので、ど、  
てらが手を出さないうちに、自分が頬張ほおばってしまった。それからまた御  
代りを貰った。

「君だきみいぶやるね」

とど、てらが云った。自分はだだいぶやる気も何もなかったが、云われて見  
るとだだいぶやるに違ちがない。しかしこれは初手しよてにど、てらの方で自分の食く  
たかないものを、むしゃむしゃ食くって見せて、自分の食慾じきよを誘致きざした結  
果あずかが与あつて力あるようだ。ところがど、てらの方では全然ここっちの責任せきにんで

だいぶやつてるような口こうき気であつた。だから自分は何だかどてらに對して弁解して見たい気がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫つかむようにどてらにも責任があるんだらうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙つていた。すると

「君、揚饅頭がよっぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一昨日おととい揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌きらひだとは無論云われない。だから今度も黙つていた。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような気がし

た。そこでますます黙ってしまった。黙って聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云つてる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見当がつか  
なかつた。とにかく饅頭はどうでも構わないから、かんじん肝心の労働問題を  
ききただ聞糾して見ようと思つて、

「さつき先刻の御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を  
食わなくつちやならない身分なんです、いったいどんな事をやるんで  
すか」

とこつちから口を切つて見た。どてらは正面の菓子台をなが眺めていたが、  
この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、もつ儲かるんだぜ。うそ嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やり

たまえ」

と、またぞろ自分を君呼よばわりにして、しきりに儲けさせたがっている。こつちへ向き直つて、自分を誘い出そうと力つとめる顔つきを見ると、頬骨の下が自然じねんと落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎あごの枠わくで角張かくばっている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形ゆみなりにでき上つた皺しわが深く映っている。この様子を見た自分は何となく儲もうけるのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いいです。しかし働く事は働くです。神聖な労働なら何でもやるです」

どてらの頬あたりの辺あたりには、はてなと云う景色けしきがちよつと見えたが、やがて、かの弓形ゆみなりの皺しわを左右に開いて、脂やにだらけの歯を遠慮なく剥むき出して、そ

うして一種特別な笑い方をした。あとから考えるとどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかつたらしい。いやしくも人間たるものが金儲かねもつけの意味さえ知らないで、こむずかしい口巧くちこうしや者な事を云うから、気の毒だと云うのでどてらは笑つたのである。自分は今が今まで死ぬ気でいた。死なないまでも人間のいない所へ行く気でいた。それができ損そこなつたから、生きるために働く気になつたまでである。儲もうかるとか儲からないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京において親の厄介やっかいになつてゐる時分からなかつた。どころじゃない儲主義もうけしゆぎは大いに軽蔑けいべつしていた。日本中どこへ行つてもそのくらいな考えは誰にもあるだろくらいに信じていた。だからどてらがさつきから儲かると云うのを聞きたんびに何のためだろうと不思議に思つていた。無論しやく癪には

障さわらない。癩さわに障るような身分でもなし、境遇でもないから、いっこう平気ではいたが、これが人間に対する至大の甘言で、勧誘の方法として、もつとも利目ききめのあるものだとは夢にも想おもい至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいっこう通じなかつた。今考える  
と馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたとて、その笑いの収まりかけに、「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日きのう自宅うちを逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃劍げっけんの稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくっちゃあならない身分

です」

「そうだろう。働いた事がなくっちゃ……じゃ、君、まだ儲けた事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙っていると、茶店のかみさんが、菓子台うしろの後から、

「働くからにや、儲けなくっちゃあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようたって、今時そう儲け口が転がってるもんじゃない」  
と幾分か自分に対して恩に被きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行った。このそうさが妙

に気になって、ことによると、まだその後あとがあるかも知れないと思つた  
せいか、何気なく後姿うしろかげを見送つていると、大きな黒松の根方ねがたのところへ  
行つて、立小便たちしょうべんをし始めたから、急に顔を背そむけて、どてらの方を向いた。  
どてらはすぐ、

「私わたしだから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨い話うまをするんだ。  
これがほかのものだったら、受合つてただじゃ話わしつこない旨い口なん  
だからね」

とまた恩に被きせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張つて答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云う。自分は黙って聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅山やまへ行つて仕事をするんだが、私が周旋さえすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんじやないか」

自分は何か返事を促うながされるような気がしたけれども、どうもどてらの調子に載のせられて、そうですとは答える訳に行かなかつた。坑夫と云えば鉞山の穴の中で働く労働者に違ない。世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくつて、もっとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合すどころの騒さわぎじゃない、おやと思つくりい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種

属があると云うのは、大晦日おおみそかの後にまだたくさん日が余つてると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどど、らがこんな事を饒舌しやべるのは、自分を若年じゃくねんと侮あなどつて、好い加減に人を瞞だますのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とつつけからすぐに坑夫たふなんだからね。坑夫なら楽なもんさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまちまって、好きな事が出来らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めっから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持って行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うな

るほど溜るばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。——今のうち儲けなくっちゃ損だ」

と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占くちうらで、全

然どてらと同意見を持つているように思われた。無論それでよろしい。

またそれでなくつてもいっこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであった。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出しでかした不都合やら義理やら人情やら煩悶はんもんやらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日きのうまでの自分の事を考えると、どうしたって、こ

んなに温和おとなしくなれる訳がないのだが、実際この時は人に逆さかうような気分は薬にしたりくつても出て来なかつた。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかつた。おそらく考える余裕がなかつたんだろう。人間のうちで纏まとつたものは身体からだだけである。身体が纏まとつてるもんだから、心も同様に片づいたものだと思つて、昨日と今日きょうとまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済ましているものがない。ある。のみならずいったん責任問題が持ち上がつて、自分の反覆はんぷくを詰なられた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分ですら、無理と思ひながらも、いささか責任を感じずるようだ。して見ると人間はなかなか重宝ちゆうぼうに社会の犠牲になるように出来上つたも

のだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した鼻<sup>ひ</sup>肩<sup>い</sup>目<sup>き</sup>なしの真相から割り出して考える  
と、人間<sup>あて</sup>ほどのにならないものはない。約束とか契<sup>ちか</sup>いとか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯<sup>たて</sup>にとつて  
相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行は野暮<sup>やぼ</sup>の至りである。大抵の約束  
を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるに  
もかかわらず、その無理を強<sup>しい</sup>て圧<sup>お</sup>しかくして、知らぬ顔でやって退<sup>の</sup>ける  
までである。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに気がつ  
いたなら、むやみに人を恨<sup>うら</sup>んだり、悶<sup>もた</sup>えたり、苦しまぎれに自<sup>う</sup>宅<sup>ち</sup>を飛び  
出したりしなくつても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶

店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変ったところを、他人扱いに落ち着き払って比較するだけの余裕があつたら、少しは悟れたろう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかつた。ただ口惜しくつて、苦しくつて、悲しくつて、腹立たしくつて、そうして気の毒で、済まなくつて、世の中が厭になつて、人間が棄て切れないで、いても立つても、いたたまれないで、むちゃくちゃに歩いて、どてらに引つ掛けて、揚饅頭あげまんじゅうを喰つたばかりである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫続つなぎの取れない魂がいとどふわつき出して、實際あるんだか、ないんだかすこぶる

明瞭めいりょうでない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、朦朧もうろうと一団の妖氣ようふんとなつて、虚空遥こくうはるかに際限もなく立て罩こめてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲もうける事ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりやどこがいいんだとか、何とかかとか理窟りくつを捏こねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘弁かんべんしないところを、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する気が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が

五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強<sup>しい</sup>て殺してしまふほどの無理を冒<sup>おか</sup>さない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲かろうが、儲かるまいが、とんと問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相容<sup>あひい</sup>れぬ法螺<sup>ほら</sup>を吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格に尠<sup>すくな</sup>からぬ汚点を貽<sup>のこ</sup>す恐れがあつても、まるで氣にならなかつたんだろう。こんな時には複雑な人間が非情に単純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉<sup>うれ</sup>しい心持がした。自分は第一に死

ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくつても好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと変化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと言ふ決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかつたし、第一と交渉を絶つほど遠くにもいなくなつたと見える。働きながら、人のいない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か

当初の目的にも叶かなう訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑あなの中で、日の目を見ない家業かぎようである。娑婆しやばにいながら、娑婆から下へ潜もぐり込んで、暗い所で、鉞あらがね塊つちくれ土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごているが、自分ほど坑夫に適したものはけっしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。——とここまで明瞭めいりようには無論考えなかつたが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりどうあつても他人ひとの事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてこう云つた。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」

するとどてらはなかなか鷹揚おうような態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私わたしが周旋しゆせんさえすりゃきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙っていると、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵ちやうぞうさんが口くちを利ききさえすりゃ、坑夫くわふは受合うけあいだ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。それからいつしよに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男つらまを捕とらえて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん当字あてじである。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思いも寄らない見当けんとうに向けた、云わ

ば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異いな事だ。

さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合うから、自分もなれるんだろうと思つて、

「じゃ、どうか何分願ねがいます」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺へんはさっぱり分らなかつた。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願ねがいますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ちがないと思つて、あとは聞かずに黙もくっていた。すると長蔵さんは、勢いきいよくどてらの尻しを床しよ几ぎから立たてて、

「それじゃこれから、すぐに出掛しけよう。御前ごぜんさん、支度したくはいいかい。

忘れもののないようによく気をつけて」

と云った。自分はうちを出る時、着のみ着のまままで出たのだから、身体からだよりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝心かんじんの揚饅頭あげまんじゅうの代を忘れている。長蔵さんは平気な面つらをして、もう半分ほど葎よしず簀すいの外に出で往来を眺ながめていた。自分は懐中から三十二銭入りの墓口がまぐちを出して饅頭三皿の代を払って、ついでだから茶代として五銭やった。饅頭の代はどうとう忘れちまって思い出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫およりになって、うんと溜めて帰りにまた御寄おより」

と云ったのを記憶している。その後坑夫のちはやめたが、ついにこの茶店へ

は寄る機会がなかった。それから長蔵さんに尾ついて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃ほこりを上げて、やって来ると、さっきの長たらしいのに引き易かえて今度は存外早く片づいちゃまった。いつの間にまやら松がなくなったら、板橋街道のような希知けちな宿しゆくの入口に出て来た。やッぱり板橋街道のように我多馬車がたばしやが通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返って、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗っても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくつてもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつてもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云ったから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行つてしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通つた馬車の埃ほこりが日光にまぶれて、往来が濁つたように黄色く見える。そのうち人通りがだんだん多くなる。町並がしだいに立派になる。しまいに

は牛込の神楽坂かぐらざかくらいな繁昌はんじょうする所へ出た。ここいらの店付みせつきや人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長蔵さんのようなのはほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかつたのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いったい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、

ついぞ一と口も自分に聞いた事がなかったのは、人を周旋する男の所為しよゐとして、少しく無頓着過ぎるようにも思われたが、この男は全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後あとで分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引っ張るようにして、あの横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有つたものの子である。込み入つた事情があつて、耐え切れずに生家を飛び出したようなものの、あながち親

に対する不平や面当つらあてばかりの無分別むぶんべつじゃない。何となく世間が厭いやになつた結果として、わが生家まで面白くななくなつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮あせれば焦慮あせるほど厭いやになる。揚句あげくの果は踏張ふんばりの栓せんが一度にどつと抜けて、堪忍かんにんの陣立そろくずが総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまつたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍そばにまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲まわりに親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲まいている。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因縁いんねんで自

分も丸くなったり四角になつたりしなくつちやなくなる。しかし自分分はそう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に対して濟まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別わきまえていた。が濟まなれないと思えば思うほど丸くなつたり四角になつたりする。しまいには形態ばかりじゃない組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨うらめしそうに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲つたりくねつたりするところを、どうかして隠かくそうと力つとめたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠かくし終おせる段めじゃない。親にも親類にも目つかつてしまった。怪けしからんと云う事になつた。怪けしかるとは自分で

も思つていながつたが、だんだん聞き糾ただして見ると、怪しからん意味が  
だいぶ違つてる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれな  
い。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思  
うと同時に、第一の少女の傍そばにいたら、この先どうなるか分らない、こ  
とに因よると實際弁解の出来ないような怪しからん事が出来るしゅつたかも知れ  
ないと考え出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少  
女に対しては氣の毒である、濟まん事になつたと云う念が日々烈にちにちはげしくな  
る。——こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、  
五色の糸のこんがらかつたように、こつちを引くと、あつちの筋が詰  
る、あつちをゆるめるとこつちが釣れると云う按排あんばいで、乱れた頭はどう  
あつても解ほどけない。いろいろに工夫を積んで自分に愛想あいその尽きるほどひ

ねくつて見たが、とうてい思うように纏まとまらないと云う一点張いってんばりに落ちて来た時に——やつと気がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみがら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいいような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当あてにしていた。つまり往来で人と行き合った時、こっちは突ツ立ったまま、向うが泥濘ぬかるみへ避よけてくれる工面くめんばかりしていたのだ。こっちが動かない今のままのこっちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじやない。世間の掟おきてという鏡が容易に動かせないとすると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙けむにしてしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古けいこをしても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなつた。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親を持って朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家うぢについては自滅しようがない。どうしても逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考へた。たとい煩悶はんもんが逃亡かけおちにつき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事であ

る。あとに残った人は自分の逃亡のために助かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたって、いつまでも逃亡かけおちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやっぱり過去に追われて苦しいようなら、その時おもむろ徐おもむろに自滅の計はかりごとを廻めぐらしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になってしまいが、事実を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきごみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考える。

それでなくつても実際その当時の、二人の少女の有様やら、日ひごとに

変る局面の転換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だいぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、まあやめにして、せっかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔しゅつぽんしたんだから、固もとより生きながら葬ほうごられる覚悟でもあり、また自ら葬みづかつてしまつた簡りょうけんでもあつたが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら棄鉢すてばちになつても長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえできる事なら語りたくないほど情なさけない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言いちげんも聞き糺たださなかつ

たのは、変と思いなながらも、内々嬉しかった。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘うそをつく事をよく練習していなかったし、ごまかすと云う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたろうと思う。

そこで長蔵さんに尾ついて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎まばらになつて、所々は田圃たんぼの片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅たんばだけであるなど気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑にぎやかな所へ出された。その突当りが停車場ステーションであつた。汽車に乗らなくつては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知つた。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護

送してくれるんだらうと思つていた。

そこで停車場へ這入る五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云つたのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場ステーションの入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分といつしよに汽車へ乗つて先方さきまで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にこう叮嚀ていねいな世話を焼

くのはおかしい。ことによると彼奴あいつは詐欺師かたりかも知れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭いやになつて来た。いつその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当けんとうに向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかなく見えて、茫然ぼうぜんとして、停車場前の茶屋の赤い暖簾のれんを眺ながめていると、いきなり大きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟つた。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜はすに出して、しきりにこちらを見て、首を豎たてに振つてゐる。何でも身体からだは便所の扉へいにかくれているらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔を目的めあてに歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうもないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた変つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞られようにも、名誉も財産もないんだから初手しよてから見込みこの立たない代物しろものである。昨日きのうの自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給の差さし押おを苦くにするようなものであつた。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風体ふうていを見て一目いちもく騙かたるべからずと看破するには教育も何も要いつたものではない。だからことによると、自分を坑夫坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだらうと思ひ出した。それならそれで構わな

い。給料のうちを幾分かやれば済む事だなどと考えながら用を足した。

——実は自分がこれだけの結論に到着するためには、わずかの時間内だ  
がこれほどの手数てすうと推論とを要したのである。このくらい骨を折ってす  
ら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味  
において会得えとくする事が出来なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、  
どうか、漕ぎこつけながら、それでも、もしや好意こういずくの世話せわずきから起つ  
た親切せんせつじゃあるまいかと思つて、飛んだ気兼きかみをしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、  
自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方さきまで連れて行っていただいては恐縮おそくですから、

もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙って自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろ御世話になつてありがとうございます。これから先はもう僕一人です。やりませんから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省はぶいたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰ったが、

「今貴方あなたに伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私わたしの名前くらいで、すぐ坑夫になれると思つてるのは大間違いだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんじゃないよ」と跳はねつけられちまった。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶あいさつをすると、

「なに遠慮えんりょしないでもいい、先方さきまで送つてあげるから心配しんぱいしないがいい。——袖摩そですり合うも何とかの因縁いんねんだ。ハハハハハ」

と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けていると、だんだん

ステーション

停車場へ人が寄ってくる。大抵は田舎者である。中には長蔵さんのよう

なはんでんけん祥天兼どてらを着た上に、てんびんぼう天秤棒さえ荷かついだのがある。そうかと思う

とつや光沢のある前掛を締めて、中折帽を妙にへこ凹ました江戸ツ子流あきゆうどの商人も

ある。その他の何やらかやらでベンチの四方が足音と人声でざわついて

来た時に、切符口の戸がかたりと開あいた。待ち兼ねた連中は急いで立ち

上がって、みんな鉄網かなあみの前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ち

つき払ったものであった。例の太刀たちのごとくそっくりかえった「朝日」

を厚い唇くちびるの間に啣くわえながら、あの角張かどばった顔を三さんが二にほど自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるかい」

と聞いた。また自分の未熟なところを発表するようだが、実を云うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫ちようも上のぼらなかったのである。汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら金を払うものか、また金を払う必要があるものか、とんと思ひ至いたらなかったのは愚ぐの至いたりである。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢であうまでは無賃ただで乗れるかのごとき心持で平氣でいたのは事実である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さんにさえ食ひつついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと云う依頼心ひそが妙に潜ひそんでいたんだらう。ただし自分じゃけつして

そう思っていないかった。今でもそうだとは自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、<sup>ステーション</sup>停車場へ来て汽車賃の汽の字も考えずにいられるもんじやない。その癖こんなに依頼している長蔵さんに対して、もう御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人で行きますのと平ひらに同行を断つたのは、どう云う了簡りょうけんだろう。自分はこう云う場合にたびたび出逢であつてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。——病気に潜伏期があるごとく、<sup>われわれ</sup>吾々の思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有もちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覚しない。またこの思想や感情が外界の因縁いんねんで意識の表面へ出て来る機会がないと、生涯しやうがいその思想や感情の支配を受けながら、自分はけつしてそ

んな影響を蒙った覚がないと主張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、傍から見ると矛盾になっている。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やっぱりこの潜伏者を自覚し得なかつたからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだらうに。ところが思うように行かんのは、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持っていなさるか」と問われた時に、自分ははつと思つて、少からず狼狽えた。三十二銭の

うちで饅頭まんじゅうの代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫くわふになろうなんて呑込のみこみ顔がほに受合うつたんだから、自分は少し凶迂ずうずう迂うし  
い人間であつたんだと気がついたら、急に頬辺ほっぺたが熱あつくなつた。その時分  
の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今だつたら、たとい電車  
の中で借金の催促せいきをされようとも、ただ困るだけで、けつして赤面しやくめんはし  
ない。ましてぼん引きの長蔵ちやうざうさんなどに対して、神聖しんじやうなる羞恥しゆうちの血色しやくしきを  
見せるなんてもつたいない事は、夢にもやる氣遣きづかいはありやしない。

自分はとう云うものか、長蔵ちやうざうさんに対して汽車賃きやうしんはありますと答えた  
かつた。しかし實際じつじやうがないんだから嘘うそを吐つく訳わけには行かない。嘘うそを吐つきつ  
放ばなしにして済ませられるなら、思い切きつて、嘘うそを吐つく事ことにしたろうが、と  
にかく今切符きりひを買かうと云う間際まぎわで、吐つけばすぐ露現ろけんしてしまふんだから

始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんざらの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣のついた、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかつたもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかつたが、何しろもつたいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、恐縮し

ても、まるで頓着とんじやくしない。ただいくら持つてるか聞きたい様子であった。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。何しろしめて三十二銭のうち、饅頭まんじゆうを三皿食つて、茶代を五銭やつたんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くつても同じくらいなものだ。「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」と正直なところを云うと、

「足りないところは、私わたしが足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一銭銅や二銭銅を勘定するのは、いかにも体裁ていさいがわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭いやだから、懐ふところから例の墓口がまぐちを取り出して、墓口ごと長蔵さ

んに渡した。この墓口は鰐わにの皮で拵こしらえたすこぶる上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると云う講釈をどくと聴かされた贅沢物ぜいたくものである。長蔵さんは墓口を受け取って、ちよつと眺ながめていたが、「ふふん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまつた。中味を改めな  
いところはよかつたが、

「じゃ、私が切符を買つて来て上げるから、ちゃんとここに待っていないな  
くつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行つてしまった。  
見ていると人込ひとごみの中へ這入はいつたなり振り返りもしないで切符を買う番の  
くるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方いまさきまでの長

蔵さんは始終しじゆう自分の傍そばに食つついていて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れていたように見受けられた。あんまり人が多くつて、こつちへ眼をつける暇がなかつたんだらう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺ながめていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれつぱかりしか持つていないのかと長蔵さんが驚くに違ちがない。どうも気の毒である。いくら足し前へいぜいをするんだらうなどと入らざる事を苦くに病やんでいると、やがて長蔵さんは平生へいぜいの顔つきで歸つて来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わな  
い。きまりが悪かったから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃金の事は口へ出さなかった。墓口の事もそれなりにし  
て置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれつきり云わなかった。した  
がって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別にこれ  
と云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物できものだらけの、腐爛ただれめ目の、  
痘痕あばたのある男が乗ったので、急に心持が悪くなって向う側へ席を移した。  
どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよつぽどおかしい。生家うちを

逃亡かけおちて、坑夫にまで、なり下さがる決心けっしんなんだから、大抵たいていの事に辟易へきえきしそ  
うもないもんだがやっぱり醜きたないものの傍そばへは寄りつきたくなかった。  
あの按排あんばいでは自殺じそくの一日いちにち前まへでも、腐爛ふらん目の隣となりを逃げ出したに違ちがない。そ  
れなら万事ばんじこう几帳面きちようめんに段落だつらくをつけるかと思うと、そうでないから困こる。  
第一長蔵ちやうざうさんや茶店ちやてんのかみさんに逢あった時ときなんぞは平生へいぜいの自分じぶんにも似  
ず、ぐう「口十禺」の音ねも出でさずに心しんからおとなしくしていた。議論ぎろんも  
主張しやうじやうも気概きがいも何もあつたもんじゃありやしない。もつともこれはだいぶ  
餓ひもしい時ときであつたから、少しは差引さひきいて勘定たてを立たてるのが至当しつたうだが、けつ  
して空腹くうぷのためばかりとは思おもえない。どうも矛盾まひん——また矛盾まひんが出でたか  
ら廢よそう。

自分は自分の生活中もつとも色彩しきさいの多い当時の冒険ぼうけんを暇ひまさえあれば考かんが

え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく  
厳密なる解剖の刀を揮ふるつて、縦横たてよこ十文字に自分の心緒しんしよを切りさいなんで  
見るが、その結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔むかし  
だから忘れちまつたんだなどと云つてはいけない。このくらい切実な経  
験は自分の生涯しやうがい中に二度とありやしない。二十はたち以下の無分別から出た無  
茶だから、その筋道が入り乱れて要領を得んだと評してはなおいけな  
い。経験の当時こそ入り乱れて滅多めったやたらに盲動するが、その盲動に立  
ち至るまでの経過は、落ち着いた今日こんにちの頭腦の批判を待たなければとて  
も分らないものだ。この鉞山ゆき行だつて、昔の夢の今日だから、このくら  
い人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたから、あらいざら  
い書き立てる勇氣があると云うばかりじゃない。その時の自分を今の眼

の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだつてどうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻下の事情と云うものは、転瞬の客気に駆られて、とんでもない誤謬を伝え勝ちのものである。自分の鉞山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、気取った、偽りの多いものが出来上ったろう。どうてい、こうやって人の前へ御覧下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一目ちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかつた。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少からず驚嘆した。のみならず、平気な顔で腐爛目と話し出したに至つて、少しく

愛想あいそが尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻って、腐爛目は、

「まただいぶん儲もつかるね」

と云った。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液つばをした。するとその唾液が汽車の風で自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じてい

る。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからってんで贖金をやって帰したとするんだ」

「うんそれから」

「後で泥棒が贖金と気がついて、あすこの亭主は贖金使だ贖金使だって」

「方々振られて歩くんだ。常公の前だが、どっちが罪が重いと思う」

「どっちだあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねぶくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそろく同じ事だろう。しかし死ぬのは、やさしいようでなかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道をやる人が、時々朋友ほうゆうに咽喉のどを締めて貰う事がある。夏の日永ひながのだるい時などは、絶息したまま五分も道場に死んでいて、それから活かつを入れさせると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治あらりょうじを頼んだ事がない。睡眠

はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り損う危険も伴っていないから、心配のあるもの、煩悶の多いもの、苦痛に堪えぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取っては、至大なる自然の賚である。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑もないうちに、うつとりとしちまつて、生きてゐる以上は是非共その経過を自覚しなければならぬ時間を、丸潰しに潰していた。ところが眼が覚めた。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝込んだもんだから、汽車の留ったために、眠りが調子を失つてどこかへ飛んで行ったのである。自分は眠っていると、時間の経過だけは忘れてゐるが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくつて

は駄目だ。ただし煩悶がなくなった時分には、また生き返りたくなくなるに  
きまつてるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違たがいちがいにするの  
が一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽軽ひょうきんな冗談じょうだんを云つてる  
ようだがけっしてそんな浮いた了見りようけんじゃない。本気に真面目まじめを話してる  
つもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半  
分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじゃない。実際汽車が留つて、  
不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿ばか気げた感じだか  
ら滑稽こっけいのように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿気た感じが  
起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分  
は当時の自分を可愛想かわいそうに思うのである。こんな常識なまじけをはずれた希望を、  
真面目まじめに抱いだかねばならぬほど、その時の自分は情なさけない境遇におつたんだ

と云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留っていた。汽車が留まったなと云う考えよりも、自分は汽車に乗っていたんだなと云う考えが第一に起った。起ったと思うが早いか、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家を出奔したんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだがむらむらと塊かたまって、頭の底から一度に湧わいて来た。その速い事と云ったら、言語ごんごに絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺おほれかかったその刹那せつなに、自分の過去の一生を、細大漏さいだいらさずありありと、眼の前に見た事があると云う話をその後のち聞いたが、自分のこの時の経験よに因よつて考えると、これはけっして嘘じゃなからうと思う。要するにそのくらい

早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると同時に、急に厭いやな心持になった。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云つて、別に叙述しようもない心持ちだからただの厭でとめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなと、直勘すぐかんづくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けつして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入はいつて来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろきよろきするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろうろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更かえて窓へ首を出したり、欠伸あくびをしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩くずし始めて来た、自分

は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覚していた。自覚すると共に、自分は普通の人間と違つて、みんなが活動する時分さえ、他に釣り込まれて気分が動いて来ないような仲間外れだと考えた。袖が触れ違つて、膝を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁も由緒もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持であつた。今までは、どうか、こうか、人並に調子を取つて来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽気になつて上へ騰る。自分は急に陰気になつて下へ降る、どうして交際はできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゅうと減つて、臓腑が薄っ片な一枚の紙のように圧しつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまつた。まことに申訳のない、御恥ずかしい心持ちをふらつかせて、凹んでいた。

ところへ長蔵さんが、立って来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」

と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上った。

魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通つてかよるうちは、呼

ぶと返つて来るからおかしなものだ。しかしこれがもう少しはげ烈しくなる

と、なかなか思うように魂が身体からだに寄りついてくれない。その後台湾沖

で難船した時などは、ほとんど魂に愛想あいそを尽かされて、非常な難義をし

た事がある。何なんにでも上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突

き当りだのと思つて、安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの

時はこの心持が自分に取つてもっとも新しくて、しかもはなはだにが苦い経

験であつた。

長蔵さんのどてらの尻を嗅ぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿の通りへ出た。一本筋の通りだが存外広い、ばかりではない、心持の判然するほど真直である。自分はこの広い往還の真中に立って遙か向うの宿外を見下した。その時一種妙な心持になった。この心持ちも自分の生涯中であって新らしいものであるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人間らしい了簡になつて、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸く息につれて、やっと胎内に舞い戻っただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場から出ても、またこの宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよやながら、義理に働いてくれたようなもので、けつし

て本氣の沙汰で、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかつたくらい、鈍い意識の所有者であつた。そこで、ふらついている、氣の遠くなつてゐる、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼を開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間に、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴るほどの山が、自分の眼を遮りながらも、邪魔にならぬ距離を有つて、どろんとしたわが眸を翠の裡に吸寄せてゐる。——そこで何んとなく今云つたような心持になつちまつたのである。

第一には大道砥のごとしと、成語にもなつてゐるくらいで、平たい真直な道は蟠まりのない爽なものである。もつと分り安く云うと、眼を迷つ

かせない。心配せずにこつちへ御出おいでと誘うようにでき上つてるから、少しも遠慮きがねや気兼ねきがねをする必要がない。ばかりじゃない。御出と云うから一本筋の後あとを喰ツついで行くと、どこまでも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくつては、窮屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つたものと自分は堅く信じている。それから左右の家並いえなみを見ると、——これは瓦葺かわらぶきも藁葺わらぶきもあるんだが——瓦葺だろうが、藁葺だろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだいしだいに屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金で勾配こうばいを纏まとめられるために向うのはずれからこつちまで突き通されてるようにな、行儀はすよく、斜はすに一筋を引つ張つて、どこまでも進んでいる。そうして進めば進むほど、地

面に近寄ってくる。自分の立っている左右の二階屋などは——宿屋のよ  
うに覚えているが——見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒を透すか  
して見ると、指の股またに這入はいると思われるくらい低い。その途中に暖簾のれんが  
風に動いていたり、腰障子こししょうじに大きな蛤はまぐりがかいてあつたりして、多少の変  
化は無論あるけれども、軒並のきなみだけを遠くまで追っ掛けて行くと、一里が  
半秒はんせうどで眼の中に飛び込んで来る。それほど明瞭めいりょうである。

前に云った通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体ていたらくで、どこまでもとろんと  
していた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこの明瞭めいりょうな——盲目めくら  
にさえ明瞭なこの景色けしきにばったりぶつかつたのである。魂の方では驚か  
なくつちやならない。また実際驚いた。驚いたには違ちがいが、今まで  
あやふやに不精不精ふしょうふしょうに徘徊はいかいしていた惰性を一変して屹きつとなるには、多少

の時間がかかる。自分の前に云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たないさき、景色がいかに明瞭であるかと心づいたあと、——その際きわどい中間ちゆうかんに起った心持ちである。この景色はかように暢達のびのびして、かように明白で、今までの自分の情緒じゆうじよとは、まるで似つかない、景氣のいいものであったが、自身の魂がおやと思つて、本氣にこの外界げかいに對むかい出したが最後、いくら明かでも、いくら暢のんびりしていても、全く実世界の事実となつてしまふ。実世界の事実となるといかな御光ごこうでもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覚するほど作用が鋭くなかつたため——この真直な道、この真直な軒を、事実に等しい明かな夢と見たのである。この世

でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼はつきりした快感をもつて、他界の幻影まぼろしに接したと同様の心持になつたのである。自分は大きな往来の真中に立つている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通つている。歩いて行けばその外はずれまで行かれる。たしかにこの宿しゆくを通り抜ける事はできる。左右の家は触さわれば触る事が出来る。二階のぼへ上れば上る事が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸ひとみのなかに受けながら立つていた。

自分は学者でないから、こう云う心持は何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないののでついこう長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事と笑われるかも知れないが仕方がない。そ

の後のちこれに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起つた事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾かたむきかけている。初夏しよかの日永ひながの頃だから、日差ひざしから判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそろく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ているくらいだから悪いとは云われない。自分は斜はすかけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺ながめた時、あれが西の方だと思つた。東京を出て北へ北へと走つたつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなつていた。この町を真直に町の通つてゐるなりに、下くだると、突き当りが山で、その山は方

角から推すと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変わらず、北の方へ行くんだと思った。

その山は距離から云うとだいぶあるように思われた。高さもけつして低くはない。色は真蒼まつさおで、横から日の差す所だけが光るせいか、陰の方は蒼い底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉檜すぎひのきの多いためかも知れない。ともかくも蓊鬱こんもりとして、奥深い様子であった。自分は傾きかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なっているとしか思われなかった。これ

は自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなか麓へ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾いて陰の方は蒼い山の上皮と、蒼い空の下層したがわとが、双方で本分を忘れて、好い加減むとに他の領分おかを犯し合ってるんで、眺める自分の眼にも、山と空の区劃くかくが判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕ゆうべ東京を出て、千住せんじゆの大橋まで来て、裕あわせの尻はしよを端折はしよったなり、松原へかかっても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗っても、空脛からすねの

ままで押し通して来た。それでも暑いくらいであった。ところがこの町へ這入はいつてから何だか空脛では寒い氣持がする。寒いと云うよりも淋しいんだらう。長蔵さんと黙つて足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になつた。たびたび空腹になつた事ばかりを書くのはいかがわしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。實際自分は空腹になつた。家を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに氣分がわるくつても、煩悶はんもんがあつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくつちやいけないと云い換えるのが適當かも知れない。品の悪い話だが、自分は長蔵さんと並

んで往來の真中を歩きながら、左右に眼をくばって、両側の飲食店を覗のぞき込むようにして長い町を下くだって行つた。ところがこの町には飲食店がだいぶんある。旅屋はたじやとか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入こつてしかるべきや、たいち流りゆうのがあすこにもここにも見える。しかし長蔵さんは毫ごも支度したくをしそうにない。最後の我多馬車がたばしやの時のように「御前ごぜんさん夕食ゆうめしを食うかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配くわって何だか発見はっけんしたいような気色けしきがありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好かつこうな所を見つけて、晩食ばんめしをしたために自分を連れ込む事と自信して、氣を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下くだって行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひもじくは無かつた。胃の中に

はまだ先刻さつきの饅頭まんじゅうが多少残のこつてるようにも感あぜられた。だから歩あけば歩あかれる。ただ汽車くるまを下くだりるや否いなや滅めり込みこみそうな精神しんぱんが、真直まっすぐな往来わらいの真中まんなかに抛ほうり出だされて、おやと眼まなこを覚おぼしたら、山里やまのあたりにの空くわ気がひやりと、夕ゆふ日の間まから皮かわ膚ふを冒おかして来きたんで、心機しんき一いつ転てんの結果けつことしてこここゝに何か食たつて見みたくなつたのである。したがつて食たわなければ食たわないでも済すむ。長藏ちやうざうさん何か食たわしてくれませんかと云いうほど苦くるしくもなかつた。しかし何なにだか口くちが淋さびしいと見みえて、しきりに繩なわ暖の簾れんや、お煮にめや、御中おちゆう食所じきじところが気きにかかる。相手あいての長藏ちやうざうさんがまた申まをし合あはせたように右みぎ左ひだりと覗のぞき込こむので、こつちはますます食意くい地じが張はつてくる。自分おれはこの長ながい町まちを通とほりながら、自分おれらに適あ当たうと思おもう程度ていどの一膳いちぜんめし屋やをついに九軒く軒まで勘定かんだいした。数かずえて九軒く軒目めに至いたつたら、さしさししもに長ながい宿しゆくはどうどうおし

まいになり掛けて、もう一町も行けば宿外れへ出抜けそうである。はなはだ心細かった。時にふと右側を見ると、また酒めしと云う看板に逢着した。すると自分の心のうちにこれが最後だなど云う感じが起つた。それがためか煤けた軒の腰障子に、肉太に認めた酒めし、御肴と云う文字がもつとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴の字でもありあり見える。この様子では、いくら耄碌してもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強の長蔵さんも今度こそ食いに這入るに違なからうと思つた。ところが這入

らない。その代りぴたりと留った。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち留ってこの赤い人間を覗き込むのか、とんと自分には分らなかつた。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留っていると、やがて障子の奥から赤毛布あかげつとが飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、実際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織ひとえものの単衣一枚だけしきや着ていないんだから、つまりしめめて見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚でしのいでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び

出した時にはただ赤いばかりであった。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側そばへつかつかやっ行って、

「お前さん、働く気はないかね」

と云った。自分が長蔵さんに捕つかまった時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆かられながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆しゅとさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然はんぜんと覺さとつた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どん

な人に、幾人逢おうとも、版行で押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を厭きもせず、長の歲月としつきやられたものだ。長蔵さんだつて、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やつぱり何かの事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう思えば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほかの事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩悶はんもんする気色けしきもなく、自分でなくつちや御前さんをやり得る人間は天下広しといえども二人と有るまいと云うほどの平気な顔で、やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵観ちようぞうかんがあつたらだ**いぶ**面白かつたらうが、何しろ魂に逃げだされ損なつている最中だつたから、なかなかそん

な余裕は出て来なかつた。この長蔵観は当時の自分を他人と見做みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序じよの節せつに浮かんだのである。だからやッぱり紙の上だけで消えてなくなるんだらう。しかしその時その砌みぎりの長蔵観と比較して見るとだ**いぶ違つてるようだ。**——

自分は長蔵さんと赤毛布あかげつとの立談たちばなしを聞きながら、自分は長蔵さんから毫ごも人格を認められてい**なかつた**と云う事を見出した。——もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京を出奔しゅつぽんして坑夫にまでなり下がるものが人格を云々うんぬんするのは変挺へんてこな矛盾である。それは自分も承知して**いる。**現に今筆を執とつて人格と書き出したら、何となく馬鹿ばか気げでいて、思ふわず噴ふき出しそうになつたくらいである。自分の過去を顧かえりみて噴ふき出しそうになる今の身分を、昔と比くらべて見ると実に結構の至りであるが、

その時はなかなか噴き出すどころの騒ぎではなかった。——長蔵さんは明かに自分の人格を認めていなかった。

と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴おんさかなの裏うちから飛び出した若い男を捕つかまえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じ坑夫になれと勧誘している。それを自分はなぜだか少々怪けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざつとこんな訳なんだろう。——

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構かぎような家業かぎようだとは、常識を質に入れた当時の自分にももつともと思ひようがなかった。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不名誉だと心得ていた。

自慢にやならないと覺さとつていた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思おもいのほか突然居酒屋の入口から赤毛布になって、あらわれようとも別段神経を悩ますほどの大事件じゃないくらいは分りきつてる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般的な人間であると云う気になつちまう。取扱方の同様なのを延ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人ひとが赤毛布を着て立つてようには思われぬ。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから坑夫になれと談じつけられてい

る。そこで、どうも情なさけなくなつちまつた。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れていたのだが、自分が赤毛布になつて、君儲もつかるんだぜと説得ていざいされている体裁を、自分が傍わきへ立つて見た日には方かたなしである。自分はたしてこんなものかと、少しく興きを醒さまして赤毛布を、つらつら観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被かぶつてる赤毛布ばかりじゃない、心底しんぞこから、この若い男は自分と同じ人間にんげんだった。そこで自分はつくづくつまらないと感じた。その上もう一つつまらない事が重なつたのは、長蔵さんが、にくにくしいほど公平で、自分の方が赤毛布あかげつとよりも坑夫あかぢに適していると云うところを少しも見せない。全く器械的にやっている。先口せんくちだから、もう少しこつちを鼻ひな尻しにし

たら好かろうと思うくらいであった。——これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切歯詰せっぱった時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有もっていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。——しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覚して、大おおいにつまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人ふたりの談判は見る間まに片づいてしまった。これは必ずしも長蔵さんがことほどさように馬鹿に上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がことほどさように馬鹿だつたからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あながち、自分に比較して軽蔑けいべつする気じゃけつしてない。自分の当時は、長蔵さんの

話をはいはい聞く点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であったのである。もし強しいて違ちがうところを詮議せんぎしたら赤毛布を被かぶつてゐるのと緋かすりを着きてゐるとの差違ちがひくらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく気の毒な人と云う意味で、馬鹿のうちうちに少しぐらいは同情の意を寓ぐうしたつもりである。

で、馬鹿が二人長蔵さんに尾ついていっしょに銅山まで引つ張られる事になつた。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと気がついて見ると、さっきのつまらない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了見りょうけんほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心している、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有る

ようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後さのちる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得ふかたくなりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟おおげさな法螺ほらだろうが、不可得ふかたくと云うのは、こんな事を云うんじやなかろうかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念ねんと云うもので心こころじやないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙っていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかというと、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱らせられる。そうして、そう云う呑気のんきな料簡りょうけんで、

人を自由に取り扱うの、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでいるから驚いちまう。水だつて流れりや返つて来やしない。ぐずぐずしていりや蒸発しちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻さつきのつまらない考えが蒸発していたと云う事だけを記憶して置いて貰もらえばいい。――  
――そうして吾われながら驚いたのは、どうも赤毛布あかげつとと並んで歩くのが愉快になつて来た。もつともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋いもの事を芋えもと訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではなかった。その上顔が人並にできていなかった。この男に比べると角張かくばった顎あごの、厚唇あつくちびるの長蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突つ

走ったのみで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤い毛布けつとが妙に臭い。それにもかかわらず自分はこの山里で、銅山行きうれの味方を得たような心持がして嬉しかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴みちづれがあつて欲しい。一人で零落おちぶれるのは二人で零落れるのよりも淋しいもんだ。そう明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好いてるところはなかつたけれども、ただいっしょに零落れてくれると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつてしまった。これから推おして考えると、川で死ぬ時は、きつと船頭の一人や二人を引き擦すり込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいない地獄

よりも、必ず鬼のいる地獄を扱えらぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになって、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけっして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄まっすぐになって、もつとも刻下感こっかかんに乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直まっすぐな往來を真直に突き当りの山まで見下みおろしたもんだからようやく正氣づいたのは前申まえした通りである。それが機縁きえんになって、今度は食氣くいけがついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫くわふの同類が出来て、少しく顔勢たいせいを挽回ばんかいしたと云うしだいになる。だに因よつてまた空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の

一膳飯屋いちぜんめしやはもう通り越ししている。宿しゆくはすでに尽しきかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願かなは叶かいそうもない。それに赤毛布あかぬいは今食たったばかりの腹だから、勇ゆうましくどんどん歩あく。どうも、降参かみましちまった。そこで思い切きって、最後の手段しゆだんとして長蔵ちやうざうさんに話わしかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越こすんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越こしちや大変だ。これから左へ切れるんさ」と云いったなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非せいひに及およばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減へったんだが」と、とうとう空腹くふぷの由よしを自白じはくした。すると長蔵ちやうざうさんは

「そうかい。芋いもでも食たうべい」

と、云いいながら、すぐさま、左側ひだりがはの芋屋いもやへ飛び込んだ。よく約束やくそくしたよ

うに、そこん所に芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天佑てんゆうである。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のように奇麗きれいじゃなかつた。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかになにを売つてるんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に気を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載のせて、真黒な家うちから、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食つた」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡せていて、湿っぽそうで、それで所々皮が剥げて、剥げた中から緑青を吹いたような味が出ている。どれにぶつかつたつて大同小異である。そんなら一目惨澹たるこの芋の光景に辟易して、手を出さなかつたかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中の、とも云わるべきこの御薩を快よく賞翫する食欲は十分有つたように思う。しかし「さあ、食つた」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損なつた。これはおおかた「さあ、食つた」の云い方が悪かつたんだろう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼

つきで、再び

「さあ」

と、例の顎あごで芋を指さしながら、前へ出した手頸てくびを、食えと云う相図にちよつと動かした。よく考えて見ると、両手が芋で塞ふさつてるんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、口へ持つて行く事ができないんであつた。じれたのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕で、変な曲線えがを描いて、右の手を芋まで持つて行くこうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころころと往来の中へ落ちた。これはすぐさま赤毛布あかげつとが拾つた。拾つたと思つたら、

「この芋えもは好芋えええもだ。おれが貰えおう」

と云つた。それでこの男は芋いもを芋えもと発音すると云う事が分つた。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本締しめて五本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懐なつかしげに食いながら、いよいよ宿外しゆくはずれまで来るとまた一事件起ひとじけんつた。

宿しゆくの外はずれには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れている。自分  
はもう町が尽きるんだなとは思ひながら、つい芋に心を奪われて、橋の上へ乗つかかるまでは川があるとも気がつかなかった。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出ている。川がある。水が流れている。——何だか馬鹿気た話だが、事実にもっとも近い叙述をやらうとすると、まあ、こう書くのが一番適切だろう、こう書いて置く。けつして小説家の弄もてあそぶような法螺ほら七分の形容ではない。これが形容でないとする

とその時の自分がいかに芋を旨うまがったのかがおのずから分明ぶんみやうになる。さて水音に驚いて、欄干らんかんから下を見ると、音のするのはもつともで、川の中に大きな石がだいぶんある。そうしてその形状かっしやうがいかに不作法ぶさほうにでき上つて、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝たり、突つ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその水には勾配こうばいがついている。山から落ちた勢いをなし崩しくずに持ち越して、追つ懸かけられるように跳おとつて来る。だから川と云うようなものの、実は幅の広い瀑たきを月賦げつぷに引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変はげしい。鼻はなっ端はしの強い江戸ツ子のようにむやみやたらに突つかかつて来る。そうして白い泡あわを噴ふいたり、青い飴あめのようになつたり、曲つたり、くねつたりして下しもへ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだ

んだん暮れてくる。仰あおむ向いて見たが、日向ひなたはどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうつと明るくなって、その明かるい空を背しよ負つてる山だけが目立って蒼黒あおくろくなつて来た。時は五月だけれども寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入日いりひを背中から浴びて、正面は陰になった山の色と来たら、——ありや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫むらさきでも黒でも蒼あおでも構わないんだが、あの色の気持を書こうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どつと圧おつ被かぶさるんじゃないかと感じた。それで寒いんだろう。実際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方ことごとく、あの山のような気味のわるい色になって、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界一色いっしきの内に裹つつまれてしまふに違ないと云う事を、

それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日いりひの方かたの局部の色として認めたら、局部から全体を唆そそのかされて、今にあの山の色が広がるんだと、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじやあるまいかと云う気を起したんだと——自分は今机の前で解剖して見た。閑ひまがあるとかく余計な事がしたくなって困る。その時はただ寒いばかりであつた。傍そばにいる茨城県の毛布けつとが羨うらやましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向むかうたつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこう突然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄らなかつたのである。——その淋さむしい山の方から、小僧が一人やつて来た。年は

十三四くらいで、冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいている。顔は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下闇こしたやみの一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隠したりするような仕掛しかけにできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いもを口へ宛あてがつたなり、顎あごを動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと

確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上った小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいるのを、とんと苦にならない様子で通り抜けるようにする。すこぶる平気な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆おそした気色けしきもなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留とどまつた。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になつたものだ。

なかなかえらいと感心していると、長蔵さんは、

「芋いもを食くわないかね」

と云いながら、食い残しを、気前よく、二本、小僧の鼻なの前まへに出でした。すると小僧はたちまち二本とも引ひつたくるように受け取とつて、ありがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手てっ取り早い行動こうどうを熟視じゆくしした自分は、なるほど山から一人で下りてくるだけあつて自分とは少々訳わけが違ちがうなど、また感心かんしんしちまつた。それとも知らぬ小僧は無我無心むげむしんに芋いもを食くっている。しかも頬張ほおばつた奴やつを、唾液つばきも交まぜずに、むやみに吞のみ下くだすので、咽喉のどが、ぐいぐいと鳴るなるように思おもわれた。もう少し落ちついて食くう方が楽やすだろうと心配しんぱいするにもかかわらず、当人あたは、傍はたで見みるほど苦くしくはないと云いわんばかりにぐいぐい食くう。芋いもだから無論むろん堅かた

いもんじやない。いくら鵜呑うのみにしたって咽喉うゑに傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉うゑがいつぱいに塞ふさがつて、芋が食道を通り越すまでは呼息いきの詰きる恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしない。今咽喉うゑがぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。後あとの芋が、前さきの芋を追かつ懸かけてぐいぐい胃の腑ふに落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だったか、これがためたちまち見る間まに無なくなってしまった。そうして、小僧はついに何らの異状もなかった。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食くつてしまふまで、一句も言葉を交かわさなかつた。自分は腹うちの中で少しはおかしいと思つた。しかし何となく憐あはれだつた。これは単に同情の念ねんばかりではない。自分が空腹くうぷになつて、長蔵さんに芋をねだつたのは、つい、今し

がたで、餓<sup>ひも</sup>じい記憶は気の毒なほど近くにあるのに、この小僧の食い方は、自分より二三層倍餓<sup>ひも</sup>じそうに見えたからである。そこへ持って来て、長蔵さんが、

「旨<sup>うま</sup>まかったか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食ったあとの小僧は無論何とか云うだろうと思っていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙って立っている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだった。それが分つてからはさほどにも思わなかったが、この時は何だ顔に似合わない無愛嬌<sup>あいきょう</sup>な奴だなど思った。しかしその丸い顔を半分傾<sup>かたむ</sup>けて、高い山の黒ずんで行く天辺<sup>てっぺん</sup>を妙に眺<sup>なが</sup>めた時は、ま

た可愛想かわいそうになつた。それからまた少し物騒ものさわになつた。なぜ物騒ものさわになつたんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿しゆくとが、何か深い因縁いんねんで互に持ち合つてるのかも知れない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらくこんな因縁いんねんに勿体もったいをつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾つたり、文章にぶつかつたりするもんだ。自分はこの永年ながねん方々を流浪るろうしてあるいて、折々こんな因縁いんねんに出つ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。——しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやっぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化けば損そくなつたところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天辺てっぺんを眺めていた。

すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想むあいそうである。長蔵さんは平気なもので、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもので、

「どこへも帰りやしねえ」

と云つてる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。

この小僧は宿無やどなしに違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そ

うして、こんなに度胸の据すわった宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐あわれとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかつたらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向つて、

「じゃ、おいらといっしよにおいで。御金を儲もつけさしてやるから」と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかけつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏まと

まっつてしまうには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなからう。しかしそう云う自分がこの赤毛布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人であつたんだから妙なもんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左へでも誘われしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものがだいぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいるときは、目眩めまぐるしいほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しといえども、自分だけであろうくらいで、千住から尻はしよを端折はしよつて歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、この宿しゆくで、はからずも赤毛布あかげつとを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちにまたこの小僧を手

入れた。そうして二人とも自分よりは遙はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちゃんとして生活していた。煩悶はんもんも坊ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶きよくの極試みたこの駆落かけおちも、やっぱり坊ちゃんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。生死しやうしの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼で見渡した世の中には、駆落をしたものは一人もない。

——たまにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になつて、一枚の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だ

から、食べたって身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったようなもので、はあ、はあ、と聞いている分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もつとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたままで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさを悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横じゆうおうに飛び廻って、大いに苦しがつたりまた大いに悲しがつたりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、自分の不経験からして、さほどおおげさ大袈裟に考えないでも済む事を、さも仰山ぎょうざんに買い被かぶつて、独りひとでどぎま

ぎしていた事実を指すのである。しかるにこのどきまぎが赤毛布に逢い、小僧に逢つて、ふたり 兩人の平然たる態度を見ると共に、いつの間にもやう薄らいだのは、やっぱり経験の賜である。たまもの 白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かつたようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、たわいもなく攻め落された事実を綜合して考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、まんざら 満更待ち草臥くたびれの骨折損になる訳でもなかつた。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じゃなりましようと二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、しりはしより 尻端折で夜逃をした自分くらいと思つていた。したがつて長蔵さんのような気楽な商売は日本にたつた一人あればたくさんで、しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻り合せると云う

運勢をもつて生れて来なくっちゃ、とても商売にならないはずだ。だから大川端おおかわばたで眼の下三尺の鯉こいを釣るよりもよっぽどの根気仕事だと、始めから腰を据すえてかかるのが当然なんだが、長蔵さんはとんとそんな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるびれずに往来の男を捉つかまえる。するとその捉まえられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつとも普通の商売じゃあるまいかと疑念を起すように成功する。これほど成功する商売なら、日本に一人じゃとても間に合わない、幾人いくたりあつても差支さしかえないと云う気になる。――当人は無論そう思つてるんだらう。自分もそう思つた。

この呑気のんきな長蔵さんと、さらに呑気な小僧あかげつとに赤毛布と、それから

見様見真似で、大いに呑気になりかけた自分と、都合四人で橋向うの  
小路を左へ切れた。これから川に沿って登りになるんだから、気をつけ  
るが好いと云う注意を受けた。自分は今芋を食ったばかりだから、もう  
空腹じゃない。足は昨夕から歩き続けで草臥れてはいるが、あるけばま  
だ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布  
の後を跟けて行つた。路があまり広くないので四人は一行に並べない。  
だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足後れて、自分  
と摺々くらいになつて食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのと、口を利くのが厭になつ  
た。長蔵さんも橋を渡つてから以後とんと御前さんを使わなくなつた。  
赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかつ

たが、どう云うものかここに至つてますます無口となつちまつた。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿はいている冷飯草履ひやめしぞうりがぴちやぴちや鳴るばかりである。

こう、みんな黙つてしまつと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋さびしい。夜と云つたつて、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけはどうか、どうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいか、少しずつ光つて見える。もつともきらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然はつきりと白くなつている。そうしてその声がさあさあと絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細うちい道が少しずつ、上のぼりになるような氣持がしだした。上りだ

けならこのくらいな事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹でこぼこする。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引っ込んだりするんだらう。この凸凹に下駄げたを突つ掛ける。烈はげしいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になつて来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴なれていると見えて、よくも見えない木下こしたやみ闇を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履をびしゃびしゃ云わして、暗い凸凹を平気に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないんだが、この際だから、薄暗い中でびしゃりびしゃりと草履の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠こうもりといっしょに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼い息が切

れる。凸凹はますます烈はげしくなる。耳ががあんと鳴って来た。これが  
駆落かけおちでなくって、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだ  
が、根が自殺しそこなの仕損しいから起った自滅じめつの第一着だからだから、苦しくつて  
も、辛つらくつても、誰に難題なんだいを持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと  
云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よしいたつて、こだわるだけ  
の勇氣はない。その上先方さきは相手になつてくれないほど平気である。す  
たすた歩いて行く。口さえ利きかない。まるで取附端とつつきはがない。やむを得ず  
呼吸いきを切らして、耳ががあんと鳴らして、黙もくつて後あとから神妙しんびように尾ついて行  
く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟つ  
たのはこの時が始めてである。もつともこれが悟り始めの悟りじまいだ  
と笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続い

て、ついに鉢山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬たとえに云うが、涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙いっさい気を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になった長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は気の毒だったと云つてくれるかも知れない。増長したにしても気の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶるふる悸え

ていろつたつて出来ない相談である。病気で熱の出た時、牛肉を食わなかつたから、もう生涯しやうがゐコースの鍋なべへ箸はしを着けちやならんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉のどもと元過ぐれば熱さを忘れると云つて、よく、忘れては怪けしからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘うそである。こう云うと詭弁ぎべんのように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直しやうじきしやうめい正銘のところを云うのである。いったい人間は、自分を四角張つた不変ふへんたい体のように思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押ひらおしに他人ひとを圧おしつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟りくつも立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢あわせて嬉うれしがつてるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末

が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向うがわるいように噪ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪くって、困るもんだ。自分もあの時駆落をしず、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動いているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変っちゃ大変だ、罪悪だなどよくよくよ思つて、年を取つたら——ただ学問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見参しなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流転と、あらゆる

る漂泊ひょうはくと、困憊こんばいと、懊惱おうのうと、得喪とくそうと、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもつとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら——ありがたい事に自分はこの至大なる賚たまものを有もつてゐる、——すべてこれらがなかつたならば、自分はこんな思い切つた事を云やしない。いくら思い切つた事を云つたつて自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神妙しんびようなもの、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙にならんとは限らない。——抜けそうな足を棒のように立てて聞くと、がんと鳴つてる耳の中へ、遠くからさあさあ水音が這入はいつてくる。自分はますます神妙になつた。

この状態でだいぶ来た。何里けんとうだか見当のつかないほど来た。夜道だか

ら平生へいせいよりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹でこぼこの登りを膨ふくらつ脛びきが腫はれて、膝頭ひざがしらの骨と骨が擦すれ合つて、股ももが地面じびたへ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのつて——それでも、生きてる証拠には、どうか、こうか、長蔵さんの尻を五六間と離れずに、やつて来た。これはただ神妙に自己を没却あきらめした諦ていの体たらくから生じた結果ではない。五六間以上後おくれると、長蔵さんが、振り返つて五六歩ずつは待合してくるから、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずならなら、ちびちびに自己を奮興ふんこうさせた成行なりゆきに過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後うしろが見えたもんだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突つ切つて、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおむいた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明

りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御題目おだいもくのように見詰めてねらひ 覘ねらひをつけて来たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだろう。信心くどくの功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ない。自分はこう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至っては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留とまってくれる。留とまってくれるんだか、留とまる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留とまることはたしかだった。とうて

い素人しろうとにやできない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだなど、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。まるで人形のように活動する男であつた。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遙はるかに取り扱いやすかつたに違ちがない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後あとになるんだらうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうくらいりょうけんの了簡りょうけんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをびしゃりびしゃりと鳴らしながら凸凹でこぼこ路を飛び跳はねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かわないと覚悟をしたのは、よつほど前の事である。それでもしばらくの間はび

しやりびしやりが自分の袖そでと擦すれ擦すれくらいになって、登のぼつて来たが、今じゃもう自分の近所には影さえなくなつた。並んで歩くうちは、あまり小僧の癖くせに活澆かつぱつにあるくんで——活澆かつぱつだけならいいが、活澆かつぱつの上に非常に沈黙しんもくなんで——、随分物騒ぶつそうな心持ちだつた。もし笑うなら、極きわめて小さくつて、非常に活澆かつぱつで、そうして口を利きかない動物を想像さうぞうして見ると分る。滅多めったにありやしない。こんな動物といつしよに夜山越やまごえをしたとすると、誰たれだつて物騒ぶつそうな気持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠こうもりのようだと云つたが、全く蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたつた二人限ふたりぎりだつたら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋さむしい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異いな感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、おおいと人を呼ぶ奴は気味がよくない。山路で、黒闇くろやみで、人っ子一人通らなくつて、御負おまけに蝙蝠みちづれなんぞと道伴になつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さんが事ありげに声を揚げたのである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分を呼んだんなら、何か起つたなどびくんとするだけで済むんだが、五六間後うしろから行く自分の注意を惹ひくためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違ちがう。こつちを向いた声じゃな

い。お、おいと右左りに当ったが、立ち木に遮さへぎられて、細い道に向うの方へ遠く逃げのびて、遥はるかの先で、お、おいと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちゃいなかった。自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よつぽど蝙蝠たたに崇たられていたに違ちがない。この崇あしたは翌朝あしたになつて太陽が出たらすっかり消えてしまつて、

自分で自分を何て馬鹿だろうと思つたくらいだが、實際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈しく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがないもんだから、人魂の尻尾のように、幽かに消えて、その反動か、有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、——何とも返事がない。この反響が心細く継続しながら消えて行く間、消えてから、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇に鼻を突き合せて黙つて立っていた。あんまり好い心持じゃなかった。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云つた。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。

元來この場に臨んで急ぐなんて生意氣な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合つちまつた。定めし変な顔をして受合つたんだろうが、受合つたら急げても、急げないでもむちゃくちやに急いでもまつた。この間はどこをどんな具合に通つたか、まあ断然知らないと言つた方が穩当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留つたんで、ふと気がついた。すると一つひと家の前へ出ている。ランプが点ついている。ランプの灯ひが往来へ映っている。はつと嬉しかった。赤毛布あかげつとがありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでゐる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけなかつたし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐん

だかあても希望もなくやって来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入って来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだどつくづく感心した。ランプがこんなにありがたかった事は今日までまだかつてない。後から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛をして、そこで自分達を待ってたんだそうだ。お、お、いと云う声も小僧やあと云う声も聞えたんだが返事をしなかつたと云う話しだ。偉い奴だ。

同勢はこれでようやく揃ったが、この先どうなる事だろうと思いなながら、相変らず神妙にしていると、長蔵さんは自分達を路傍に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入って行った。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じゃもつたない。牛さえいれば牛小屋で馬さえ嘶け

ば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかにもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉たててある。残る半分は夜つびて明けて置くんじゃないかしら。ことによると、敷居みぞの溝に食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁葺わらぶきで、その藁が古くなって、雨に腐ふやけたせいか、崩れくずかかって漠然ぼくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分らないほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入って行った。なんだか穴の中へでも潜もぐり込んで行ったような心持だった。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜はすに差しってくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫さんまんなものである。この男はたとい地震がゆって、梁はりが落ちて来ても、親の死目

に逢<sup>あ</sup>うか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違<sup>ちが</sup>ない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こつちを向いて立った股倉<sup>またぐら</sup>から、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間<sup>ま</sup>にか低くなつたと見える。長蔵さんの顔は無<sup>む</sup>論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊<sup>とま</sup>つて行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神妙<sup>しんびょう</sup>が急に破裂して、身体<sup>からだ</sup>がぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明<sup>あか</sup>す事が、それほど慰藉<sup>いしや</sup>を自分<sup>自分</sup>に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、とんと気がつか<sup>つか</sup>なかつた。

やはり神妙の結果泊る所が見つかつても、泊る気が起らなかつたんだらう。こうなると人間ほど御ぎよしやすいものはない。無理でも何でもはいはいかして畏かしこまつて聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大おおに嬉うれしがる。当時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなど云う自信が伴ともなつてくる。兵隊はああでなくつちやいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと云う事も悟つた。——こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくつて解らない。実を云うと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなむずかしくなつちまつた。例たとえば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見み做なす事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は

飲むものだときさえ気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種の境界きょうがいに馴ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺まひさせた結果としてでき上るもんだから、凶に乗つてきゅきゅ押して行くと、人間がみんな馬鹿になつちまう。まあ泥棒さえしなれば好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日こんにちまで生きていたならば、いかに順良だつて、いかに励精だつて、馬鹿に違ない。だれの眼から見たつて馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるからは、たまには怒おこるがいい。反抗するがいい。怒るのように、反抗するようにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反

抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗させないように、御膳立おぜんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云つていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のような身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、七日七晩引なぬかななばんつ張りつづけに引つ張つたつてちよつとも動きやしない。今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが人間たるところだと思つてる。分りやすいように長蔵さんを引合ひきあひに出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間ごとに變つている。變るのが当然で、變るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云う意味にな

る。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつても同じ事に帰着する。嘘うそだと思ふなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たつて、以上わかり分わりッこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては濟まない。こんな景氣のいい夕ゆふ、んかを切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うところ云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんに苦にがい顔をして謝罪あやまっていた。自分ながら、どうも困つたもんだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくつちや信用を落して路頭に迷うような仕儀に

なると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやっぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減って飯が食いたくなくなって、御腹が張ると眠くなつて、窮きゆうして濫らんして、達おこなして道を行つて、惚ほれていっしょになつて、愛想あいそが尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変の沙汰さたである。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだい

ぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元気のいい今の気焰きえんをやめて、再びもとの神妙しんびような態度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立って、往来を向きながら、ここへ泊って行こうと云い出した時、こんな破屋あばらでも泊る事が出来るんだつたと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元来泊るために建ててあるんだなど、ようやく気がついたくらい、泊る事は預期いつもしていなかった。それでいて身体からだは蒟蒻こんやくのように疲れ切ってる。平生いつもなら泊りたい、泊りたいですべての内臓うちぞうが張切れそうになるはずなのに、没自我ぼつじがの坑夫行こうふゆき、すなわち自滅じめつの前座まえざとしての墮落おらくと諦めあきらめをつけた上の疲労疲労だから、いくら身体に泊る必要があっても、身体の方から魂へ宛て

て宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下ったんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、實際この時の心の状態は、こう譬たとえを借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛ゆるんで、立ち切れない足を引き摺ずって、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布あかげつとはそのそ這入はいつてくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじゃあるまいが、草履ぞうりの尻が勢よく踵かかとへあたるんで、ぴしゃぴしゃ云う音が飛ぶように思われた。

這入はいつて見るとふんと臭におった。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻

をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着むとんじやくであつた。土間から上へあがる段になつて、雑巾ぞうきんでもと思つたが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がつちまつた。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺めながてみると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がつている。自分は尻だけおろして、障子しょうじ——障子は二枚あつた——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立ててあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばた

ばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間から茶と煙草盆たばこぼんを持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶる尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大變な誤解をしていたんだねと呆あきれ返かえるものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そうして長蔵さんと談話はなしをし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判はに這入はいった時に、残らず聞いてしまったんだらう。それとも長蔵さんは

たびたびこんな呑気屋のんきやを銅山やまへ連れて行くんで、自然その行き還りにはこの主人の厄介やっかいになりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠いねむりを始めた。いつから始めたか知らない。馬を売損うりそこなつて、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしなくなつて、自然じねんと長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆あばらやが消えて、破屋あばらやまでも消えた時、こくりと眠ねむりが覚さめた。気がつくくと頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡もちげるとはなはだ重い。主人はやっぱり馬の話をしてゐる。まだ馬かと思つてるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打遣うつちやつて置くと、忽然こつぜんぱつと眼があいた。薄暗い部屋の中うち

に、影のような長蔵さんと亭主が膝を突き合せている。ちょうど、借が  
どうかかしてハハハハと亭主が笑ったところだった。この亭主は額が長  
くつて、斜に頭の天辺まで引込んでるから、横から見ると切通しの坂く  
らいな勾配がある。そうして上になればなるほど毛が生えている。その  
毛は五分くらいなのと一寸くらいなのとが交つて、不規則にしかも疎に  
もじやもじやしている。自分が居眠りからはつと驚いて、急に眼を開け  
ると、第一にこの頭が眸の底に映った。ランプが煤だらけで暗いものだ  
から、この頭も煤だらけになって映つて来た。その癖距離は近い。だか  
ら映った影は明瞭である。自分はこの明瞭でかつ朦朧なる亭主の頭を居  
眠りの不知覚から我に返る咄嗟にふと見たのである。この時はあまり好  
い心持ではなかった。それがため、居眠りもしばらく見合わせるような気

になつて、部屋中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布けつとの下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開いて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯ひがあたるから、よく見ていると、藁葺わらぶきの裏側が震えるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛いっそくとびに正気へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼だけ開けても気は判然はつきりしない。ぼんやりと世界に帰つて、またぞろすぐと不覚おちいに陥おちいつちまう。それから例のごとく首が落ちる。微かすかに生きてるような気になる。かと思つとまた

一切空いっさいくうに這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつたのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覚さめた時は、もう居眠いねぶりはしていなかつた。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなつていた。そうして涎よだれを垂れている。——自分は馬の話うまを聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金かきの話うまを聞いて、また居眠りの続を復習ふくしゅうしているうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂たまの音沙汰おとさたを聞かなかつたんだから、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返つてるのを見るや否いなや、眼をあいて涎よだれを垂れて、横になつたまま、じつとしていた。自覚があつて死んでたらこんなだろう。生きてるけれども動く気にならなかつた。昨夜ゆうべの事はこと一から十

までよく覚えている。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくつて、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間には厚い仕切りが出来て、截然と區別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が当にならなくなる。要するに人世は夢のようなものだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、ううんと伸をして、寝たまま握り拳を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦つて、腕のありたけ出たところで、勢がゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹んだ頬つぺたをぼりぼり掻き出した。起

きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やつぱり眼が覚めていないなと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太が抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあって、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘の高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたって際限がないから、起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布ばかりである。これはまた呑気なもんで、依然として毛布から大きな足を出してぐうぐう鼾声をかいて寝ている。それを長蔵さんが起す。

「御前おまえさん。おい御前さん。もう起きないと御午おひるまでに銅山やまへ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺ゆすり始めたんで、やむを得ず、毛布けつとの方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端はんぱに立ち上った。これでみんな起きたようなものの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか迷っていると、長蔵さんが、「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云って、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうなると自分も何と

か片をつけなくつちやならないから、一番あとから下駄を突掛(つ)けて、長蔵さんと赤毛布(あかげつと)が草鞋(わらじ)の紐(ひも)を結ぶのを、不景気な懐手(ふとしろで)をして待っていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯(あさめし)を食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅沢(ぜいたく)の沙汰(さた)のように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の結果、必要とまで見做(みな)されているものが、急に余計な事になつちまうのはおかしいようだが、その後(のち)この顛倒(てんとう)事件を布衍(ふえん)して考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやつてる事が当然になって、一人だけでやる事が余計のように思われるんだから、当然になろうと思つたら味方(こしら)を大勢拵(こしら)えて、さも当然であるかの容子(ようす)で不当な事をやるに限る。やつては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布(あかげつと)でさえ自分にはこれほどの変化

を来たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだらうね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいような根性が幾分こんじょうかあらわれたためか、または十九年来の予期に反した起きた

なり飯拔きの出立しゅつたつに、自然不平の色が出ていたためだろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつと兩人ふたりにも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無やじなしか、または準宿無しでなくつちやならない。目が醒さめて、夜が明けてるのに、汁の煙けむも、漬物の香においも、いっこう連想に乗つて来ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養くようをする吞氣屋のんきやで、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸さいわいな人間である。自分は十九年来始めて、こう云う人間と一つ所ところに泊つて、これからまたいっしょに歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の

顔色を伺つて見ると少しも朝飯を予期している様子がないんで、双方共朝飯を食い慣<sup>つ</sup>けていない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺<sup>ず</sup>り落ちていたと云う事が分つた。しかし分つたと云うばかりで別に悲しくもなかつた。涙は無論出なかつた。ただ長蔵さんが、この朝飯の経験に乏<sup>とほ</sup>しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかつたのを、今では残念に思つてる。食つた事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨励<sup>しょうれい</sup>されて「食いたい」と答えるか。——つまらん事だがどつちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立つて、ちよつと後<sup>うし</sup>ろを振り返つたが、

「熊くまさん、じゃ行つてくる。いろいろ御世話様」

と軽く力ちから足を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寝ている。覗のぞいて見ると、昨夕ゆうべうつつに気味をわるくした、もじゃもじゃの頭が布団ふとんの下から出ている。この亭主は敷蒲しきぶとん団を上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじゃもじゃの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうして熊さんの顔が出た。この顔は昨夜ゆうべ見たほど妙でもなかった。しかし額がさかに瘡こけて、脳天まで長くなつてゐる事は、今朝でも争われない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構おかま申さなかつた」

と云つた。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけている。

「寒かなかつたかね」

とも云つた。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後うしろから、熊さんが欠伸あくびまじ交りに、

「じゃ、また歸りに御寄り」

と云つた。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足おく後れて、小僧と赤毛布あかげつとの尻を追つ懸かけて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中には慣なれ切つたものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午ひるまでには銅山やまへ着かなくつちやならないから急ぐんだそうだ。なぜ午までに着かなくつちやならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇氣がなかつたから、黙つて食つついて行つた。す

るとなるほど登のぼりになつて来た。昨夕あれほど登つたつもりなのに、まだ登るんだから嘘うそのようでもあるが実際見渡して見ると四方しほうは山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があるんだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這入はいる訳になる。この模様では銅山どうざんのある所は、定めし淋しいだろう。呼息いきを急せいで登りながらも心細かつた。ここまで来る以上は、都へ帰るのは大変だと思つと、何の酔興すいきようで来たんだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出奔しゅつぽんしたんだから、おいそれと歸りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目に懸かからないように、朽果くちはててしまうのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼息を継つぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すこいほど木を被かぶつている上に、雲がかかつて見る間まに、遠くなつて

しまう。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適当かも知れない。薄くなった揚句あげくは、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そうかと思うと、雲の方で山の鼻面はなづらを通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲まき返しているうちに、薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなつて、木の色が明かになる頃は先刻さつきの雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当けんとうがつかなくなる。立ちながら眺ながめると、木も山も谷もめちやめちやになつて浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届く辺あたりまで落ちかかった。長蔵さんは、

「こりゃ、雨だね」

と、歩きながら独言ひとりごとを云った。誰も答えたものはない。四人よつたりとも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲まかれるような、また埋うずめられるような有様で登って行った。自分にはこの雲が非常に嬉しかった。この雲のお蔭かげで自分は世の中から隠かくしたい身体からだを十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせずにその中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉とじ籠こめられたような窮屈きうくつも覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬ほうふられると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であった。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全くの

氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌あすが日にも、また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾わが身みで吾わが身みが保証出来ないような、また吾わが身みが吾わが身みでないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまったり、隔へだてられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布けつとが赤くなつたり白くなつたりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなつたり薄くなつたりする。そうして誰も口を利きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後あとになり先になり、殖ふえもせず滅へりもせず、四つのまま、引かれて合うように、弾はじかれ

て離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になつたんだから、世の中は自分共にたつた四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿無やどなしである。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷つて歩く連中である。この連中と道伴みちづれになつて登り一里、降り二里を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になつた。時計がないんで何時なんじだか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過ひるすぎとも云われるし、また夕方と云つても差支さしつかえない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微かすかに見える山の色であつた。その色が今までのとは打つて変つてゐる。いつの間にか

木が抜けて、空坊主からぼうずになつたり、ところ斑まだらの禿頭はげあたまと化けちまつたんで、丹砂たんしゃのように赤く見える。今までの雲で自分と世間をひとふで一筆に抹殺まつざつして、ここまでふらつきながら、手足だけを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒さめた気分になつた。色彩の刺激が、自分にこう強く応こたえようとは思いがけなかつた。——実を云うと自分は色盲じゃないかと思ふくらい、色には無頓着むとんじやくな性質たちである。——そこでこの赤い山が、比較的烈しく自分の視神経を冒おかすと同時に、自分はいよいよ銅山に近づいたなと思つた。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたとも云えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅あかがねを連想したんだらう。とにかく、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云うのは大概このくらいなものだと思ふが——いわゆる直覺

的に事実を感得した時に、長蔵さんが、

「やっと、着いた」

と自分が言いたいような事を云った。それから十五分ほどしたら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすって視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめのの上に、白粉おしろいをつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔いとまに出る暇もないうちに通とり越こしちまった。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立たって、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくっちゃ、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちっとも分らなかつたから、黙って橋の上へ立って、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家が見える。やっぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分からないのがある。これも新しい。古ぼけて禿げてるのは山ばかりだった。何だかまた現実世界に引き摺り込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙って橋の向を覗き込んでるのを見て、「好いかね、御前さん、大丈夫かい」とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭めいりょうに答えたが、内心あまり好くはなかつた。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念けんねんがある様子であつた。赤毛布あかげつとと小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭からこの両人ふたりは過去の因果いんがで、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色けしきがありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危あぶないかと睨にらまれていたのかも知れない。好い面の皮つちだ。

それから四人揃そろつて、橋を渡つて行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中うちで一番いかめしい奴やつを指さして、あれが所長の家うちだと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシ、キだよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシ、キと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつほど聞き返そうかと思つたが、大方これがシ、キなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシ、キと云う言葉を明瞭に理解しな

ければならない身分になつたが、やっぱり始めにぼんやり考えついた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れていよいよシ、キの方へ這入る事になつた。鉄軌レールについてだんだん上のぼつて行くと、そこに粗末な小

さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまで、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分のようない

人ものは這入りたくたつて這入れないんだつた。こう云う小屋の間を縫つて、飽あきずに上のぼつて行くと、今度は石崖いしがけの下に細長い横幅はかりばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続々あらわれて来た。大きさも長さも似たもんで、みんな崖下がけしたにあるんだから位地にも変りはないが、向むきだけは各々違ちがつてる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢ぜいたくは言つていられない。やつとの思いで、ならした地面へ否応いやおうなしに、方角のお構かまなく建ててしまったんだから不規則なものだ。それに、第一、登つて行く道がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思うと、いつの間まにかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待っていると、急に路みちが外れて遠くへ持つてかれ

てしまう。まるで見当けんとうがつかない。その上この細長い家から顔が出て  
る。家から顔が出ているのが珍らしい事もないんだが、その顔がただの  
顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ  
加減がまた、尋常でない。青くつて、黒くつて、しかも茶色で、とうて  
い都会にいては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまる  
で比較にならない。自分が山路を登りながら、始めてこの顔を見た時は、  
シキと云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシキだなと感じた。し  
かしいくらシキでも、こう云う顔はたくさんあるまいと思つて、登つて  
行くと、長屋を通るたびに顔が出ていて、その顔がみんな同じであ  
る。しまいにはシキとは恐ろしい所だと思つまで、いやな顔をたくさん  
見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出ている顔

はきつと自分らを見ていた。一種癡悪な眼つきで見っていた。——とうとう午後の一時に飯場へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚き出しをするから、そう云う名をつけたものかも知れない。自分はその後飯場の意味をある坑夫に尋ねて、篋棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云ってるんでえ、とひどく剣突を食った事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用しているんだから、滅多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となってるんだから至極簡単でかつ全く実際のなものである。

そう云う訳で飯場の意味は今もって分らないが、とにかく崖の下に散

在している長屋を指すものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布と小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯を食うようになったんだなと後から気がついた。二人の消息はその後いっこう聞かなかった。銅山のなかでもついぞ顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降って来た小僧と落ち合つて、夏の夜を後になり先になつて、崩れそうな藁屋根の下でいっしょに寝た明日は、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく

着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏まりまとそうで、纏らない、云わばでき損そこないの小説めいた事がだいぶある。長い年月を隔へたてて振り返つて見ると、かえつてこのだらしなく尾おを蒼穹そうきゆうの奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返つて思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懐おもむきの趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧あいまいな点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがつて十分に発展して来て因果いんがの予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密うちの中に流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半日いちやはんにちの画えの方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくつて好い心持だ。た

だに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神かみさんもそうである。もつと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記しるすだけである。小説のように拵こしらえたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいっしょであった。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実まじ極きわめて簡単なものであった。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか

使つてくれと云つたばかりである。自分の姓名も出生地しゅつしやうちも身元みもとも閱歴も何にも話さなかつた。もちろん話したくつたつて、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手つ取り早く片づける了簡りやうけんとは思わなかつた。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だつて、それ相応の手續がなくつちや採用されないもんだとばかり思つていた。大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺おすんだらう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考へていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭はんばがしらは——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかつた。眉毛まゆげの太くつて蒼髯あおひげの痕あとの濃いたくま遅たくましい四十恰好がっこうの男だつた。——その男が長蔵さんの話を一通り聞かや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作むぞうさに云つちまつた。ちようど炭屋どがまが土釜どがまを台所かっへ担ぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々はるばる山越やまこえをして坑夫こうぶになりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹うちの中でこの飯場頭いっぶんじかんを恨うらんだが、これは自分の間違まちがであつた。その訳は今直すぐに分る。

飯場頭と云うのは一ひとつの飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡りようけんしだいでどうでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間いっぶんじかんに談判を結了した長蔵さんは、「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云つたなり、赤毛布あかげつとと小僧こぞうを連れて出て行つた。また帰つてくる事と思つたが、その後ごいつこう影も形も見せないんで、全く、置去おきざりにされた

と云う事が分つた。考えるとひどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしてもぼん引の手数料はいつ何時なんどきどこで取つたものか、これは今もつて分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然しやうぜんとしていると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが変わっている。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩で出逢あう、万事を心得た苦労人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

はんばかり

飯場掛の言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなつた。さん

ざつぱらお前さんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて、もうとうてい御

前さん以上には浮ばれないものと覚悟をしていた矢先に、突然あなた

昔に帰つたから、思いがけない所で自己を認められた嬉しさと、なつか

しさと、それから過去の記憶——自分はずいおととい一昨日までは立派にあな

で通つて来た——それやこれやが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて

来た上に、相手の調子がいかにていねいも鄭寧で親切だから——つい泣きたく

なつた。自分はその後ごいろいろな目に逢あつて、幾度となく泣きたくなつ

た事はあるが、擦すれ枯からしの今日こんにちから見れば、大抵は泣くに当らない事が

多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目にな

れば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜くちおしい、心細い涙は経験

で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他ひとから認識された時の嬉し涙は死ぬまでついで廻るものに違ない。人間はかように手前勘てまえかんの強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になつてると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛はんばがかりの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかつた。悄然しやうぜんとはしていたが、気は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思うように口が利きけないから、黙つて向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。――

「……まあどうして、こんな所へ御出なすつただか、今の男が連れて来るくらいだから大概私にも様子は知れてはいるが——どうです、もう一遍考えて見ちゃあ。きつと取ツ附坑夫になれて、金がうんと儲かるてえような旨い話でもしたんでしよう。それがさ、實際やつて見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行って教育なんか受けたものは、どうしたって勤まりつこありませんよ。……」

飯場頭はここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくっちゃならない。幸いこの時はもう泣きたいところを通り越して、口が利けるようになった。そこで自分はこう云った。——

「僕は——僕は——そんなに金なんか欲しくないです。何も儲けるためにやっつて来た訳じゃないんですから、——そりゃ知ってるです、僕だつて知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶している。はなはだ穏かならぬ生意気な、ものの云いようだった。若いうちは、たった今まで悄気しよげでいても、相手しだいですぐつけ上つちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長蔵さんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹ほらふきであると言ふ真相をよく自覚していると言ふ意味なんだから、いくら知ってたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞たまさ着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志

願だなどと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであった。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合にわぬ篤実とくじつな男で、かつ自分の不経験を気の毒に思うのあまり、この生意気を生意気と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚くにつれて、僕は知しつて、思しい出しては独ひとり赧あかい顔かほをしていた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もつて自分は好い名だと思つてる。

原さんは別に厭いやな顔つきもせず、黙もくつて自分の言訳を聞いていたが、やがて頭あたまを振り出した。その頭は大きな五分刈ごぶかりで額ぬでの所が面摺めんずれのように

抜き上がったっている。

「そりや物数奇と云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるったって、何も家を出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時の出来心なんだからね。やって見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてるんだから、廃すが好うがしよう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したものであ、有りやしませんぜ。え？ そりや来る。幾人も来る。来る事は来るが、みんな驚いて逃げ出しちまいますあ。全く普通のもの出来る業じゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくったって、口過だけなら骨は折れませんやあ」

原さんはここに至って、胡坐を崩して尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しそうな按排である。大いに困った。困った結果、坑夫と

云う事から気を離して、自分だけを検査して見ると、——何だか急に寒くなった。袷あわせはさっきの雨で濡ぬれている。洋服ズボン下は穿はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の気候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは気が張っていたから、好かった。しかし飯場はんばへ来て休息した上に、坑夫になる見込がほとんど切れたとなると、情なさけないのが寒いのと合併して急に顫ふるえ出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪たえんほど醜みにくいもんだったろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置去おきざりにして、挨拶あいさつもしらずに出て行った長蔵さんが恋しくなった。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだ

から、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓口がまぐちを長蔵さんに取りられてから、懐中ふところには一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減って山の中で行倒ゆきたおれになるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢あえない事もないだろう。逢ってこれこれだと泣きついたら、今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してくれまいものでもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑ひまな事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好すきな原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなった長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理由わけだろう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板行はんこうで押したよ

うに考えないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露わみあらしたり、片方かたつぱづかないように心を自由に活動させなくってはいけない。弱輩じやくはいな自分にはこの機会きあいがまだ呑み込めなかつたもんだから、原さんの前に立って顫えながら、へどもどしていると、原さんも気の毒になつたと見えて、

「あなたさえ帰る気なら、及ばずながら相談になろうじゃありませんか」と向うから口を掛けてくれた。こう切つて出られた時に、自分ははつとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはつと気がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこの原さんを除いて、ほかにないんだと気がついた。気がつくと同時にまた口が利きけなくなつた。是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やつぱり

立ちすくんでいた。気がついて何にもならない、ただ右の手で拳骨げんこつを拵こしらえて寒い鼻の下を擦こすったように記憶している。自分はその前寄席よせへ行つて、よく噺家はなしかがこんな手真似てつきをするのを見た事があるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さんが、今度はこう云つた。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気かなけは肌に着いていない。のたれ死じにを覚悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の草鞋わらじせん銭でも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地すに摺りつけても、原さんから旅費を恵んで

貫つたろう。實際こうなると廉恥れんちも品格もあつたもんじやない。どんな不体裁ふていさいな貫い方でもする。——大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。——しかしけつして褒めほられた始末じやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違ふ。人間の生地きじはこれだから、これで差支さしつかえないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地は小豆あずきだから、羊羹の代りに生小豆なまを嚙かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもしい料簡りょうけんになつたものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遥はるかに高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らない

で、生涯しやうがい練羊羹ばかり味わつてる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭はんばがしらからわずかの合力ごうりきを仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意こういで調べてくれる金も、二三日木賃宿にさんちきちんやどで夜露を凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもなく流れ出さなければならな  
いと、冥々めいめいのうちうちに自覚したからである。自分は屑いさぎよく涙金なみだきんを断つた。断つた表面は律義りちぎにも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索せんさくすると、慾てんびんの天秤てんびんに懸かけた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助こたわを断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。「その代り坑夫こうふに使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやつて見る気なんですから」

「随分酔興すいきようですね」

と原さんは首を傾かしげて、自分を見つめていたが、やがて溜息のような声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」

と云った。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だって……」

「家うちなんかありません。坑夫になれなければ乞食こじきでもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利きくのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出でにくいと知りながら、我慢

して使った結果、おのずと拍子ひょうしに乗って来た勢いに違いないだから、まあ器械的の変化と見倣みなしても差支さしつかえなかるうが、妙なもので、その器械的の変化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌しゃべる。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分はだんだん大胆になって来た。

いや、大胆になったから饒舌しゃべれたんだろう、君の云う事は顛倒あべこべじゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもつともと首肯うなずくだろう。

自分は大胆になった。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌っておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覚して来た。一昨日おとというち家を飛び出す間際まぎわまでは、夢にも坑夫になろうと云う分別は出なかつた。ばかりではない、坑夫になるための駆落かけおちと事がきまつていたならば、何となく恥はずかしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔しゅつぽんの時期を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない坑掘あなほりになり下る目的の逃亡とは、何不足なく生育そだつた自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を噛かみしめながら、しよう事なしの押問答おしとこたをしているうちに、自分はどうかあつても坑夫になるべき運命、否いな天職てんしやくを帯びてるような気がし出した。この山とこの雲とこの雨を凌しのい

で来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目まじめに書いてるんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地まけおしだか、負惜みまけおしだか、それとも行倒れになるのが怖こわくつて、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説くどいた。

「……そう云わずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだやって見ない事なんだから——せつかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐かいに、一日いちんちでも二日ふつかでも、いいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、とうてい役に立たないと事がきまれば帰ります。

きつと帰ります。僕だって、それだけの仕事が出来ないのに、押おしを強く御厄ごやくかい介になつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神かみさんが云つた通りをそのまま凶に乗つて述べ立てた。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴ふいちやうする文句ではなかつた。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗のぞくように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだらう。自分も原さんといっしょに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇つている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の

空合そらあいだ。この一瞬時に、自分の願が叶かなつて、自分はまず山の中の人となつた。この時「その代り苦しいですよ」と云つた原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻下こっかの志を遂とげると、すぐ反動が来て、かえつて志を遂げた事が急に恨うらめしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取つた時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日あしたの朝シキへ這入はいつて御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりませんかね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のように思われましようが、なかなか外で聞いているような生容易なまやさしい業わざじゃないんで。まあ取っつけか

ら坑夫になるなあ」と云つて自分の顔を眺めていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませんがね。坑夫でなくつても、好うがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくつちやならないと云う事がここで始めて分つた。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかには何かあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」

と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山にはね、一万人も這入つててね。それが掘子に、シチュウに、山市に、

坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこつてえな、一人前の坑夫に使えねえ奴がなるんで、まあ坑夫の下働したばたらきですね。シ、チ、ユ、ウは早く云うとシ、キの内のなか大工見たようなものかね。それから山市やまいちだが、こいつは、ただ石塊いしつこをこつこつ欠いてるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしよう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんなものですよ。それで坑夫となると請負うけおい仕事だから、間まが好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当ねんで年ねんが年中ねんじゆう三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分ごぶは親方が取っちまって、病気でもしようもんなら手当が半分だから十七銭五厘ですね。それで蒲団ふとんの損料が一枚三銭——寒いときは是非二枚要いるから、都合で六銭と、それに飯代が一日十四銭五厘、御菜おさいは別ですよ。——どうです。もし坑夫

にいけなかつたら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかつたが、ここまで来れば、今更いまさらどうしたつて否いやだと断られた義理のもんじゃない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠我慢やせがまんのつけ景氣げいきのごとく響いたか、その辺は確へんと分らないが、何しろこの一言いちごんを聞いた原さんは、機嫌よく、

「じゃまあ、御上おあがんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入つて御覧なさるがいい。何しろ一万人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かつてると、毎日毎日何

だかだつて、うるさい事ばかりでね。せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日に二三人はきつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思うと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬いばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあやる気なら本氣にやつて御覧なさい。腰を掛けてちや、足が草臥くたびれるだろう。こつちへ御上り」

この逐一ちくいちを聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいちだろうが一生懸命に働かなくつちやあ、原さんに対して済まない仕儀になつて来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけつしてしまひときめた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の

方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出なさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後あとから尾ついて行つた。小作こづくりな婆さんで、後姿きやしやの華奢きやしやな割合には、ぴんぴん跳はねるように活澁かつぼつな歩き方をする。幅の狭い茶色の帯をちよつきり結むすびにむすんで、なけなしの髪ぼんのかほを頸窩けいごへ片づけてその心棒しんぼうに鉛色かんざしの簪かんざしを刺ししている。そうして襷掛たすきがけであつた。

何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、用事の真つ最中に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻しりを振るんだらう。それとも山育やまそだちだからかしら。いや、飯場はんばだから優長ゆうちやうにしちやいられないせいだらう。して見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だつて

安閑としちやいられない。万事この婆さんの型で行かなくっちゃなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満して、頭と胸の組織がちよつと變つたよ  
うな気分になつた。その勢いで広い階子段はしごだんを、案内に應じて、すとなす  
とんと景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ば  
かり出るや否や、この決心が、ぐうと退避たじろいだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。畳数たたみかずは何十  
枚だか知らないが遥はるかの突き当りまで敷き詰めてあつて、その間には一重ひとえ  
の仕切りさえ見えない。ちようど柔道の道場か、浪花節なにわぶしの席亭せきていのような  
恰好かっこうで、しかも広さは倍も三倍もある。だから、ただ駄々だだツだ広い感じば  
かりで、畳の上でもまるで野原へ出たとしきやあ思えない。それだけで

も驚く価値ねうちは十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏いろりが二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人ずつかたまっている。自分の決心が退避ひきよういだと云うのは、卑怯ひきような話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩じやくはいの事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多めったに首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒いけんどられたんだから、この黒い塊かたまりを見るが早いか、いささか辟易ひるんじまった。それも、ただの人間ならしい。と云つちや意味がよく通じない。——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支さしつかえない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合せたように、こつちを向いた。その顔が——  
実はその顔で全く畏縮いしゆくしてしまつた。と云うのはその顔がただの顔じゃ

ない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ると云うなら、ざつと話すが、——ほおぼね頬骨がだんだん高く聳そびえてくる。顎あごが競せり出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺つぼのように引ッ込んで、眼球を遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う骨がことごとく呐喊とっかん展開するとても評したら好かろう。顔の骨だか、骨の顔だか分らないくらいに、稜りょうりよう々たるものである。劇はげしい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取つたつて、ああなるもんじゃない。丸味とか、温味あたたかみとか、優味やさしみとか云うものは葉にしたくつても、探し出せない。まあ

一口に云うと獯猛だ。不思議にもこの獯猛な相が一列一体の共有性になつていると見えて、囲炉裏の傍の黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間に獯猛な顔が十四五揃つた。向うの囲炉裏を取捲いてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がつてくるとき、長屋の窓から自分を見下していた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでゐる総勢一万人の顔はことごとく獯猛なんだろう。自分は全く退避んだ。

この時婆さんが後を振り返つて、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸を据えて、獯猛の方へ近づいて行つた。ようやく囲炉裏の傍まで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐んなさい」

と差<sup>さ</sup>しずをしたが、ただ好<sup>い</sup>加減<sup>かげん</sup>な所へ坐れと云うだけで、別に設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊<sup>かたま</sup>りを避<sup>さ</sup>けて、たった一人畳の上へ坐つた。この間獯猛な眼は、始終<sup>しじゆう</sup>自分に喰<sup>く</sup>つについている。遠慮も何もありやしない。そうして誰も口を利<sup>き</sup>くものがない。取附端<sup>とりつきは</sup>を見出<sup>みいだ</sup>すまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、ぼつねんと独<sup>ひと</sup>りぼつちで離れているのは、獯猛の目標<sup>めじるし</sup>となるばかりだし、大いに困った。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、器械的に「ここへ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てて階子段<sup>はしごだん</sup>を降りて行つてしまった。広い寄席<sup>よせ</sup>の真中にたった一人取り残されて、楽屋の出方<sup>でかた</sup>一同から、冷かされてるようなものだ、手持無沙汰<sup>てもちぶさた</sup>は無論である。ことさら今の自分に取つては、心細い。のみならず裕<sup>あわせ</sup>一枚ではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんか

ん炭を焼たいて獰猛共が囲いろ炉裏へあたつてるんでも分る。自分は仕方がないから、れ隠かくしに襯衣シヤツの釦ボタンをはずして腋わきの下へ手を入れたり、膝ひざを立てて、足の親指を爪つねつて見たり、あるいは腿ももの所を両手で揉もんで見たり、いろいろやつていた。こう云う時に、落ついた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心しんから落ちついて、平気で坐つてる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではとうてい覚束おぼつかない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な真似まねをしていると、突然、「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちようど下を向いて鳴海絞なるみしぼりの兵児帯へこおびを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣かぞった。見るとさっきの顔揃かぞいで、眼がみんなこつちを向いて、

光ってる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も犍猛じょうもうで、よく見るとその犍猛のうちに、輕侮あなどりと、嘲弄あざけりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端とたんに發明した事実で、發明するや否や、非常に不愉快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒かかったか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢におつたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云つたものがある。この声はさっきの「おい」よりも少し皺しやが枯がれてい  
たから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たぢの言葉

でないから——字で書くとき普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を倶利伽羅流に崩したんだから、はなはだ下等である。——それでやっぱり黙ってた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思ったよりも叮嚀であつた。ところが原さんは飯場頭である。頭ですらこれだから、平の坑夫は無論そう野卑じゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口が藪から棒に飛んで来た時には、こいつはと退避む前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいっその事毒突返しとなら、袋叩きに逢うか、または平等の交際が出来るか、どつちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかつた。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだろう。

それにもかかわらず、兄あにいに類似した言語は無論、尋常の竹篋返しつぺいがえしさえ控えたのは、——相手にならないと先方さきを軽蔑けいべつしたためだろうか——あるいは怖こわくって何とも云う度胸がなかつたんだろうか。自分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後あとの方らしい。とにかくも両方交まじつてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には軽蔑しながらも怖こわいものが沢山いづくらもある。矛盾にやならない。

それはどつちにしたって構わないが、自分がこの悪口あくたいを聞いたなり、おとなしく聞き流す料簡りょうけんと見て取った坑夫共は、面白そうにどつと笑つた。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ちがない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸さいわいと嘲弄ちやうつうするのである。

自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨みを、吾身一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入るまでは、自分こそ社会に立てない身体だと思ひ詰めていた。そこで飯場へ上つて見ると、自分のような人間は仲間にしてやらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立つて、立派に板挟みとなつた。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰と云うよりは、情ないほど不人情な奴が揃つてると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だつて、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否

や、畜生奴ちくしようめと思つた。俗語に云う怒おこつた時の畜生奴じゃない。人間と受  
取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離が  
だいぶん詰つてるから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にし  
ないかも知れないが、何しろ十九年しか、使つていない新しい柔かい頭  
へこのわる笑がじんと来たんだから、切せつなかつた。自分ながら思い出す  
たびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系  
統をそのまま真綿くもに包んで大事にしまつて置いてやりたいような気がす  
る。

この悪意みに充みちた笑がようやく下火になると、

「御前おめえはどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つ

ていたから、声の出所でどころは判然はつきり分つた。浅黄色あさぎいろの手拭染てぬぐいじみた三尺帯を腰骨の上へ引き廻して、後向うしろむきの胡坐あぐらのまま、斜はすに顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜けつまくが一面に充血して

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹へこまして、愚弄ぐろうの笑いを洩もらしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎あごでしゃくつた。するとこの相図を受けた、願人坊主がんにんぼうずが、入れ替かつてこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生しよせツ坊ぼだな。大方おおかた女郎買おんなかひでもしてしくじつたんだらう。太え奴だ。全体ぜんてえこの頃の書生ツ坊の風儀が悪くつていけねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く帰かえれ。そんな瘡やせつこけた腕うででできる

稼業かぎようじゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張合はりあいが抜けたせいかわいらい冷かすのが少し静まった。その時一人の坑夫——これは尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらいに眼鼻立とどのが調っていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒い塊かたまりを見るたびに、人数にんずやら、着物やら、犍猛どつもうの度合やらをだんだん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼でできた上に獣慾あふらの脂が浮いているところばかり眼に着いて、どれも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫だけが一際ひとと目立って見えるようになった。年はまだ三十にはなるまい。体格は倔強くつぎようである。眉毛まみえと鼻の根と落ち合う所が、一段奥へ引っ込んで、

始終しじゆう鼻眼鏡でお圧しつけてるように見える。そこに疝癩かんしゃくが拘泥こうでいしていそうだが、これがために犍猛の度はかえって減ずると云つても好いような特徴であつた。——この坑夫が始めてこの時口を利きいた。——

「なぜこんな所へ来た。来たつて仕方がないぜ。儲もうかる所じゃない。ここにゐる奴あ、みんな食話くいづめものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰つて新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通かよつたもんだが、放蕩ほうとうの結果とうとう、シキの飯を食うようになつちまつた。おれのようになつたが最後まで駄目だ。帰ろうたつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ帰つて新聞配達をしろ。書生はとてひとつきも一月と辛抱は出来な

いよ。悪い事は云わねえから帰れ。分つたらう」

これは比較的まじめ真面目な忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの

獐どうあくは悪派もおとなしく交まぜつ返しもせずまぜに聞いていた。その惰性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だつた。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの変化はあれ、やっぱり一つ穴でこつこつあらがね鋤塊を欠いている分の事だろう。そう芸こうせつに巧拙のあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ちがひない。自分は今こんなに馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされない人非人にんびにんとして、多勢たぜいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首つっこを突込んで、獐どうもうぐみ猛組の一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらしいの勢力を得

る事はできるかも知れない。できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。——随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつていようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましょうと云う返事もしなかつた。そのうちいったん静まりかけた愚弄ぐろうの舌したがまた動き出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑のみ込んで置かなくっちゃ迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょうていぶんもあるじゃねえか」  
と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙っもくていようかしらんとも思ったけれども、万一掟おしを破やぶつて、あとで苛ひどい目に逢あうのが怖こわいから、まあ聞いて見た。すると他ほかの坑夫こうぶが、すぐ、返事へんじをした。

「しよしよようのねえ奴やつだな。親分おやぶんを知らねえのか。親分おやぶんも兄弟分きょうていぶんも知らねえで、坑夫こうぶになろうなんて料簡りょうけん違ちがえだ。早く帰かえれ」

「親分おやぶんも兄弟分きょうていぶんもいるから、だから、儲もつけようたつて、そう旨うまかあ行いかねえ。帰かえれ」

「儲かるもんか帰るが好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも実際自分のためを思つて帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うのである。さぞ儲けたいだろうが、そうは問屋で卸さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うのである。したがってどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの囲炉裏の周囲ばかりにやいない。さつきちよつと話した通

り、向うの方にも大きな輪になって、黒く塊かたまっている。こっちの団体だけですら持ち扱あつかっているところへ、あっちの群勢ぐんぜいが加勢かぜいしたら大事だいじである。自分は愚弄ぐろうされながらも、時々横目を使つかつて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまふ。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来きそうな未来の敵を、見ていた。かよように自分の心が、左右前後と離はなれ離なれになつて、しかも独立ができませんものだから、物の後あとを追掛おっかけ、追おん廻まわしているほど辛つらい事はない。ななんでも敵に逢あつたら敵を吞のむに限る。吞のむ事ができなければ吞のまれてしままうが好よい。もし両方共困難ならぶつりと縁きを截きつて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心こころを持もつてく事も出来ず、しかも敵の尻しつを嗅かがなければならぬとなると、

はなはだしき損となる。したがつてもつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦しやかの空説法からげつぽうである。もし講釈をしないでも知れ切つてる陳説ちんせつなら、なおさら言うだけが野暮やぼになる。どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がつかなくつて困る。

自分が四方八方に気を配つて、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、

「御膳ごぜんを御上がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間まに婆さんが上がつて来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなつて、萎縮いしゆくした真最中だったから、

御膳の聲が耳に入るまではまるで気がつかなかった。見ると剥げた御膳おぜんの上に縁ふちの欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃めしびつも乗っている。箸はしは赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆うるしが半分ほど落ちて木地きじが全く出ている。御菜には糸蒟蒻いとじゆんが一皿ついていた。自分は伏目いになつてこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝けさから水一滴も口へ入れていない。胃は全く空からである。もし空でなければ、昨日食つた揚饅頭あげまんじゆうと薩摩芋さつまいもがあるばかりである。飯の氣けを離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御櫃おはちの影を見るや否や食慾は猛然として咽喉元のどもとまで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交ぜまつ返しも氣に掛ける暇いとまなく、見栄みえも糸瓜へちまも棒に振つて、いきなり、お櫃はちからしやくつて茶碗へ一杯盛り上げた。その手数てかずさえ面倒なくらい待ち遠

しいほどであつたが、例の剥箸はげばしを取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。ちつともすくえない。指の股またに力を入れて箸をうんと底まで突つ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けつして茶碗の縁ふちを離れようとしなない。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、はてなど箸はしを休めて考えた。おそらく狐つまに撮つままれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢つやのない飯を一口搔かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿つたと思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土

である。この壁土が唾液つばきに和とけて、口いっばいに広がった時の心持は云うに云われなかつた。

「面つらあ見ろ。いい様さまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの気でいやがらあ。だから帰けえれって教おせえてやるのに」

と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫ひかになろうなんて、頭りようけんちげえっから料簡違ちがいだ」  
とまた一人が云った。

自分は嘲弄ちやうぶつうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを呑み下した。一口でやめようと思つたが、せつかく盛り込んだものを、食つてしまわないと、また

冷かされるから、熊の胆いを呑む気になつて、茶碗に盛つただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食欲のためではない。昨日食きのうつた揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始つてである。

茶碗に盛つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛よそう気にならなかつたから、糸蒟蒻いとごんじやくだけを食つて箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭いやなものを口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。その時は随分つらい事と思つたが、その後日ごに三度ずつは、必ずこの南京米むかに対わなくつちやならない身分となつたんで、さすがの壁土も慣なれるに連つれて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食つてしかるべき滋味と心得るようになって

からは、剥膳はげぜんに向つて逡巡しりごみした当時がかえつて恥はづかしい気持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更まんざら無理ではない。今となると、こんな無経験な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦やに病むところに廻めぐり合せて、現状を目撃したら、ことに因よると、自分でさえ、笑うかも知れない。冷かさな  
いまでも、善意に笑うだけの価値ねうちは十分あると思う。人はいろいろに変  
化するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自  
分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこま  
で続いたか分らない。ところへ急に金盃かなだらいを叩たたき合せるような音がした。  
一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃらん  
と時を句切くぎつて、拍子ひょうしを取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄きやうり

の聲が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空気に、じゃじゃん、じゃらんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジャンボーだ」

と一人が膝頭ひざがしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジャンボーだ。ジャンボーだ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになつて、窓の方へ立つて行った。自分は何がジャンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達のんびりしたせいか、自分もジャンボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元氣も出来た。つくづく考

えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押し  
行く。始終手を出さない相撲をとつて暮らしていると云つても差支な  
ろう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうして  
やっぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がつている上から背伸  
をして見下すと、斜に曲つてる向の石垣の角から、紺の筒袖を着た男が  
二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盃を押しつぶして  
薄っ片にしたようなものを両手に一枚ずつ持っている。ははあ、あれを  
叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃんと打ち合わせた。その  
不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、後の禿山に響いて、まだや  
まないうちに、じゃららんとまた一組が後から鳴らし立てて現れた。た  
と思つとまた現れる。今度は金盃を持っていない。その代り木唄——さつ

きは木唄と云った。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節なにわぶしで咄喊とつかんするような稀代きたいな調子であった。

「おい金六きんろうはいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴どなった。後向うしろむきだから顔は見えない。すると、

「うん金六に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覚悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がある事かと、自分も後を追っ懸かけて、首を捻ねじ向けると、——寝ている。薄い布団ふとんをかけて一人寝ている。

「おい金州きんしゅう」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

と怒鳴どなりつけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎むかえに出掛けた。被かぶつてる布団ふとんを手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろってば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつた男が、二人の肩に支えられて立ち上った。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那せつな、その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄ぞつとした。これはただ保養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで起居たぢいのできないような重体

の病人である。年は五十に近い。髯ひげは幾日も剃そらないと見えてぼうぼうと延びたままである。いかな癡どろも猛もうも、こう憔悴やつれると憐あわれになる。憐れになり過ぎて、逆にまた怖こわくなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れきよくの極ごく全く怖こわかった。

病人は二人に支えられながら、釣ひられるように、利きかない足を運こばして、窓の方へ近寄つてくる。この有様を見ていた、窓際の多た人にん数ずは、さも面白おもしろそうに噓はやし立てる。

「よう、金きんしゅう早く来いよ。今ジャンボ、が通るところだ。早く来て見ろよ」

「己おれあジャンボ、なんか見たかねえよ」

と病人は、無む体たいに引ひき摺ずられながら、気のない声で返事をするうちに、

見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障子の角まで押しつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃららんとジャンボーは知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延びをして見下した時、自分

は再び慄とした。金盥かなだらひと金盥の間に、四角な早桶はやおけが挟まって、山道を宙

に釣られて行く。上は白金巾しろかなきんで包んで、細い杉丸太を通した両端を、水

でも一荷頼いっかまれたように、容赦なく担いでいる。その担いでいるものま

でも、こっちから見ると、例の唄うたを陽気にうたってるように思われる。

——自分はこの時始めてジャンボーの意味を理解した。生涯しょうがいいかなる事

があつても、けっして忘れられないほど痛切に理解した。ジャンボーは

葬式である。坑夫、シチュウ、掘子ほりこ、山市やまいちに限って執行される、また執

行されなければならぬ一種の葬式である。御経の文句を浪花節なにわぶしに唄うたつて、金盃きんづきの潰つぶれるほどに音楽を入れて、一荷いっかの水と同じように棺桶かんのけをぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪氣まよひの極きよくで、また冷刻れいこくの極きよくである。

「金しゅう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云つてる。病人は、

「うん、見えたから、床とこん所まで連れてつて、寝かしてくれよ。後生ごしやうだから」と頼たのんでいる。さっきの二人は再び病人を中へ挟くわんで、

「よっしよいよっしよい」

と云いながら、刻きざみ足あしに、布団ふとんの敷敷いてある所まで連れて行いった。

この時曇った空が、粉になつて落ちて来たかと思われるような雨が降り出した。ジャンボ―はこの雨の中をたた敲き立てて町の方へくだ下つて行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々めいめい困いろ炉裏りの傍へはた帰る。この混雑じさく紛ごに自分もいつの間にかどうもう獐じよう猛もうの仲間入りをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意しよさの所作でもあつた。と云うものは火の気がなくなつてははなはだ寒い。あわせ拾一枚ではとてもしの凌しのぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微かすかな粒であるが、四方の秃山はげやまをこ罩こめ尽した上に、筒つつぬ抜けの空を塗ぬり潰つぶして、しとどと落ちて来るんだから、家うちの中に坐つ

ていてさえ、糠ぬかよりも小さい湿しめり気けが、毛穴から腹の底へ沁しみ込むような心持である。火の気がなくってはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも調から戯かわれずに済んだ。これはこっちから進んで獰猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獰猛として取扱うべき奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻さつきのジャンボーで不意に気が変なった成行なりゆきとして、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑ひやかしの種が尽きたか、あるいは毒突どくづくに飽きたんだか、——何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的小楽せになった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャンボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。——

「あのジャンボ、はどこから出たんだらう」

「どこから出たって御ジャンボだ」

「ことによると黒市組くろいちぐみかも知れねえ。見当けんとうがそうだ」

「全体ぜんていジャンボになつたらどこへ行くもんだらう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限てらぎりで留りとまつこねえ訳だ。どつかへ行くに違ちがえねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所ところだらうてえんだ。やっぱしこんな所ところ

かしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「己おれもそう思つてる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極楽だつて、やっぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。それ

で始めのうちは冗談だと思つた。笑つても差支ないものと心得て、口の

端をむずつかせながら、ちよつと様子を見渡したくらいであつた。と

ころが笑いたいのは自分だけで、囲炉裏を取り捲いてゐる顔はいずれ

も、彫りつけたように堅くなつてゐる。彼らは真剣の真面目で未来と云

う大問題を論じていたのである。実に嘘としか受け取れないほどの熱心

が、各々の眉の間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥して、さつ

きの笑いたかつた念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの

無鉄砲な人間が——カンテラを提<sup>さ</sup>げて、シキの中へ下りれば、もう二度と日の目を見ない料簡<sup>りょうけん</sup>でいる人間が——人間の器械で、器械の獣<sup>けだもの</sup>とも云うべきこの獰猛<sup>どうもうぐみ</sup>組が、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用<sup>いりよう</sup>のはずだ。実際自分が眼を上げて、囲炉裏<sup>いろり</sup>のぐりに胡坐<sup>あぐら</sup>をかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮<sup>いしゆく</sup>が手伝つて、七分方<sup>しちぶがた</sup>でき上つた笑いを急に崩<sup>くず</sup>したと云う自覚は無論なかつた。ただ寄席<sup>よせ</sup>を聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門<sup>びしゃもんさま</sup>様が大勢いて、これはと威儀を正さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獣半人の前にも嚴格の念を起したんだろう。その癖自分はいまだに宗教心と云うもの

を持つていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんと唸り出した。その唸り声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんのだが、ジャンボの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のよう<sup>うな</sup>に思われたんだろう。みんな眼と眼を見合した。

「金公きんこう苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸ってるのか、返事をしてるのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなにかかあ鼻の事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。

今更唸いままひびつたつてどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さなけりや流れ  
るなあ当り前だ」

と、やっぱり囲炉裏いろりの傍そばへ坐つたまま、大きな声で慰なぐさめている。慰めて  
るんだか、悪口あくぐちを吐ついているんだか疑わしいくらいである。坑夫から云  
うと、どっちも同じ事なんだろう。病人はただううんと挨拶あいさつ——挨拶に  
もならない声を微かすかに出すばかりであった。そこで大勢は懸合かけあいにならな  
い慰藉いしやをやめて、囲炉裏いろりの周囲まわりだけで舌したの用を弁じていた。しかし話題  
はまだ金さんを離れない。

「なあに、病氣せえしなけりや、金六きんむだつて鼻を取られずに済むんだあな。  
元を云やあ、やっぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病気をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を  
抵当に取られちまったんだから、正直のところ文句もんくの附けようがねえ」  
と賛成したものがある。

「若干いくらで抵当に入れたんだ」

と聞くと、向側むこうがわから、

「五両ごりょうだ」

と誰たれだか、簡潔に教えた。

「それで市いちの野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハ  
ハハ」

自分は囲炉裏いろりの側そばに坐ってるのが苦痛であった。背中の方がぞくぞく  
するほど寒いのに、腋わきの下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒なおつて、鼻かかあを受け出したら好なかかろう」

「また、市いちと入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼かせいで、もつと働ねに踏める抵当でも取った方が、気が利きいてらあ」

「違ちがねえ」

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑った。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝ひざを並べて畏かしこまっていた。馬鹿らしいと気がついて、胡坐あぐらに組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐をかくほど悠長ゆうちやうではなかつた。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天気あまの具合と、山が囲かこんでるせいで早く暗くなる。黙もくつて聞きいていると、

雨垂あまだれの音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇やんだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やっぱり降つてると云う方が当るだろう。窓は固もとり締め切つてある。戸外そとの模様は分りようがない。しかし暗くつて湿しめッぽい空気が障子しょうじの紙を透こして、一面に囲炉裏いろりの周囲まわりを襲おそつて来た。並んでゐる十四五人の顔がしだいしだいに漠然ぼんやりする。同時に囲炉裏いろりの真中まんなかに山のようにくべた炭の色が、ほてり返つて、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑あなの底へ滅入めいりこ込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競せり上がつて来る、——ざっと、そんな気分がした。時にぱつと部屋中が明るくなった。見ると電気灯が点ついた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食って、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降ってるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおむいて見な」

などと、口々に罵ののりながら、立って、階下段はしごだんを下りて行つた。自分は広

い部屋にたった一人残された。自分のほかにいるものは病人の金さんきんば

かりである。この金さんがやつぱり微かすかな声を出して唸うなってるようだ。自

分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を組みながら、横を向いて、金さんの

方を見た。頭は出ていない。足も引つ込かましている。金さんの身体からだは一

枚の布団ふとんの中で、小さく平ひらつたくなっている。気の毒なほど小さく平ひら

たく見えた。その内唸うちうなり声こゑも、どうにか、こうにかやんだようだから、

また顔の向を易むきえて、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが気に掛かってたまらないから、また横を向いた。すると金さんはやっぱり一枚の布団の中で、小さく平つたくなっている。そうして、森しんとしている。生きてるのか、死んでるのか、ただ森としている。唸られるのも、あんまり気味の好いもんじゃないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極きよくは怖こわくなって、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじゃないと、度胸を据すえてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段はしごだんを上がつて来た。もう飯を済ましたんだらうか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段の方を眺ながめていると、思も寄らないものが、現れた。——黒か紺こんか色の判然はつきり

しない筒服つつぽうを着ている。足は職人の穿はくような細い股引ももひきで、色はやはり同じ紺である。それでカンテラを提さげている。のみならず二人ふたありが二人とも泥だらけになつて、濡ぬれてる。そうして、口を利きかない。突つ立つたまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラを抛ほうり出すと、釦ボタンを外はずして、筒袖つつぽうを脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖ひろそでを、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やっぱり無言のまま、二人してずしりずしりと降りて行つた。するとまた上がつて来た。今度こんだのも濡れている。泥だらけである。カンテラを抛り出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上がつて来る。こう云う風に入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼球めだまを光らして、一遍だけはきつと自分を見た。

中には、

「てめえ手前はしんめえ新前だな」

と云つたものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。幸いさいわ今度はさつきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難ぶなんに済んだ。上がつて来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戯からかう暇がなかつたんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、上がつて来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まとまりようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰ていると、炭の中

にそう云う妄想もうぞうがちらちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火気かつきに煽あおられながら、むやみに踊をおどつてるような変な心持になった時に、突然、「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さっきの婆さんが、立っている。やつぱり襷掛たすきがけのままである。いつの間まに上がって来たものか、ちつとも気がつかなかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻って、艶子つやこさんになったり、澄江すみえさんになったり、親爺おやじになったり、金さんになったり、——被布ひふやら、廂髪ひさしがみやら、赤毛布あかげつとやら、唸うなり声ごえやら、揚饅頭あげまんじゅうやら、華巖けごんの滝やら——幾多無数の幻影まぼろしが、囲炉裏おどの中に躍り狂って、立ち騰のぼる火の気の裏うちに追いつ追わ

れつ、日向ひなたに浮かぶ塵ちりと思われるまで夥おびただしく出て来た最中に、はつと気がついたんだから、眼の前まへにいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし寝ると云う注意だけは明かに耳に聞えたに違ちがないから、自分自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後うしろの戸棚こたげを指さして、

「布ふ団とんは、あすこに這はい入いつてるから、独ひとりで出して御掛ごかけけなさい。一枚三錢さんぜんずつだ。寒いから二枚にまいはいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答こたえたら、婆おばさんは、それ限ぎり何なににも云いわずに、降くだりて行いつた。これ

で、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても剣突けんつを食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図さしずど通り戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかしいづれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分は一番上に乗つてるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地じは浅黄あさぎである。模様は白である。その上に垢あかが一面に塗りつけてあるから、六分方色変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどどろんどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗つき立ての伸のし餅もちを、金巾かなきんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわとはまるで縁故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平ひらく敷いた。それから残る一枚を平く掛け

た。そうして、襯衣シヤツだけになつて、その間に潜りもぐ込んだ。湿しめっぽい中を  
割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵かかとが畳の上へ出たから、また心持  
引つ込ました。延ばす時も曲げる時も、不断のように軽くしなやかに  
行かない。みしりと音がするほど、関節が窮屈こわばに硬張こわばつて、動きたがら  
ない。じつとして、布団の中に膝頭ひざがしらを横たえていると、倦怠だるいのを通り越  
して重い。腿ももから下を切り取つて、その代りに筋金入すじがねいりの義足をつけら  
れたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくつて  
重たい足を苦くに病やんで、頭を布団の中に突つ込んだ。せめて頭だけでも  
暖あつたかにしたら、足の方でも折れ合つてくれるだろうとの、はかない望み  
から出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭においよりも、

煩悶はんもんよりも、厭世えんせいよりも——疲れている。実に死ぬ方が楽らくなほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——畳から足を引つ込まして、頭を布団に入れるだけの所作しよさを仕遂しとげたと思うが早いか、眠ねてしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧あいまいであった。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺とけだろうが、頓着とんじやくはなかつたらう。正気の針を夢の中に引摺ひきずり込んで、夢の中の刺を前後不覚の床とこの下に埋うづめてしまう分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなど思いながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくり

とやられた。

今度は大きな眼を開いた。ところへまたちくりと来た。おやと驚く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとうやく気がつきがけに、飛び上るほど劇しく股の辺をやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に帰った。そうして身体中至る所がちくちくしているのを発見した。そこでそつと襯衣の間から手を入れて、背中を撫でて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹つたんだと思った。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲炉裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実は

この時分には、まだ南京虫ナンキンむしを見た事がないんだから、はたしてこれがそ  
うだとは断言出来なかつたが——何だか直覚的に南京虫らしいと思つ  
た。こう云う下卑げびた所に直覚の二字を濫用らんようしては濟まんが、ほかに言葉  
がないから、やむを得ず高尚な術語を使った。さてその虫を検査してい  
るうちに、非常に悪にくらしくなつて来た。囲炉裏ゑいろりの縁ふちへ乗せて、ぴちりと  
親指の爪で押し潰つぶしたら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭  
い臭気においを嗅かぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜みにくい事を  
真面目まじめにかかねばならぬほど狂きちがい違ちがひ染いじみていた。実を云うと、この青臭い  
臭気を嗅ぐまでは、恨うらみを霽はらしたような気がしなかつたのである。それ  
だから捕とつては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあて  
がつて嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰つて来た。今にも涙が出そうにな

る。非常に情ない。なさげ。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で大勢が一度にどつと笑う声が出た。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつて静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほかにたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかつた。向うの柱の中途から、窓の敷居にかけて、帆布綿ほもめんのようなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか気味が悪かつた。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜はずに出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭いがりあたまであつた。——広い部屋には、自分とこの二人を除のぞいて、誰もいない。ただ電気灯がかんかん点ついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑つた。さっきの連中か、または作業を済まして帰つて来たものが、大勢寄つてふざけ

散らしているに違ない。自分はぼんやりして布団のある所まで帰つて来た。そうして裸体はだかになつて、襯衣を振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮嚀ていねいに畳んで戸棚へ入れた。それから後あとはどうして好いか分らない。時間は何時なんじだか、夜よはどうていまだ明けそうにしない。腕組をして立つて考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪こらえ切れずに、

「えっ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦こすつて、左の足の甲で右の上を擦つて、これでもかと齒軋はぎしりをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣もとは固こりない。さつき毒突どくづかれた事を思い

出すと、南京虫よりよつぽど厭だ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚つ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずる畳の目を滑つてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直に立つ。またずるずる滑る。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫は出て来なかつた。下では時々どつと笑う。

いても立つてもと云うのは喩だが、そのいても立つてもを、実際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方のつかない運動をして、中途半端に紛らかしていた。ところがその運動をいつまで根氣にやつたものか覚えていない。いとど疲れている上に、なお手足を疲らし

て、いかな南京虫でも応こたえないほど疲れ切ったんで、始めて寝たもんだろう。夜が明けたら、自分が摺ずり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲うずくま踞まっていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過たつにつれて、だんだん痛くなくなったのは妙である。その実、一箇月ばかりしたら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ転がってるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。もつとも南京虫の方でも日ひか数ずを積むに従つて遠慮してくるそうである。その証拠には新来きたてのお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛いじめるが、少し辛抱していると、向うから、愛想あいそをつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食つてる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方に

それだけの品格が出来て、シキ臭くなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものがあつた。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質がよく似ている。おそらく坑夫ばかりじゃああるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてるんだらう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括するところに面白味があつて、哲学者の喜びそのうな、美しいものであるが、自分の考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼ねをしたり、贅沢を云つたりするんじゃないやなくて、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだらうと思う。虫は依然として食つてるが、食われても平気でいるに違ない、もつとも食われて感じないのも、食われなくて感じないのも、趣こそ違え、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云っている。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつとも判然とは降っていない。雲の濃いのが糸になり損なつて、なつただけが、細く地へ落ちる気色だ。だからむやみに濛々とはしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透いて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至つて乏しい、潤のない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思われるほど赤く禿げてぐるりと自分を取り捲いている。そうして残らず雨に濡れている。潤い気のないものが、濡れているんだから、土器に霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その癖寒い気持がする。それで自分は首

を引つ込めようとしたり、ちよつと眼についた。——手拭てぬぐいを被かぶつて、藁わらを腰に当てて、筒服つつぽうを着た男が二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちよつと昨日きのうジヤン、ボ一の通つた路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼして気の毒なほど憐れである。自分も今朝からあなるんだなど、ふと気がついて見ると、人事ひとごととは思われないほど、向へ行く手拭てぬぐいの影——雨に濡ぬれた手拭の影が情なさけなかつた。すると雨の間からまた古帽子が出て来た。その後あとからまた筒袖姿つつそですがたがあらわれた。何でも朝の番に当つた坑夫がシキへ這はい入る時間に相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段はしごだんを上あがつて来る。来たなと思つたが仕方がないから懐手ふくをして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとから

また上がってくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちやいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰てもちぶさた過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落ついぢやないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子きむすこである。下りて見ると例の婆さんが、襷たすきがけをして、草鞋わらじを一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢であつた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門口かどぐちの方へ行つた。まるで相手にしちやいない。自分には

あつちの見当けんとうがわからなかつたが、とにかく婆さんの出て来た方角だ

ろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中に

四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちが据すえてある。あの中に南京米ナンキンまいの炊たいた

のがいっぱい詰つてるのかと思つたら、——何しろ自分が三度三度一箇

月食つても食い切れないほどの南京米なんだから、食わない前からうん

ざりしちまつた。——顔を洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前

へ立つて、冷たい水で、申し訳のために頬辺ほつぺたを撫なでて置いた。こうなる

と叮嚀ていねいに顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一步進むと、顔は

洗わなくつても宜いものと度胸が坐つてくるんだらう。昨日の赤毛布や小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ない。

顔はようやく自力で洗った。飯はどうなる事かと、またのそのそ台所へ上った。ところへ幸い婆さんが表から帰つて来て膳立てをしてくれた。

ありがたい事に味噌汁がついていたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、ざくざくと掻き込んだんで、今度は壁土の味を噛み分ないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯が済んだら、初さんがシキへ連れて行くつて待つてるから、早くおいでなさい」

と、箸も置かない先から急ぎ立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体が持つまいと思つてたところだが、こう催促されて見ると、無論御

代りなんか盛よそう必要はない。自分は、

「はあ、そうですね」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上あがり口くちに一人掛けている。

自分の顔を見て、

「御前おめえか、シキへ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたら、

「じゃ、いつしよに来ねえ」

と云う。

「この服装なでも好いんですか」

と叮嚀ていねいに聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這へ入れるもんか。ここへ親分えとこから一枚借いちめえりて来てやったから、此服こいつを着るがいい」

と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引なを抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着きいている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御仕着おしきせを着る始末はじまつになつたんだなと思おもいながら、緋かすりを脱ういで上下うへしたとも紺揃こんぞろいになつた。ちよつと見ると内閣の小使こしのようだが、心持こころから云うと、小使こしを拜命らいめいした時ときよりも遙はるかに不景気ふけいきであつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間どまへ下りると、

「おつと待った」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当てるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらぼちのような藁布団わらぶとんに紐ひもをつけた変挺へんてこなものだ。自分は初さんの云う通り、これを臀部でんぶへ縛りしばつけた。

「それが、ア、テ、シ、ゴだ。好よしか。それから鑿のみだ。こいつを腰こし所へ差し  
てと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあろうと云う鉄の棒で、先が少し尖とがっている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しっかり受け取ら

ねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌つちを差してよく坑あなの中が歩けるもんだと思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いものになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提さげるんだ」

とかンテラを出しかけたが、

「待ったり。カンテラの前に一つ草鞋わらじを穿はいちまいねえ」

草鞋わらじの新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ぶら下げたのは、大方これだろう。自分は素足すあしの上へ草鞋を穿はいた。緒おを踵かかとへ通してぐつ

と引くと、

「驚癡どじだなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指いびの股こを寛ゆるめろい」と叱しられた。叱しられながら、どうにか、こうにか穿くいてしまおう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初はつさんは饅頭まんじゅう笠がさとカンテラを渡した。饅頭まんじゅう笠がさと云うのか筍たけのこ笠がさというのか知らないが、何でも懲役人の被かぶるような笠がさであつた。その笠がさを神妙しんびょうに被かる。それからカンテラを提さげる。このカンテラは提さげるようにできてゐる。恰好かつこうは二合入りの石油せきゆ缶かんとも云うべきもので、そこへ油を注さす口と、心しんを出す孔あなが開あいてる上に、細長い管くだが食くつついて、その管くだの先がちよつと横へ曲まがると、すぐ膨ふくらんだかッ、プになる。このかッ、プへ親指おやぢさきを突つ込んで、その親指おやぢさきの力で提さげるんだから、指五本の代りに一本で

事を済ますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿<sup>は</sup>めるんだ」

と初さんが、勝栗<sup>かちぐり</sup>のような親指を、カンテラの孔の中へ突<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>んだ。旨<sup>うま</sup>い具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振つて見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとつて揺<sup>うご</sup>かして見たがやっぱり落ちなかった。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好<sup>よ</sup>ござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠<sup>かさ</sup>へ

あたった。仰向あおむいて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぼつぼつとあたった。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸むし返される。しかし雨の方が寒いんで、身体のほとぼりがだんだん冷めて行くような心持であったが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡ぬれながらも、毛穴から、雨を弾はじき出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。

入口はまず汽車の隧道トンネルの大きいものと云つて宜よろしい。蒲鉾形かまぼこなりの天辺てっぺんは二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧道トンネルに似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透すかして見た。奥は暗かった。

「どうだここが地獄の入口だ。這入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄の語気を帯びている。さつき飯場を出て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日のだ」

「新來だ」

と口々に罵っていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込められて物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥底にはきつと愚弄の意味がある。これを布衍して云うと、一つには貴様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見ろと云う事になる。もう一つは御気の毒だが来たって駄目だよ。そんな脂っこい身体で何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日のだ」「新來だ」と騒ぐうちに

は、自分が彼らと同様の苦痛を嘗めなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪えがたい奴だとの軽蔑さえ加わっている。彼らは他人を彼らと同程度に引き摺り落して喝采するのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足の下まで蹴落して、墮落は同程度だが、墮落に堪える力は彼らの方がかえって上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上「昨日のだ」と聞きたんびに、懲役笠で顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄したんだから、自分は少しむっとして、

「這入れますとも。電車さえ通つてるじゃありませんか」と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？ 豪義な事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と直すぐこなされるにきまつてる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シ、キの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入って見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおっかなくなり出したには降参した。雨が降っていても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかっている。それだのに初さんは中ちゆう腹ぼらでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。

「シ、キの中でおとなしくしねえと、すすのこの中へ抛ほうり込まれるから、用心しんしなくつちやあいけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留どまった。初さんの腰こしには鑿のみがあ

る。五斤の槌つちがある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」

と返事をした。

「よしか、分つたか。生きて出る料簡りようけんなら生意気にシ、キなんかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は独り言ひとごとのように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑あなの中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんと自分の耳へ跳はねつ返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入つたもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になろうと云う気も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖こわい商売なら——殺されるんなら——すのこ

の中へ抛なげ込まれるなら——すのことは全体どんなもんだろうと思ひ出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後うしろを振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。——あらがね 鉋ほうを抛り込んで、まと纏めて下へ降さげる穴だ。鉋といつしよに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這入るときは、これがシキならと思つた。聞いたほどでもないと思つた。ところが初さんに威嚇かされてから、いかな平凡な隧道も、大いに容子が變つて来た。懲役笠をたたく冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて気がついた。いくら曇つていてもやつぱり外が懐かしい。真黒な天井が上から抑えつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて来るように感ぜられる。と思うと、軌道を横へ切れて、右へ曲つた。だらだら坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくびしゃりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方

へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ触つて見ると、雨が降ったように濡れている。

「どうだ、尾いて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云つたなり、また二人とも無言になった。この時行く手の方に一点の灯が見えた。暗闇の中の黒猫の片眼のように光ってる。カンテラの灯なら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直じゃないが、とにかく見える。もし坑の中が一本道だとすれば、こ

の灯を目懸<sup>めが</sup>けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯<sup>ひ</sup>が点<sup>つ</sup>いている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦<sup>すれ</sup>々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑<sup>あな</sup>が四五畳ほどの大<sup>おお</sup>きに広<sup>ひろ</sup>がつて、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電氣灯が点<sup>つ</sup>いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対<sup>むか</sup>い合せに洋卓<sup>テーブル</sup>を隔<sup>へ</sup>て腰を掛けていた。表<sup>おもて</sup>には第一見張所とあつた。これは坑夫の出入<sup>でいり</sup>だの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、その当時には

何のための設備だか知らなかったもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃そろえて無言のまま、見張所の前に立っていたのを不審に思った。これは時間を待ち合わせて交替するためである。自分は腰のみに鑿つちを差してカンテラさえ提さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合わす必要もないものと見えて、すぐこの溜たまりを通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突っ込んで、ちよいと役人に断ことわったが、役人は別に自分の方を見向もしなかった。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚はばかってだろう、全く一言ひとことも口を利きいたものはなかった。

溜あなを出るや否や坑の様子が突然変った。今までは立ってあるいても、

背延びせいのみをしても届きそうにもしなかつた天井が急に落ちて来て、真直まっすぐに歩くと時々頭へ触さわるような気持がする。これがものの二寸も低かろうものなら、岩へぶつかつて眉間まげんから血が出るに違ないと思うと、松原をあ  
るくように、ありつたけの背で、野風のふう雑ざうにややつて行けない。おつかな  
いから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食つついて行つた。  
もつともカンテラはさつき点つけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四よつん這ばいになつた。おや、  
滑すべつて転んだ。と思つて、後うしろから突つ掛かりそうなところを、ぐつと足  
を踏ん張たつた。このくらいにして喰い留めないと、坂だから、前へのめ  
る恐おそれがある。心持腰から上を反そらすようにして、初さんの起きるのを待  
ち合あわしていると、初さんはなかなか起きない。やつぱり這はつてゐる。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さんはこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまふ。その声で自分は不審を打つた。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜もぐつてしまふ。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が

袋のなかに閉じ込められたように曖昧あいまいになる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透すかして見るとようやくやく分った。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭せまくなって、這わなくっちゃ抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四つん這いにならなくっちゃ仕方がないと諦あきらめをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけっして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカンテラを提さげている。左の手の平ひらだけを惜おし気もなく氷のような泥どろだか岩いわだかへな土つちだか分らない上へぐしゃりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような氣持がした。それでカンテラを下へ着け

まいとすると、右の手が顔とすれすれになつて、はなはだ不便である。どうしたもんだらうと、この姿勢のままじつとしていた。そうして、右の手で宙に釣っているカンテラを見た。ところへぼたりと天井てんじようからしずくが垂れた。カンテラの灯ひがじいと鳴った。油煙あぶが顎あごから頬へかかる。眼へも這入はいった。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当けんとうにあたるんだか、いつこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行つてしまった。頼たよりはカンテラ一つである。そのカンテラがじいと鳴つ

て水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかつたと安心する時分に、またぼたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終垂れていたんだが、灯が腰から下にあるんで、いっこう気がつかなかったんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちゃいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云った。

自分は這いながら、咽喉仏の角を尖らすほどに顎を突き出して、初さ

んの方を見た。すると一いつけん間ばかり向うに熊の穴見たようなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出ている。自分があまり手間取るんで、初さんが屈こてんでこつちを覗のぞき込んでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じゃ善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引つ込ましめて穴の外に立っている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉うれしやと狭い所を潜くぐり抜けた。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちゃ、シキへは一足ひとあしだつて踏ふん込こめつこはねえ。陸おかのよ  
うに地面はねえ所とこだくらいは、どんな頓珍漢とんちんかんだつて知つてるはずだ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云った。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにとただし書がきをつけて、その確実な事を保証して置くのである。自分は何か云い訳をするたんに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙っていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云っちゃまった。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつけて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしてでも好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚びつくりして稀有けうな顔をしていた。

「冗談じようだんじゃねえ。何が這入へってると思う。種油たねあぶらだよ、しづくぐらいで消けえてたまるもんか」

自分はこれでやつと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんに、坑あなの中がみんな響き出す。その響が収のまると前よりも倍静かになる。ところへかあん、かあんとどこかで鑿のみと槌つちを使つかつてる音が伝わつたって来る。

「聞えるか」

と、初さんが顎あごで相図あひづをした。

「聞えます」

と耳みみを峙そばだててしていると、たちまち催促そそぐを受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌きげんがいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられているせいだろうと思つた。いくら手苛てひどくきめつけられても、初さんの機嫌きげんがいろいろちは結構けつこうであつた。こうなると得えになる事がすなわち結構けつこうという意味になる。自分はこれほど墮落だらくして、おめおめ初さんの尻しりを嗅かいで行つたら、路みちが左の方に曲り込んでまた峻けわしい坂さかになつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後うしろも向かず声こゑを掛けた。その時自分は何となく東京の車夫くるまぶ

を思い出して苦しいうちにもおかしかった。が初さんはそれとも気がつかず下り出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になっている。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕様の高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になつて、いつしよに降りた。降りた時にほつと息を吐くと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑のなかで、空気の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体も冒されていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が変つた。

今度は初さんが仰向けに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑の幅も高さも逼つて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなつた。さすが熟練の功はえらいもんだと思ひながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に浮いてるよう足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がっくり落おちか、それでなくても、よほど勾配こうばいの急な坂に違ないと見当けんとうをつけた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をするばかり、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後うしろへ手を突いた。ところがこの所作しよふがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべつたり突いてしまった。ぴちやりと云つた。ア、テ、シ、コ、を伝わつて臀部でんぶへ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分は

しまったと思いいながらも直すぐ両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ぶら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運はせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗った。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや足の裏で敲たたいて見た。大丈夫なら手を離して

この堅いものの上へ立とうと云う料簡りょうけんであつた。  
「何で足ばかり、ばたばたやってるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久地いくじのねえ」  
と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立つた。

「まるで傘からかさの化物ばけもののようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑う気にもならなかつた。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かつたと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑つた。そうして、この時から態度が変わつて、前よりは幾分いくぶんか親切になつた。偶然の事がどんな拍子ひょうしで他の気に入らないとも限らない。かえつて、気に入つてやろうと思つて仕出しでかす芸術は大抵駄目なようだ。天巧てんこうを奪うような御世辞使はいまだかつて見た事が無い。自分も我が身が可愛さに、その後ごいろいろ人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨うまい結果が出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖こわいもんだ。用意をして置いた挨拶あいさつで、この傘の化物に対する

返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折って失敗するのは愚<sup>ぐ</sup>だど悟ったから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしている。ただ困るのは演舌<sup>えんぜつ</sup>と文章である。あいつは骨を折って準備をしないと失敗する。その代りいくら骨を折ってもやつぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折った失敗は、人の気に入らないでも、自分の弱<sup>ぼろ</sup>点が出ないから、まあ準備をしてからやる事になっている。いつかは初さんの気に入ったような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向って、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短<sup>みじけ</sup>えやな」

と云った。坑あなの中でカンテラを点つけた、初さんはたしかに日は短えやなと云った。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所まで行くと、初さんは、右へ曲った。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何町降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切って、だいぶ浮世とは縁が遠くなったと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすぼまって、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これ

は作事場さくじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉋脈かまがあるとすると、そこを掘りひろ拡げて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負うけおい仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五日くらいと踏んだ作事に半月以上食くらい込む事もある。こう云う訳で、シキシキのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つかれば、御構おかまいなくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、また一条ひとすじでもあるが、下へ折れて第一見張所えだみちのあたりからは、右へも左へも条路えだみちができて、方々に作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シキシキの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちようど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書蠹のむしが

本を食くらうと見立てても差さし支つかえない。つまり人間が土の中で、銅あかがねを食くらつて、食くらい尽すと、また銅を探し出して食くらいにゆくんでもやみに路がたくさんできてしまったのである。だから、いくらシ、キの中を通つても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑夫には逢あわない。かあんかあんという音はするが、音だけでは極きわめて淋さみしいものである。自分は初さんに連れられて、シ、キへ這はい入いつたが、ただシ、キの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をいなずまがたたしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。——稲妻形いなずまがたに段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢あわないものだから、はなはだ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢あつたら、大いに嬉しかつた。

見ると丸太まるたの上に腰をかけている。数は三人だった。丸太は四つや丸太まるたで、軌道レールの枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかとうてい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シ、チ、ユウが必要な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰ふたありを掛けて、残る一人が屈しやがんで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺つぼがある。伏せてある。一人がこの壺を上から抑おさえている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙げた。下から賽さいが出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが土の壁に突き刺してある。暗い灯ひが、ぎろりと光る三人の眼球めだまを照らした。光つ

たものは実際眼球だけである。坑は固もとより暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙けぶりを吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そうして動いている。

カンテラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判然はつきり見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭かたまが黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集かたまっていたから、なおさら変であったが、自分が這入はいるや否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺つぼが見えたのである。壺の下から賽さいが見えたのである。壺と、賽と、三人の異いな叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見ただ

ある。よくはわからない顔であった。一人の男は頬骨ほおぼねの一点と、小鼻の片傍かたわきだけが、灯ひに映った。次の男は額まゆと眉まゆの半分に光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持つていた、カンテラを四五尺手前から真向まっこうに浴びただけである。——三人はこの姿勢で、ぎろりと眼まなこを据すえた。自分の方に。

ようやく人間に逢あつて、やれ嬉うれしやと思つた自分は、この三対ついでの眼めだま球たまを見るや否や、思わずぴたりと立ち留とどつた。

「手前てまえは……」

と云い掛けて、一人が言葉を切つた。残る二人はまだ口を開ひらかない。自分も立ち留とどまつたなり、答こたえなかつた。——答こたえられなかつた。すると

「新しんめえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍そばにいる事も忘れて、ただおやつと思つた。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬かたくこわ張り掛けたところへ「新めえだ」と云う声が出た。この声が自分の左の耳の、つい後うしろから出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついてたなと思ひ出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもとへ引き返した。自分は一步わき傍へ退いた。初さんに前へ出てもらうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてるな」

とカンテラを提さげたまま、上から三人の真中に転がつてる、壺と賽を眺ながめた。

「どうだ仲間人は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合わなかった。やがて、四つや丸太の上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉しくなつて元気が出て来た。初さんの側へ腰をおろす。ア、テ、シ、コの利目は、ここです。で始めて分つた。旨い具合に尻が乗つて、柔らかに局部へ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩らんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかつたが、こう尻を掛けて落ちつくつくと、大きに楽になる。四人がい

ろいろな話をしている。

「ひろもと広本へは新らしい玉たまが来たが知ってるか」

「うん、知ってる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前めえは」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑った。これは這入はいって来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑っても笑わなくつても、顔の輪廓りんかくがほとんど同じである。

「随分手廻しがいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シキへ這入ると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだって、そうだろう」と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。その語調には妙に咏嘆の意が寓してあつた。自分はあまり突然のように感じた。

そうしているうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前はどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他のが、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場へ着くが早いか、今度は反

対に、儲からない儲からないうで立てつづけに責められるんで、大いに辟易へきえきした。しかし地じの底ではよもやそんな話も出まいと思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多めったな事を云えば擲はりつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云つて返事をしなければまたやりつけられる。そこで、こう云つた。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山やまには神様がいる。いくら金を蓄ためて出ようとしたつて駄目だ。金は必ず戻つてくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だ」  
だるま

と云つて、四人よつたりながら面白そうに笑つた。自分は黙つていた。すると四人は自分を措おいてしきりに達磨の話 시작했다。約十分余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑あなのなかに屈しやがんでるところを、艶つやこ子さんと澄江すみえさんに見せたらばと云う問題であつた。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさましいと云つて愛想あいそを尽かすだろうかと疑つて見たが、これは難なく気の毒がつて、泣くに違ないと結論してしまつた。それで一目ひとめくらいはこの姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜ゆうべ囲炉裏いろりの傍そばでさんざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。ところが今度は正反對

で、二人共傍そばにいてくれないで仕合せだと思った。もし見られたらと想像して眼前に、意気地いきじのない、大いに苛めいられている自分の風体ふうていと、ハイカラの女を二人描えがき出したら、はなはだ気恥わがずかしくなつて腋わきの下から汗が出そうになつた。これで見ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみか、少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅はばの利きかなくところだけを、女に見せたくなかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、誰にも隠かくしたいが、ことに女には隠かくしたい。女は自分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々は芝居しやく気ぎを出す。自分がア、テ、シ、コしりを臀しりに敷いて、深い坑のなかで、カン、テ

ラを提ひきげたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がっていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらいの大きな音がした。その音は自分の足の下で起ったのか、頭の上で起ったのか、尻を懸かけた丸まる太たも、黒い天井てんじょうも一度に躍おどり上ったから、分からない。自分の頸くびと手と足が一度に動いた。縁側えんがわに脛はざをぶらさげて、膝頭ひざがしらを丁ちようと叩たたくと、膝かから下がぴくんと跳はねる事がある。この時自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に来たような気がした。身体ばかりじゃない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返

りを打って、たちまち我れに帰った。音はまだつづいていいる。落雷を、土中に埋めて、自由の響きを束縛したように、渋って、焦って、陰に籠って、抑えられて、岩にあたって、包まれて、激して、跳ね返されて、出端を失って、ごうと吼えている。

「驚いちゃいけねえ」

と初さんが云った。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やっちまうかな」

と、鑿を取り上げた。初さんと自分は作事場を出る。ところへ煙が来た。煙硝の臭が、眼へも鼻へも口へも這入った。噎せつぽくって苦しいから、後を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんでですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳に伝えた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ないとまで思い詰めたくらいなのに、初さんはますます深く這入る気色だから、気味が悪いとは思つたが、何しろ自由行動のとれる身体ではなし、精神は無論独立の気象を具えていないんだから、いかに先輩だつて逃げていい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後をつけて出ると、むつとするほどの煙が向うから吹いて来たんで、こりや迂濶深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後を向く途端に、さっきの連中がもう、煙の中でかあん、かあん、鉞を叩いているのが聞えたんで、それじゃやっぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問を起して見たのである。する

と初さんは、煙の中で、咳せきを二つ三つしながら、

「驚かなくつてもいい。ダイナマイトだ」と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シキへ這入はいった以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だつて、シキへは這入れねえんだから自分は黙もくっていた。初さんは煙の中を押し分けるようにならず潜くぐつて行く。満更まんざら苦しくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思つた。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切つて、陸おかの上なら、大抵晴れ渡つた時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這はつてるように感じたり噎むせつぽく思つたのかも知れない。

そうすると自分の方が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾おいて行つた。また胎内たいたい潜りのような穴を抜けて、三四間ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股ふたまたになつている。その条路えだみちの突き当りで、カラカラランと云う音がした。深い井戸へ石片いしころを抛なげ込んだ時と調子は似ているが、普通の井戸よりも、遙はるかに深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間に、側がわへ当つて鳴る音が、冴さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間てまがかかる。けれども一本道を、真直まっすぐに上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微かすかな遠くであつても、洩もらすところなく上まで

送り出す。——ざっとこんな音である。カラララン。カカラアン。……  
初さんが留とまった。

「聞えるか」

「聞えます」

「ス、ノ、コへ鉈を落してる」

「はああ……」

「ついでだからス、ノ、コを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、

一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達はその傍そばまで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後うしろへ抜く拍子ひょうしに、大きな箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳敷にじようじきぐらいはあるだろう。箕に入れたばらの鉋あらがねを、掘子ほりこが抛なげ込んだばかりである。突き当りの壁は突立つったっている。微かすかなカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡ぬれて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗のぞいて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。自分は

板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もっと、出る」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇ちゆうちよした。これでさえ踏板はふすが外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退とく手間てまが一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないうようだが、ここでは平地ひらちの十間にも当る。自分は何分なにぶんにも躊躇ちゆうちよした。「出ろやい。吝けちな野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだらう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかつた。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それ

から先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這入るんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちゃ大変だと神経を起すと、後から背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退きな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体を見て、すぐ傍へ避けた。そうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退けるほどの距離まで退いた。掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣呑がるだろうと思いのほか、

容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁ふちから二尺ばかり手前まで出て、足を揃そろえたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃そろえた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端とたんに、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突っ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰おとさたもない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切ったと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入つてた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入つてた。その時初さんがこんな事を云つて聞かした。

「何になつても修業は要いるもんだ。やつて見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前めえが掘子になるにしたつて、おっかながつて、手先ばかりで抛なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心かんじんの穴へは這入はいりやしねえ。そうして、鉋あらがねの重みで引つ張り込まれるから、かえつて劍吞けんどんだ。

ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」  
と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度ス、ノ、コへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハハハハ」  
と笑つた。

後戻あとまどりをして元の路みちへ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫うように突き当った所で、初さんが留まった。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降参こうさんしたら、落第するにきまつてるから、我慢に我慢を重ねて、ここまで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだらうくらいの日算はあった。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留まって、一段落いちだんらくつけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程みちのりはけっして一丁や二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ごめんこうぶろうかしらと考えた。こう云う時の出

処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生へいぜい築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩れる場合のうちでもっとも顕著けんちよなる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。前申ぜんす通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りおようじゃないかと云う親密しんみつな場合も見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇おどしもあらわれていない。下りたかろうと焦じらす気色けしきは無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱ぶべつの色で持ち切っている。それは何ともなかつた。しかしその色の裏

面には落第と云う切実な問題が潜<sup>ひそ</sup>んでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思ひ切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穩かに同意の意を表<sup>ひょう</sup>した。なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切つ立つた、屏風<sup>びょうぶ</sup>のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子<sup>はしご</sup>が懸<sup>かか</sup>つてる。勾配<sup>こうばい</sup>も何にもない。こちらの壁にぴったり食つついて、棒<sup>くわ</sup>を空<sup>くう</sup>にぶら下げたように、覗<sup>のぞ</sup>くと端<sup>さき</sup>が見えかねる。どこまで続<sup>つ</sup>いてるんだか、どこで縛<sup>しば</sup>りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己おれが先へ下りるからね。気をつけて来たまえ」

と初さんが云った。初さんがこれほど叮嚀ていねいな言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おおかた神妙しんびように下りましようと思つたので、幾分いくぶんか憐愍れんみんの念を起したんだらう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈しやがんだ。と思うと、足からだんだん這入はいつて行く。しまいには顔だけが残つた。やがてその顔も消えた。顔が出てゐる間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまつた時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくつて、足をつま立てるようになして、上から見下みおろした。初さんは下りて行く。黒い頭とカンテラの灯ひだけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわない

と、下り損なうかも知れない。面目ない事が出来る。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さんのように、膝を地につけて、手で摺り下りながら、草鞋の底で段々を探った。

両手で第一段目を握つて、足を好加減な所へ掛けると、背中が海老のように曲つた。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真直に立つと、カンテラの灯が胸の所へ来る。じつとしてしていると燻されてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに応じて握り更えなくっちゃならぬ。おろそうとすると、指で提げてるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅多に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかつて灯が揉み潰されそうになる。親指へカッ、プを差し込んで、振子のように動かした時は、はなはだ軽便な器械だと思つたが、

こうなると非常に邪魔になる。その上梯子はしごの幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて来て恐怖が手伝う。そうして握り直すたんびに、段木だんぎがぬらぬらする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透すかして見ると、へな土が一面に粘ついている。上り下りのぼさがの草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗のぞいた。よせば善かったが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻まって、かたく握った手がゆるんで来た。これは死ぬかも知れない。死んじゃ大変だと、噛かりついたなり、いきなり眼を閉ねむった。石鹼球シヤボンだまの大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本当を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶつた眼の前に湧わいて出る石鹼球の中に、初さん

がいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目舞めまいのする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐらぐらと咄癡とつちて、死ぬ方が怖こわくなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛りついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑あなは暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立つた壁の向う側を降りているようだ。今度は二度目のせいめまいか、落ちるほど眩暈めまいもしなかつたんで、

よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はてなと思つた。ところへカンテラがまたじいと鳴った。保証つきの灯火あかりだが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬるぬるする段木だんぎを握り更かえ、握り更かえてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがヤッぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子を見ると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の梯子がついている。手を延ばすと届くように懸かけてある。仕方がないから、自分はまたこの梯子へ移つた。そうして出来るだけ早く降りた。長さは前と同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸かけてある。どうも是非に及ばない。

また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸っている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠だるくなつて、足が悸ふるえ出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇まつくらだ。自分のカンテラへはじいじいと点滴しずくが垂れる。草鞋わらじの中へは清水しみずがしみ込んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになつた。下り出すと足を踏み外はずしかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめつて逆さかさに頭を割るばかりだと思つと、どうか、どうか、段々を下り切る力が、どっから出て来る。あの力の出所でどころはどうてい分らない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染にじみ出すように来たから、自分で

も、ちゃんと自覚していた。ちょうど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくいのが、何しろ降りた事はたしかである。下読したよみをする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えていごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちょうど十五あつた。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸い一本道さいわだったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちや、どうだ」

と奨励しょうれいした。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的えみの笑を洩もらした。そこで自分も我慢のしついでだと観念して、

また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに従って路へ水が溜ためって来た。ぴちやぴちやと云う音がする。カンテラの灯ひで照

らして見ると、下谷辺したやの溝渠どぶが溢あふれたように、薄鼠うすねずみになつてだぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷たい。指の股が切られるようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨むぜんにも水中へ落さなくつちやならない。片足を揚げると、五位鷺ごいさぎのようにそのままで立っていたくなる。それでも仕方なしに草鞋わらじの裏を着けるとびちゃりと云うが早いか、水際から、魚の鰭ひれのような波が立つ。その片側がカ、ンテラ、の灯できらきらと光るかと思つと、すぐ落ちついてもとに帰る。せつかく平たいらになつた上をまたびちゃりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這入はいつて行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜くぐり抜けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われな不行先をあてにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつた水が急に脛すねまで来

た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がっくり落ちがして膝ひざまで漬つかつちまう。こうなると、動くたんびにざぶざぶ云う。膝で切る波が渦うずを捲まいて流れる。その渦がだんだん股ももの方へ押し寄せてくる。全く危険だと思った。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑あなのなかで、いっばいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなって来た。しかるに初さんは辟易へきえきした体ていもなく、さっさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後うしろから聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然として、ざぶりざぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬つかっているのは、仕事ができるはずがない。こうどぶつく

以上は、何か変事でもあるか、または廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒おされながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思つてるうち、水はどうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後うしろから初さん呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾身わがみを思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云う間際まぎわには単音たんいんの叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前まへを憚はばるだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留まつたなり、振り返つた。カン、テラを高く差し上げる。眸ひとみを据すえると初さんの眉まゆの間に八の字が寄つて来た。しか

も口元は笑っている。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰の辺あたりを、物凄ものすこそうに眺ながめた。初はつさんは毫ごうも感心かんしんしない。やっぱりぱりにこにこしている。出水でみずの往来わらいを、通行人でみずが尻しつぽんをまくって面白おもしろそうに渉わたる時のように見えた。自分もこれで疑うたがいは晴はれたが、根ねが臆おそ病びょうだから、念ねんのため、もう一度、

「大丈夫だいじゆうでしょうか」

を繰返くりかした。この時初はつさんはますます愉快えきげきそうな顔かほつきだったが、やがて真ま面目まじめになつて、

「八番坑はちばんだ。これがどん底どんぞこだ。水みづぐらいあるなあたりめえあ当前あたいめえだ。そんなに、おつ

かながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股<sup>また</sup>まで濡<sup>ぬ</sup>らしてついで行つた。

たださえ暗い坑<sup>あな</sup>の中だから、思い切つた喩<sup>たとえ</sup>を云えば、頭<sup>くちやみ</sup>から暗闇に濡れ

てると形容しても差支<sup>さしつかえ</sup>ない。その上本当の水、しかも坑と同じ色の水に

濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝<sup>くるぶし</sup>からだん

だん競<sup>せ</sup>り上がつて来る。今では腰まで漬<sup>つ</sup>かっている。しかも動くたんび

に、波が立つから、実際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れ

た所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるか

ら、つまりは一寸二寸と身体<sup>からだ</sup>が腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、

水で腹まで冷えて、二重に冷え切つて、不知案内<sup>ふちあんない</sup>の所を海鼠<sup>なまこ</sup>のようにつ

いて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞<sup>ほら</sup>のように深く開<sup>ひら</sup>いてる中

から、水が流れて来る。そうしてその中でかあんかあんと云う音がする。作事場に違いない。初さんは、穴の前に立ったまま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸るまで、屈んで洞の中を覗き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微かな灯を無理に広い間へ使つて、引つ張り足りないから、せつかくの光が暗闇に圧倒されて、茫然と濁っている体であった。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついている辺から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返ったものが、纏まって穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入へえつて見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じゃ止めやにして置こう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但し書がきをつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案あんの定釣じょうり出さ  
れた。

「明日あしたつから、ここで働くんでしょうか。働くとすれば、何時間水に漬かっ  
てる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくってもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になったんだろう。

「だって八時間は働かなくっちゃならないんでしよう」

「そりゃきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切ってらあ。だが心配しなくってもいい」

「どうしてですか」

「好いいてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙って歩き出した。二三步水をぎゅぎゅ

云わせた時、初さんは急に振り返った。

「新前しんめえは大抵二番坑か三番坑で働くんだ。よっぽど様子が分らなくっちゃ、ここまで下りちゃ来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑った。自分もにやにやと笑った。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減った。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝くるぶしまで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉うれしかった。それから先は、とんとん拍子びょうし

に嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいにはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のス、ノ、コから落ちて来た鉋あらがねを聚あつめて、第一坑へ揚げて、それから電車でシ、キの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうぶつた。いくら面白く運転する器械でも、明日あすの自分に用のない所は見る気にならなかつた。器械を見ないとするとこれで、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さんが帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬つかるのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡ぬれないで済む路を通つてくれた。それでも十間ほどは腫ふくら脛はぎまで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来たなど感づいて、往へそきに臍へその近所が

氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鶡いすかの嘴はしと善いい方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしようか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉快だつたが、しばらくすると、例の梯子はしごの下へ出た。水は胸までくらい我慢するがこの梯子には、——せめて帰り路だけでも好いから、遁のがれたかつたが、やっぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀しよくの棧道さんどうと云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、棧道さかせを逆に釣るして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものである。自分はそこへ来ると急に足が出なく

なつた。突然脚氣かっけに罹かかつたような心持になると、思わず、腰うしろを後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分が起つたんで、強いて形容すれば、疝氣せんきに引つ張られたとでも叙じよしたら善かろう。何しろ腰が伸のせない。もつともこれは逆棧道さかさんどうの崇たりだと一概に断言する気でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上つて、奮発たがの箍たががしだいしだいに緩ゆるんだのもたしかかな事実である。何しろ歩けなくなつた。この腰附こしづを見ていた初さんは、「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁へっぴり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」と云つたぎり、暗い所を潜くぐつて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。ア、テ、シ、コはこう云うときに非常に便利になる。御蔭で、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚れたりする憂いがないだけ、惨憺なうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬く曲つた背中を壁へ倚たせた。これより以上は横のものを豎にする気もなかつた。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。身体が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方相ひ合つて、生死の間に彷徨してたと見えて、しばらくは万事が不明瞭であつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸つて見たいよな気がしたが、だんだん心が昏くなる。と坑のなかの暗いのも忘れてしまふ。どつちがどつちだか分らなくなつて朦朧のうちに合体稠和して

来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆しゃば気つきであるから、いくら不透明でも正気は失われない。ちようど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈はげし過ぎて困る自分には——東京にも田舎いなかにもおり終おせおない自分には——煩悶はんもんの解熱剤げねつざいを頓服とんぷくしなければならぬ自分には——神経纖維の端はじの端まで寄つて来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もし驅落かけおちが自滅の第一着なら、この境界きょうがいは自滅の——第何着か知らないが、とにかく

終局地を去る事遠からざる停車場ステーションである。自分は初さんに置いて行かれた少時しばしの休憩時間内に、ほか図らずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆気と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあつた。正気を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域せばを狭められた片輪の心的現象とは違ふ。一般の活動をほしいまま恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が滅却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の差である。その最もうす淡い生涯しょうがいの中に、淡い喜びがあつた。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していたらう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったらう。ところが——ここでまた新しい心の活作用に現参げんざんした。

というのはあいにく、この状態が自分の希望と同じ所に留つていてくれなかつた。動いて来た。油の尽きかかつたランプの灯ひのように動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいせい十のものが、今は五になつて留まつていた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなければならぬ。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれしさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚していた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違な

い。だから理窟りくつから云うと、意識がどこまで降さがつて行こうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだんだんと競せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗あんちゆう中から躍おどり出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじゃ大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開あいた。

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通かよつて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじゃ大變だ」までが順々につながつて来て、そこで、ふつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作しよさになる。つまり「死ぬぞ」で命の方向轉換をやつて、

やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、一二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証拠しょうこには、眼を開いて、身の周囲まわりを見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残っていた。たしかに残っていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神は大嫌だいきらいだ。やっぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたまでであろうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようとは夢にも思い浮べなかつた。これだから自殺などはできないはずである。こう云う時は、魂の段取だんどりが平生と違ふから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないもの

だ。気をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身かげみにつき添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかったのは、己惚うぬぼれの強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかったんだろう。

そこへ初さんがひよつくり帰って来た。初さんを見るが早いか、自分の意識はいよいよ明瞭めいりょうになった。これから例の逆棧道さかさんどうを登らなくっちゃならない事も、明日あしたから、鑿のみと槌つちでかあんかあんやらなくっちゃならない事も、南京米ナンキンまいも、南京虫ナンキンむしも、ジャンボだるまも達磨も一時に残らず分つてしまひ、そうして最後に自分の墮落がもつとも明かに分つた。

「ちったあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登ってやろう」

と云うから、礼を云って立っていると、初さんは景気よく段木だんぎを捕つかえて片足踏ふん掛がけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾おいて来ねえ」

と振り返って、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になって、下から見上げると、初さんは登って行く。猿のように登って行く。そろそろ登ってくれる様子も何もありません。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切って登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う

通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子はしごに託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体うしろが後へ反それる。反れた重みは、両手で持ち応こたえなければならぬから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平ひらと五本の指で、このしめだか高を握らなければならぬ。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなった。手を離しさえすれば真暗闇まつくらやみに逆落さかおとしになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分かえんは七番目の梯子の途中で火焰のような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになった。

二三度上<sup>うわまふた</sup>瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼうつと  
している。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。手の甲で擦<sup>こす</sup>ろう  
と思うが、あやにく両方とも塞<sup>ふさ</sup>がっている。自分は口惜<sup>くやし</sup>くなった。なぜ  
こんな猿の真似をするように零落<sup>おちぶ</sup>れたのかと思つた。倒れそうになる  
身体<sup>からだ</sup>を、できるだけ前の方にのめらして、梯子に倚<sup>もた</sup>れるだけ倚れて考え  
た。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まつたと云  
い切つてもよろしい。何しろ動かなくなつた。また動けなくなつた。じつ  
として立っていた。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ清水<sup>しみず</sup>が沁み込  
むのも、全く気がつかなくつた。したがって何分<sup>なんぶん</sup>過つたのかと感  
じに乘らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外<sup>ひじょう</sup>たしかであるのに、  
眼だけが霞<sup>かす</sup>んでくる。いくら瞬<sup>まばたき</sup>をしても駄目だ。湯の中に眸<sup>ひとみ</sup>を漬<sup>つ</sup>けてる

ようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。癩かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食しひ締しばつて、両手で握にぎつた段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。——梯子の下では、死んじゃ大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生涯しょうがいにおける心理推移の現象のうちで、もつとも記憶すべき事実である。自分は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえって、實際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にしたい。

ア、テ、シ、コ、を尻に敷に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚りかかつていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づく径路を取るのが普通である。ところがその普通の径路を行き尽くして、もうこれがどん詰だと云う間際になると、魂が割れて二様の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切の手前まで行つて、急に反対の方角に飛び出して来る。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確實になる。

自分が梯子はしごの下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行つたものが、順路をてくてく引き返す手数てすうを省はぶいて、急に、娑婆しやばの真中に出現したんである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢あつた。自分は初さんの後あとを追つ懸けて登らなければならない。その初さんは、とつくに見えなくなつてしまった。心は焦あせる、気は揉もめる、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——万事が痛切である。自覚の強度がしだいしだいに劇はげしくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興ふんこうの極度に達すると、やは

り二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはその一つ、——すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打って、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特きせきである。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切つた途端とたんに、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上かつじょうより死に入る作用と名なづけている。この作用は矛盾のごとく思われるが実際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証拠しょうこ発奮して死ぬものは奇麗きれいに死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨うまく死に切れないようだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々いまいましい、死んじまえと思つた時は、手を離すのが怖こわくも何ともなかった。無論例のごとくどきんなどとはけつしてしなかつた。ところがいざ死のうとして、

手を離しかけた時に、また妙な精神作用を承当した。

自分は元来が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かったから、今まで浮気に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやって見せたいと云う念があった。短銃でも九寸五分でも立派に——つまり人が賞めてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴の瀑まででも出向きたいなどと思った事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊るのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があったから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目であったにしても、さほど差し逼ってはいなかったんだろう。しかしこのくらい断乎として、現に梯子段から手を離しかけた、最中に首を出すくらいだ

から、相手もなかなか深い勢力を張っていたに違ない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔けんかくもあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅沢ぜいたく過ぎたようだ。しかしこの贅沢心のために、自分は発作性ほっさせいの急往生を思いとまつて、不束ふつつかながら今日まで生きている。全く今はの際きわにも弱点を引張っていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心持後あとへ引いて、手の握にぎりをゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだって冴さえない。待て待て、出てから華嚴けごんの瀑たきへ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊しまつた。曇つた眼が、急に明かなくなつた。カンテラが燃えてい

る。仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で、誰も人のいない所で、日の目も見ないで、鋤と同じようにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかつても半獣半人の坑夫共に軽蔑されるのは無念である。是非共登り切つちまわなければならぬ。カンテラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければならぬ。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕のつくほど強く握つた。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カンテ

ラの灯は暗い中を豎に動いて行く。坑は層一層と明かるくなる。踏み棄てて去る段々はしだいに暗い中に落ちて行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカンテラを翻えすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかかつて、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻えす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉つて、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。動く手も動く足も見えない。手障足障だけで生きて行く。生きて登つて行く。生きる」と云うのは登る事で、登ると云うのは生きる事であつた。それでも――

梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登ったのか、天佑てんゆうで登ったのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚さとつた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じゃ気味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。えらいや」

と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子はしごの上でよつぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪わるかったから途中で休んでいました」と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困ったろう。途中って、梯子の途中か」

「ええ、まあそうですね」

「ふうん。じゃ明日は作業もできめえ」

この一言を聞いた時、自分は糞でも食えと思った。誰が土竜の真似な  
んかするものかと思った。これでも美しい女に惚れられたんだと思っ  
た。坑を出れば、すぐ華巖の瀑まで行くんだと思った。そうして立派に  
死ぬんだと思った。最後に半時もこんな獣を相手にしていられるものか  
と思った。そこで、自分は初さんに向って、簡単に、

「よければ上がりましょう」

と云った。初さんは怪訝な顔をした。

「上がる？ 元氣だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明あき目めくらめ。人を見損みそくなやがつて」と云いたかった。しかし口だけは叮てい寧ねいに、一言ひとこと、「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やっぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じょうだんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましよう」

と自分はむっとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行っちゃいけねえ、後あとから尾ついて来ねえ」

「そうですか」

「当前あたりめえだあな。人つけ。誰が案内を置おき去ざりにして、先へ行く奴があるかい、

何でい」

と初さんは、自分を払い退け<sup>の</sup>ないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折ったり、四つに這<sup>は</sup>ったり、背中を横<sup>よこ</sup>つ丁<sup>ちよ</sup>にしたり、頭だけ曲げたり、坑<sup>あな</sup>の恰好<sup>かつこう</sup>しだいでいろいろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようにある。畜生<sup>ちゆうじゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>つ腹<sup>はら</sup>で急ぎやがるなど、こつちも負けない気で歩き出したが、そこへ行くと、いくら気ばかり張<sup>は</sup>つていても駄目だ。五つ六つ角を曲つて、下りたり上<sup>あが</sup>つたり、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなった。と思うと、何とかして、何とか、てててと云う歌を唄<sup>うた</sup>う。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠<sup>こも</sup>つたように打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。

始めのうちこそ、追っついてやるから今に見ていると云う勢いきおいで、根限りこんかぎ這かったり屈かがんだりしたが、残念な事には初さんの歌がだんだん遠くへ行ってしまう。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのでててててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見当けんとうがついたが、しまいにはそのでてても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすがに茫然ぼうぜんとした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力じりきで日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年ながねん掘荒した坑あなだから、まるで土蜘蛛つちぐもの根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開あいている。滅多めったな穴へ這入はいるとまた腰きり水つかに漬つかる所か、でなければ、例の逆さかさの棧道さんどうへ出そうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行つたんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならぬ。どんな穴でも上りならば好いとす。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そうして迂路ついでいたら、どこかの作事場へ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。かう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷つていた。非常に気が急いで息が切れたが、めちやめちやに歩いたために足の冷たいのだけは癒つた。しかしなかなか出られない。何だか同じ路を往つたり来たりするような案排で、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶつけて割つちまいたくなつた。どつちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疔癩が起つた。どうも歩

けば歩くほど天井が邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋わらじの底で踏む段々が邪魔になる。坑総体が自分を閉じ込めて、いつまで立つても出してくれないのがもつとも邪魔になる。この邪魔ものの一局部へ頭を擲たきつけて、せめて罅ひびでも入らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華巖けげんの瀑たきへ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向うから一人の掘子ほりこが来た。ばらの銅あかがねをスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕みを抱だいてよちよちカンテラを揺ゆりながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくつて胸がどきりと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近寄るがものはない、向うでもこつちへ歩いて来る。二つのカンテラが一間ばかりの距離に近寄つた時、待ち受けたように、自分は掘子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼あおん蔵ぞうであつた。この坑

のなかですら、只事ただごととは受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵ちがひに違ちがひない。それで口を利きくのが厭いやになった。こんな奴の癖に人に調戯からかつたり、黽なぶつたり、辱はずかしめたりするの  
かと思つたら、なおなお道を聞くのが厭いやになった。死んだつて一人で見せると云う氣になった。手前共に口を聞くような安やすつぽい男じゃな  
いと、腹の中でしたしかに申し渡して擦すれ違ちがつた。向うは何にも知らないから、これは無論だまつて擦すれ違ちがつた。行く先は暗くらくなった。カンテラは一つになった。氣はますます焦慮いらいらつて来た。けれどもなかなか出ない。ただ道はどこまでもある。右にも左にもある。自分は右にも這入はいつた、また左にも這入はいつた、また真直にも歩いて見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少しく途方に暮れている鼻の先で、かあんか

あんと鳴り出した。五六歩で突き当って、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫がしきりに槌つちを振り上げて鑿のみを敲たたいている。敲くたんに鉤あらがねが壁から落ちて来る。その傍そばに俵わらがある。これはさつきス、ノ、コへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰っている。掘子ほりこが来て担かついで行くばかりだ。自分は今度こそこいつに聞いてやろうと思つた。が肝心かんじんの本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休んで行こうと云う気が起つた。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持つて来いの腰掛になる。自分はどさつとア、テ、シ、コを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんではない」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳にはたた敲击込まれるように響いた。高い影は大股に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張った、体格の逞たくましい男であつた。顔は背の割に小さい。その輪廓りんかくがやや判然する所まで来て、男は留まつた。そうして自分を見下みおろした。口を結んでいる。二重瞼ふたえまぶたの大きな眼を見張っている。鼻筋が真直まつすぐに通っている。色が赭黒あかぐろい。ただの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生のようけいべつに軽蔑

していたのに、——誓って死んでしまおうと覚悟をしていたのに、——  
大股に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしくなった。しかし、  
「何でこんな所を迷子まじついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意に俵の上へ腰をおろしたんでないと見極めた語調である。

「実は昨夕飯場ゆうべはんばへ着いて、様子を見に坑あなへ這入はいったばかりです」

「一人でか」

「いいえ、飯場頭はんばがしらから人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちました」

「先へ出た？ 手前てまえを置き去りにしてか」

「まあ、そうですね」

「太え野郎だ。よしよし今に己おれが送り出してやるから待ってる」

と云ったなり、また鑿のみと槌つちをかあんかあん鳴らし始めた。自分は命令の

通り待っていた。この男に逢あったら、もう一人で出る気がなくなつた。

死んでも一人で出て見せると威張つた決心が、急にどこへか行つてし

まつた。自分はこの変化に気がついていて、それでも別に恥かしいとも

思わなかつた。人に公言した事でないから構わないと思つた。その後人ご

に公言したために、やらないでも済む事、やってはならない事を毎度やつ

た。人に公言すると、しないのとは大變な違があるもんだ。その内かあ

んかあんがやんだ。坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐あぐらをかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入たばこいれを取り出し出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引ももひきに差し込んである上から筒袖つつぽうが被かぶさっていた。坑夫は旨うまそうに腹の底まで吸けむった煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅宇らおの中途を、煙草入の筒でぽんと払はたいた。小さい火球ひだまが雁首がんくびから勢いよく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋わらじの爪先つまさきへ落ちてじゅうと消えた。坑夫は殻からになつた煙管きせるをぷつと吹く。羅宇の中に籠こもつた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利きいた。

「御前おめえはどこだ。こんな所へ全体何しに來た。身体からだつきは、すらりとしていようだが。今まで働いた事はねえんだらう。どうして來た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」  
とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云

わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹の内なかで畜生あつかいに、口先ばかり叮嚀ていねいにしていたのはだ  
いぶん趣おもむきが違ちがう。自分はただ洗い攫さらい自分の思おもひを話してしまわない  
だけで、話しただけは真面目に話したのである。すこしも裏表はない。  
腹から叮嚀ていねいに答えた。坑夫はしばらくの間黙もくつて雁首かりげを眺ながめていた。そ  
れからまた煙草を詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開ひらいた。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育  
である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。  
最後に彼の使った漢語である。——彼かれは坑夫などの夢にも知りようは  
ずがない漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日きのうまで常住坐臥じょうじゆうざが使つかつてい  
たかのごとく、使った。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる

事がある。彼れは大きな眼を見張つたなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸くびを前の方に出して、胡坐の膝ひざへ片手を逆さかに突いて、左の肩を少し聳そびして、右の指で煙管を握つて、薄くちびるい唇の間から奇麗きれいな齒を時々あらわして、——こんな事を云つた。句の順序や、単語の使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤いやしい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがいい。青年は情じやうの時代だ。おれも覚おぼえがある。情の時代には失敗するもんだ。君もそうだろう。己おれもそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己おれの事情とは、どのくらい違ちがうか知らないが、何しろ察している。咎とが

めやしなない。同情する。深い事故わけもあるだろう。聞いて相談になれる身体からだなら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛けたおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、懐旧かいきゆうと云うのか、沈吟ちんぎんと云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑あなの中で、人気ひとけはこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球めだまに吸いつけられた。そうして彼の

云う事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はしないが、それが基もとで容易ならん罪を犯した。罪を犯して気がついて見ると、もう社会に容いれられない身体からだになつていた。もとより酔興すいきようでした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃みのがさない。おれは正しい人間だ、曲つた事が嫌きらいだから、つまりは罪を犯すようになつたんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄すてなければならぬ。功名なげうも抛なげたなければならぬ。万事が駄目だ。口惜くやしいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕とらえられなければならぬ。

(故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用した。)しかし自分が悪い覚おぼえがないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己おれの性質としてできない。そこで突つ走つた。逃げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜もぐり込んだ。それから六年というもの、ついに日光ひのめを見た事がない。毎日毎日坑の中でかんかんたた敲いているばかりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシキを出たつて構わない、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕つらまらないが、出ない。こうなりや出たつて仕方がない。娑婆しゃばへ帰れたつて、娑婆しゃばでした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪やぶから棒ぼうの質問に、用意の返事を持ち合せなかつたから、はつと思つた。自分の腹はら中にあるのは、昔むかしどころではない。一二年前から一昨日おとといまで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思つた。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮おさへるごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは、大抵みづく見悉した。でも出る気にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐おうとを催もよおしそうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗くつて狭せばい所だと思えばそれで済む。身体も今じゃ銅臭あかがねくさくなつて、一日もカンテ、ラの油を嗅かがなくなつちやいられなくなつた。しかし——しかしそりやお

れの事だ。君の事じゃない。君がそうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて来ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日で突ツつき殺されてしまう。それが氣の毒だ。いかにも可哀想だ。理想も何にもない鑿のみと槌つちよりほかに使う術すべを知らない野郎なら、それで結構だが。しかし君のような——君は学校へ行つたらう。——どこへ行つた。——ええ？ まあどこでもいい。それに若いよ。シキへ抛ほうり込まれるには若過ぎるよ。ここは人間の屑くずが抛り込まれる所だ。全く人間の墓所はかしよだ。生きて葬ほうふられる所だ。一度踏ふんだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない陥穽おとしあなだ。そんな事とは知らずに、大方ポン引びきの言いなりしだいになって、引張られて来たんだらう。それを君のために悲しむんだ。人一人を墮落させるのは

大事件だ。殺しちまう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をす  
る。他人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人だ。いちにんが、こうなっちゃ  
墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたって、悔くやんだって墮落  
しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君  
が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親がある  
か……」

自分はただ一言ひとことあると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」  
自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業についたらよかろう。学問  
のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよかろう。」

東京なら東京へ帰るさ。そうして正当な——君に適當な——日本の損にならぬような事をやるさ。何と云つてもここはいけぬ。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたらう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してやる」

安さんの言葉はこれで終つた。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理非人情を解しない畜類の發達した化物とのみ思ひ詰めたこの時、この人に逢つたのは全くの小説である。夏の土用に雪が降つたよりも、坑の中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟のよう  
に思われた。大晦日を越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺も記憶していたが、窮まれば通ずという熟語も習つた事

があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだからに思つて、芝居気を起しては困つていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違ふ。真から一万人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿つうふんの焰ほのおで、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻ひるがえし得るほどの力をもつて、自分の耳に応こたえた。

しばらくは二人して黙つていた。安さんは一応云うだけの事を云つてしまつたんだから、口を利きかないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいては安さんに済まない。心底しんぞこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのは

山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも強いて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇の両端がむずむずして、小鼻がびくついて来る。やがて鼻と口を塞かれた感動が、出端を失つて、眼の中にたまつて来た。睫が重くなる。瞼が熱くなる。大に困つた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐をかいたまま、黙つていた。その時次の作事場で鉦を敲く音がかあんかあん鳴つた。今考えると、自分と安さんが黙然と顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだか、それを正確に知つて置きたかつた。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山の中では有ろうはずがない。日の照らない坑の底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨を垂れて、

尊たつとい涙を流した舞台があろうとは、胡坐をかいて、黙然と互に顔を見守っていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草たばこを呑み出した。ふかりふかりと煙けむが出た。その煙が濃く出では暗がりに消え、濃く出では暗がりに消える間に、自分はようやく声が自由になった。

「ありがたいです。なるほどあなたのおつしやる通り人間のいる所じゃないでしょう。僕もあなたに逢あうまでは、今日限り銅山やまを出ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切つたら、

「そりゃなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやっぱり黙っていた。すると、「だから旅費はおれが拵こしらえてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云つて毫ごうも貰う気は起らなかつた。昨日飯場頭きのうはんばがしらの

合力ごうりよくを断つた時の料簡りようけんと同じかと云うと、それとも違ちがう。昨日は是非貰

いたかつた、地平じびたへ手を突ついてまで貰もらいたかつた。しかし草鞋わらじせん錢せんを貰もらう

よりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂たまきたいとこ

ろを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰もらいたくない。

好意むなを空むなしくすると云う点から見れば、貰もらわなければ済すまないし、坑夫

をやめるとすれば貰もらう方が便利だが、それにもかかわらず貰もらいたくな

かつた。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰もらつては恥

ずべき事だ、こちらの人格が下がるといふ念から萌きざしたものらしい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、自分の体面ていめんを損そこなう虞おそれがある。向うの好意こういを享うけて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらこちらも悦よろこばしいが、受けるべき理由がないのに、濫みだりに自己の利得のみを標準めやすに置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗きれなものである。自分は「旅費は頂きません」と断った。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸ふかして、煙管きせるを筒つつへ入れかけていた

が、自分の顔をひよいと見て

「こりゃ失敬した」

と云ったんで、自分は非常に気の毒になった。もしやるから貰って置け  
とでも強いられたならきつと受けたに違ない。その後ご気をつけて、人が  
金を貰うところを見ていると、始めは一応辞退して、後では大抵ふじこころ懐へ  
入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないん  
だろうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりゃ失敬した」と云って  
くれたんで、自分はこの形式に陥おちいらずに済んだのはありがたかった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍にぶった際だから、ことによれば、

旅費だけでも溜めた上、帰る事にしようと言ふ腹もあつたんで、

「よく考えて見ましよう。いずれその中うちまた御相談に参りますから」と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送つてやろう」

と煙草たばこ入を股引ももひきへ差し込んで、上から筒服つつつぽうの胸むねを被かぶせた。自分はカンテラさを提さげて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑あなは存外登り安かつた。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん這ばいになったら、かなり天井てんじょうの高い、真直まっすぐに立つて歩けるような路へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える所で留つた。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついて上

がると、軌道レールの敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくっちゃあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があつたら来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這入はいった。振り向いて、一口ひとくち礼を云つた時は、もうカンテラが角を曲つていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰つて来る。途中でいろいろ考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行ったら、今頃は何に成つていないか知らないが、どうしたつて坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないか

ら、ことによると、安さんが悪いんでなくって、社会が悪いのかも知れない。自分は若年じやくねんであったから、社会とはどんなものか、その当時明瞭めいりょうに分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌ろくなもんじゃなかうと考へた。安さんを鼻肩ひいきにするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思つていた。その人間がなぜ安さんのような好い人を殺したのかなおさら分らなかつた。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかつた。ただ安さんが可哀想かわいそうであつた。できるなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手に、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば

帰つても差支さしつかえない。安さんは人間から殺されて、仕方なしにここに生きて  
いるのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方  
が気の毒だ。

安さんは墮落したと云つた。高等教育を受けたものが坑夫になつたん  
だから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮落ば  
かりでなくつて、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さ  
んも達磨だるまに金を注つぎ込むのかしら、坑あなの中で一六勝負いちろくしょうぶをやるのかしら、  
ジャンボジャンボを病人に見せて調戯からかうのかしら、女房を抵当あてに——まさか、  
そんな事もあるまい。昨日きのう着き立ての自分を見て愚弄ぐろうしないものない  
うちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれ  
た。安さんは坑夫の仕事はしているが、心しんまでの坑夫じゃない。それで

も墮落したと云った。しかもこの墮落から生涯しやうがい出る事ができないと云った。墮落の底に死んで生きてるんだと云った。それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてかんかんたた敲いている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になった上として、できるだけ急ぎ足で帰って来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇やんだ。空はまだ曇っているが、濡ぬれる気遣きづかいはない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦すりながら、いそ近づいてくると、初さんは奇怪けげんな顔をして、

「やあ出て来たな。よく路みちが分つたな」

と云つた。自分が案内につけられながら、他ひとを置き去りにして、何とかして何とか、ててててと云う唄うたをうたつて、大いに焦じらして置いて、他おほまごが大迷まごつきに、迷まごついて、穴の角かどへ頭をぶつつけて割つて見ようとまで思つたあげく、やつとの事で安さんの御情おなざけで出て来れば、「よく路が分つたな」と空とぼけている。その癖親方が怖こわいものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算もくろみである。自分は石へ腰を掛けて薄笑うしろめいをしているこの案内の頭の上へ唾液つばきを吐きかけてやろうかと思つた。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留とどまらなくつつちやならない身体からだである。唾液を吐きかければ、喧嘩けんかになるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にス、ノ、コの中へ

ぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐がない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、こうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨くやったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけで、それより以外に賞める価値のある所作じゃないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者だと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡であった

た。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍そばまで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまっている。責任のある自分が、責任を抛ほうり出して、先へ坑あなを飛び出してしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭めいりょうに証拠しやうこだてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵かたきを打つだろう。無責任が露ば見るのは痛快だが——自分はけっして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流ヤソキョウリウの嘘うそはつかない。——そこまでは痛快だが、敵打かたきうちは大おおに迷惑する。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取つて平した地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変わらず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭が顔を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着たままである。

「帰つたか。御苦労だった。まああっちへ行つて休みねえ」

と云うが早い。初さんは消えてなくなつた。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つたまま、談話をした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりや大変だ。随分ひどかつたでしょう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙つて

立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭いやでたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やつぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかつた。こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体からだも魂も塩を懸かけた海鼠なまこのようにたわいなくなつた。その時飯場頭はようやく口を利きいた。奇麗きれいさつぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰つてね。健康の証明書を持って来なくっちゃいけない。——今日と——今日は、も

う遅いから、明日あしたの朝、行つて見て貰つたらよかろう。——診察場かい。  
診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたらう。あの青いペ  
ンキ塗りの家だ。うち。じゃ今日は疲れたらうから、飯場へ歸つてゆつ緩くり御休  
み」

と云つて窓を閉たてた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯場  
へ引返した。緩ゆつくり御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、  
緩くり寝られるくらいなら、こんなに苦しみはしない。起きていれば  
獐どうもうぐみ猛組、寝れば南京虫ナンキンむしに責められるばかりだ。たまたま飯ふたの蓋を取れば  
咽喉のどへ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた以上は、  
どうしても見て見せる。少くとも安さんが生きてるうちはある。シキの  
人間がみんな南京虫になつても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自

分も生きて働く考えである。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場へ帰って、二階へ上がった。上がると案のじよう大勢囲炉裏の傍に待ち構えている。自分はくさくさしたが、できるだけ何喰わぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐った。すると始まった。皮肉だか、冷評だか、罵詈だか、滑稽だか、のべつに始まった。

一々覚えている。生涯忘れないほどに、自分の柔らかい頭を刺激したから、よく覚えている。しかし一々繰返す必要はない。まず大体昨日と同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢いたくなくなった。例の夕食を我慢して二杯食って、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャンボの通った石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際

を、右へ上ると斜はすに頭の上に被かぶさっている大きな槐えんじゆの奥にある。夕暮の門口かどぐちを覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒服つつぽうの掃除をしていた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待つてたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ上あがれ」

見ると安さんは唐棧とうざんの着物まめしぼりに豆絞なか何にかの三尺を締めて立っ

る。まるで東京の馬丁べつとうのような服装なである。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺ながめて首を傾かしげて、

「なるほど東京を走ったまんまの服装なだね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあつたつけ。今じゃこれだ」

と両袖りょうそでの裾ゆきを引つ張つて見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑つていた。安さんは、

「ハハハハ根性こんじょうはこれよりまだ墮落しているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑つて立っていた。この時分は手持無沙汰てもちぶさたでさえあればにやにやして済ましたもんだ。

そこへ行くと安さんは自分より遙はるか世馴よなれている。この体ていを見て、

「さつきから来るだろうと思つて待つていた。さあ上れ<sup>あが</sup>」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救<sup>たす</sup>ける方の側<sup>がわ</sup>だと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上つて見た。部屋はやっぱ広いが、自分の泊つた所ほどでもない。電気灯は点<sup>つ</sup>いている。囲<sup>いろり</sup>炉裏もある。ただ人数<sup>にんず</sup>が少い、しめて五六人しかいない。しかも、それが向うに塊<sup>かたま</sup>つてるから、こっちはたった二人である。そこでまた話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆<sup>あき</sup>れている。

「あなたのおっしゃった事は、よく分つています。しかし僕だって、  
酔興すいぎょうにここまで来た訳じゃないんですから、帰るつたつて帰る所はあり  
ません」

「じゃやっぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」

と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」

と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意してい  
た安さんが急に嘔ふき出した。

「冗談云つちやいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出  
たくないた何の事だ。贅沢ぜいたくじゃねえか。そんな身分に一日でも好いから  
なつて見てえくらいだ」

「代れれば代つて上げたいと思います」

と至極真面目に云うと、安さんは、また噴き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなくなるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕も今日も散々苛責られました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵を打つてやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留まる気になった。あんな獍猛もこつちさえ強くなりやちつとも恐ろしいんだ、十把一束に

罵倒するくらいの勇気がだんだん出てくるんだと思った。そこで安さんに敵は取つてくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、気の毒そうな顔をして、呆れ返つていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのつて、そりゃ君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さいしないと、いにくいですから」

「せっかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけない」

自分は謹んで安さんの旨を領した。実際自分もその考えでいたんだから、これはけつして御交際の挨拶ではなかつた。それからいろいろな話をしたが、シキの中の述懐と大した変りはなかつた。ただ安さんの兄さん

が高等官になつて長崎にいと云う事を聞いて、大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだらうと思つにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さんが出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出ている。路は存外明るい、その代り大変寒い。裕あわせを通して、襦シヤツ衣を通して、蒲鋒形かまぼこなりの月の光が肌まで浸しみ込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩あり行き出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになつた。何の当分のうちだ。馴なればそう苦にする事はない。何しろ一万余人もかたまつ

て、毎日毎日いつしよに働いて、いつしよに飯を食つて、いつしよに寝  
ているんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前に墮落する事は  
できるに違ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通り  
に出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧いて出たま  
でで、墮落の内容を明かに代表していなかつたから、別に恐ろしいとも  
思わなかつた。それで、比較的元気づいて飯場へ歸つて来た。五六間手  
前まで来ると、何だかわいおい云っている。外は淋しい月である。自分  
は家の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そう  
したら、どうも這入るのが厭になった。月を浴びて外に立っているのも、  
つらくなつた。安さんの所へ行つて泊めてもらいたくなつた。一步引き  
返して見たが、あんまりだと気を取り直して、のそのそ長屋へ這入つた。

横手に広い間があつて、上り口からは障子で立て切つてある。電気灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中から出る。自分は下駄を脱いで、足音のしないように、障子の傍を通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほつと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金さんが平たく煎餅のようになって寝ている。それから例の帆木綿にくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方とも極めて静かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然としてただ広いものだ。自分分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみ着のまままで、ごろりと横になるか、または昨夕の通り柱へ倚れて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱へ倚り懸るのは苦しい。

どうかして布団ふとんを敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫ナンキンむしがいても寝られるかも知れない。それに蒲団ふとんの奇麗きれいなのを選よったらよかろう。ことさら日によつて、南京虫の数が違ちがわないとも限かぎるまい。といろいろな理窟りくつをつけて布団を出して、そうつと潜もぐり込んだ。

この晩の、経験けいけんを記憶きこくのまま、ここに書きつけては、自分がお話わしにならない馬鹿ばかだと吹聴ふいしちやうする事になるばかりで、ほかに何の利益りやくも興味きょうみもないからやめる。一口ひとくちに云いうと、昨夜ゆうべと同じような苦くるしみを、昨夜以上ゆうべいじやうに受けて、寝るが早はやいか、すぐ飛び起きとびおきちまった。起きた後のちで、あれほど南京虫ナンキンむしに螫さされながら、なぜ性懲しやうちやうもなくまた布団ふとんを引ひつ張り出して寝たもんだらうと後悔こうかいした。考えると、全くじつじつの自業自得じごうじとくで、しかも常識じやうじきのあるものなら誰たれでも避よけられる、また避よけなければならぬ自業自得じごうじとくだ

から、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭いやになつて、布団の上へ胡坐あぐらをかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫さされた。臀しりと股ももと膝頭ひざがしらが一時に飛び上がった。自分は五位鷲ごいさぎのように布団の上に立つた。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折つて、裸の身体中所嫌わず、ぴしゃぴしゃたた敲たたき始めた。それから着物を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚よりかかった。家うちが恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入はいつてる更紗さらざの布団と、黒天鷲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かかつた中形の搔捲かいまきが恋しくなつた。三十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲かいまきを懸かけて、暖あつたかにして楽々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。

それとも自分がいなくなつてから後は、机を据すえたまんま、空からん胴どうにしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲かきまも、畳たたんだなり戸棚とこにしまつてあるに違ちがない。もつたいないもんだ。父も母も澄江あやさんも艶子うらやさんも南京虫なんきんちゅうに食くわれな<sup>い</sup>で仕合しあせだ。今頃は熟睡じゅくすいしているだらう。羨うらやましい。——それとも寝ねられな<sup>い</sup>で、のつそつしているかしらん。父は寝ねられないと疝癩かんしゃくを起おして、夜中よなかに灰吹はいふをぼんぼんたたくのが癖くせだ。煙草たばこを呑のむんだと云いうが、煙草たばこは假託かこつけで、実は、腹立はらだ紛まれに敲たたきつけるんじやないかと思う。今頃はしきりに敲たたいてるかも知れない。苦にが々にがしい倅せがれだと思おもつて敲たたいてるか、どうなつたらうと心配しんぱの余あまり眼まなこを覚おぼまして敲たたいてるか。どつちにしても氣きの毒どくだ。しかしこつちじゃそれほどにも思おもつていないから、先方さきでもそう苦くにしちやまい。母は寝ねられな<sup>い</sup>と手水ちようずに起お

きる。中庭の小窓を明けて、手を洗って、棧さんをおろすのを忘れて、翌朝あくるあさよく父に叱ちられている。昨夜も今夜もきつと叱ちられるに違ちがない。澄江じやうけいさんはぐうぐう寝ねている——どうしても寝ねている。自分のいる前まへでは、丸まるくなったり、四角しやうかくになつたりいろいろな芸げいをして、人を釣つってるが、いなくなれば、すぐに忘わすれて、平生へいぜいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝ねる女おんなだから、是非ぜひに及およばない。あんな女おんなは、今まで見た新聞小説しんぶんせうせきにはけっして出て来きないから、始めは不思議ふしぎに思ったが、ちゃんと証拠しやうこがあるんだから確たしかかである。こう云いう女おんなに恋着こひづしなければならぬのは、よッぽどの因果いんがだ。随分憎にくらしいと思うが、憎にくらしいと思おもいながらもヤッぱり惚ほれ込んでいいるらしい。不都合ふごうな事ことだ。今いまでも、あの色の白しろい顔かほが眼前めさきにちらちらする。怪けしからぬ顔かほだ。艶子えんこさんは起きてる。そうして泣ないてるだろう。

はなはだ気の毒だ。しかしこつちで惚れた覚おぼえもなければ、また惚れられるような悪戯いたづらをした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくなくても仕方がない。気の毒がる事は、いくらでも気の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不断の白い飯も虫唾むしずが走るように食いたいが、それよりか南京虫ナンキンむしのいない床とこへ這入はいりたい。三十分でも好いからぐっすり寝て見たい。その後あとでなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚さめた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行って、顔を洗って、南京米ナンキンまいを食う。万事き昨日のうの通りだから、省はぶいてしまう。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病

院はおととい一昨日山を登つて来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道も家もうち間違えようがない。飯場はんばを出て二丁ばかり行くと、すぐ道端みちばたにある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さもかなりだけに、どじょうもぐみ獐猛組とはまるで不釣合である。野蛮人が病気をするんでさえすでに不思議なくらいだのに、病氣かかに罹つたものを治療してやるための器械と薬品と医者と建物を具そなえつけたんだから、世の中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合つて、小学校を建てて子弟を通学させてるようなもんだ。文明と蒙昧もうまいの両極端がこのペンキ塗の青い家の中でで出逢あつて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますびんびん蒙昧もうまいになってくる。下手へたに食い違つた結果が起るもんだ。と考なえながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺ながめている。せつかくの考

えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩くずれてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉し  
いだろうに、どれもこれも申し合せたように獐猛しやうまうの極致を尽している。  
あれじゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで思った。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈さいたような山の壁へ日  
が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、ま  
だ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色けしきは晴れが  
ましいうちに湿しつとりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を  
見ると、真蒼まつさおな色が笑えみ割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。  
昨夕ゆうべと今朝とではほとんど十五度以上も違うようである。道傍みちばたに、たつ  
た一つ蒲公英たんぽぽが咲いている。もつたないほど奇麗な色だ。これも獐猛

とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土たつきの廊下が地面と擦れ擦れすに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸かかつて、手前の右手に控所と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切つて、控所へ這入はいると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子窓ガラスまどには受附と楷書で貼はりつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片かみきれを出すと、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片を受取つて、あまりもしない眉まみえへ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺ながめた上、「こりや御前か」と、さも横風おうふうに云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、こう自分を軽蔑けいべつするんだか不平に堪たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいぎょうのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶あいさつが足りないと云わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれっ切り口を結んで立っていたもんだから、

「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸ガラスどを締めて出て行った。草履ぞうりの音がする。あんなにばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思った。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰って来ない。ぼんやりしている、眼の前にジャンボンボが出て来た。金きんさんがよっしよいよっしよいと担かつがれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思った。何のために薬を盛って、患者を施療せりようするのか、ほとんど意義を

なさない。こんな体裁ていさいのいい偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジャンボはーは嘸はしたいだけ嘸す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭重ていちょうの至りである。

「おいあっちへ廻れ」

と突然受附の声がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高いたけだかに突立って、自分を眼下へいげいに睥睨へいげいしている。自分は控所を出た。右へ折れて、廊下伝いに診察場へ上がったら、葉はの臭においがふんとした。この臭においを嗅かぐと等ひとしく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んでここの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命うんめいというんだらう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を知ってるだけで意味は分らなかつた。意味は分つても、納得なつとくがむずかしかつた。西洋人が筍たけのこを想像するように定義だ

けを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでいるシキとを結びつけて、一三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元来この椅子いすに腰を掛けている本人からしてが、何物なにものだかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭めいりょうに見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当けんとうがつかない。自分は、診察場と薬局とを

かねたこの一室の椅子に倚よつて、敷物と、洋卓テエーブルと、薬瓶くすりびんと、窓と、窓の外の外の山とを見廻した。もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅えの画と見えるだけで、その他ほかには何物をも認める事ができなかつた。そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やつぱり坑夫タイプの類型である。黒のモーニングしまに縞ズボンの洋袴えりを着て、襟あじの外へ顎あじを突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云つた。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹なかの内なかで云うべきほどの敬意が籠こもっていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業つて別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄介やっかいになっていました」

「親の厄介やっかいになっていた。親の厄介やっかいになって、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視みた上、いき

なり自分の鼻を撮つまんだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今こん度口を塞ふさぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこか悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片かみきれへ、何か書いて抛ほうり出すように自分に渡した。見る

と気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の下地したじである。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭においを嗅かいで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいよいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金きんさんのようによっしよいよっしよいでジャンボ、を見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャンボになつて、それから思う存分ほや嘔た立てられて、——もつとも新参だから嘔たしてくれものも、敲たたいてくれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——  
——どうなる事か自分にも分らない。それは分らなくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界がのべつ、のっぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢きたないものと感じていたが、かように万物を色

の変化と見ると、穢ないも穢なくないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分が懐手たててをしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華巖けいげんの瀑たきなどへ行くのは面倒になった。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきをせくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に吹き払われるまでは、ここにいるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にはほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であった。さつきはもったいないほど美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかつたんだろうと、しばらく立ち

留まつて、見ていたが、やつぱり美しくない。それからまたあるき出した。だらだら坂を登ると、自然と顔が仰向あおむきになる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖ほおづえを突いて、自分を見下みおろしている。さつきまではあれほど厭いやに見えた顔がまるで土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎らしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来ただだの人間である。意味も何も無い。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいを行くような心持で、親方うちの家までやって来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がらりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがないんだから、平生へいぜいならはつと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械の

ように挨拶あいさつをすると、娘は片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父おとつさん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭はんばがしらの娘だなど合点がてんしたが、ただ合点したままで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行って来ました」

「健康診断を貰って来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやったろうかと、始めて気がついた。

「持つてるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持つていたから、しわ皺を伸して親方に渡した。

「気管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりゃ困ったな。どうするい」

「やっぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするったって、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困ったな。しかしせっかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになつて、飯場へ歸つて来た。

その晩は平気で囲炉裏の側に胡坐をかいていた。坑夫共が何と云つても相手にしなかつた。相手にする料簡も出なかつた。いくら騒いでも、愚弄つても、よしんば踏んだり蹴たりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団は敷かなかつた。やはり囲炉裏の傍に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝をした。囲炉裏へ炭を継ぐものがないので、火の気がだんだん弱くなつて、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟の所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいつばいあつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだろうと思つて、また内へ這入つた。金さんは相変らず平たくなつて寝ている。金さんはいつ

ジャンボ、になるんだらう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだらう。安さんは六年このシキに這入つてると聞いたが、この先何年あらがね鉞たたを敲くだらう。やつぱりしまいには金さんのように平たくなつて、飯場の片隅かたすみに寝るんだらう。そうして死ぬだらう。——自分は火のない囲炉裏はたの傍に坐つて、夜明まで考えつづけにいた。その考えはあとから、あとから、仕切りしきなしに出て来たが、いずれも干枯ひからびていた。涙も、情なさけも、色も香かもなかった。怖こわい事も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところがないんでね、——少し困つたんだが。とうとう旨うま

い口を見附けた。飯場の帳附だがね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやってたくらいだが、せつかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができようと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋だ、やや豆だ、ヒジキだつて、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んでいて貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取つたと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。——なに力業ちからわざじゃないから、誰

でもできる仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合よりあいだからね。君がやつてくれるとこつちも大変便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御気の毒だ。月に四円だが。——食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかつた。ようやく安心したとまでは固かたり行かなかつた。自分の鉞山せんざんにおける地位はこれでやつときまつた。

翌日あくるひから自分は台所の片隅に陣取つて、かたのごとく帳附ちようつけを始めた。すると今まであのくらい人を軽蔑けいべつしていた坑夫の態度ががらりと変つ

て、かえつて向うから御世辞を取るようになった。自分もさつそく墮落の稽古けいこを始めた。南京米ナンキンまいも食つた。南京虫ナンキンむしにも食われた。町からは毎日ポン引びきが椋鳥むくどりを引張つて来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子を買つては子供にやった。しかしその後東京のちへ帰ろうと思つてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東京へ歸つた。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんな事実である。その証拠には小説になつていないんでも分る。

夏目漱石 なつめそうせき

慶応3年1月5日（新暦2月9日）江戸牛込馬場下横町に生まれる。本名は夏目金之助。帝国大学文科大学（東京大学文学部）を卒業後、東京高等師範学校、松山中学、第五高等学校などの教師生活を経て、1900年イギリスに留学する。帰国後、第一高等学校で教鞭をとりながら、1905年処女作「吾輩は猫である」を発表。1906年「坊っちゃん」「草枕」を発表。1907年教職を辞し、朝日新聞社に入社。そして「虞美人草」「三四郎」などを発表するが、胃病に苦しむようになる。1916年12月9日、「明暗」の連載途中に胃潰瘍で永眠。享年50歳。

## 坑夫

—こうふ—

電子書籍登録日

2011年1月7日

iNovel



**kaedebooks.com**

カエデブックス

著者 夏目漱石

収録 青空文庫

<http://www.aozora.gr.jp/>

電子書籍化 楓出版株式会社

<http://kaedebooks.com>

《作成No.0012》

※スマートフォン用の電子書籍として作成しました。

※著作権消滅作品(PD)

# *iNovel*

※ *iNovel* とはスマートフォンや携帯電話で読みやすくレイアウトされたPDF ファイル小説の総称です。



**kaedebooks.com**

カエデブックス

カエデブックスは電子書籍の明日を考えます。

